
月光下の円舞曲

凧竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光下の円舞曲

【Nコード】

N9793F

【作者名】

風竜

【あらすじ】

母親代わりの女性、時雨が2年前に失踪した経験を持つ、普通の高校二年生の高月刀也^{たかつぎとうや}は謎の女性と遭遇した事件をきっかけにより時雨の蒸発の謎と『機関』、そして背後で蠢く者達との奇妙な出来事に巻き込まれていく。

謎の強盗に襲撃され、成り行きで刀身が黒い刀を手に入れてしまい、『氣』の力を使い怪物を撃退するものの、急激な披露によって気を失う。そのころ夜月真那^{やつきまな}は自身がクラスメイトを焼殺するという奇妙な夢を見ていた。

彼らの秘密の謎は一体何を意味するのか？そして彼らが出会うとき
何かが起きる！？――7 / 7、いやあ、ゲーセンに通
うクソガキ共は強敵でしたね・・・

一話

「・・・ハア、ハア」

吐息すらもすぐに凍る冬の寒空の下、中年の男が走る

森の中を衰えてきた体力をふり絞って、駆ける必死の疾走

ここまでの距離を走破した体験は二、三年前までは順調満風の人生を送っていた彼からすれば信じられない事だ

彼の幸せだった家庭が壊れたのはほんの二年前の事である

二十数年間務めていた町工場が不況の煽りを受け潰れたのがきつかけだった

歳が四十の半ばを過ぎた地位もコネも莫大な財産すらもない中年男を受け入れてくれる企業は何処にもなく、彼は劣悪な環境で重労働を強いられる派遣の道を選び家族を養った

遠く離れた地域で一日十四時間の工場勤務をこなしながら、家族のために仕送りを続ける彼の姿は献身そのものと言えた

それが壊れたのは一週間前に露見した十歳年下の妻の浮気だ

予定を切り上げ一日早く我が家への帰宅を果たした男はベッドの上で抱き合う見知らぬ男性と妻のすがたを目撃して自分の中の何かが壊れてしまった

しばらくして彼が正気に戻ると彼の前は男と妻の顔面が潰れ、血の海が辺りを覆い尽くす光景が広がっていたのだ

そして、現在はその死体を自宅から五キロ離れた山中に捨てに来ていたのだった

男に罪悪感はない

妻は自分の苦労もそっちのけでどこの馬ともしれない若造に自分の体を弄ばせていた。当然の報いだ

そうして怨嗟の思いを心中で吐露しながら二人の死体を埋めた後の帰りでの事だった

「……………こんばんは

今宵は月が綺麗ですねえ」

突然、一作業終えたばかりの彼に声がかけられたのだ

「!?!」

それは、彼がスコップを引きずって麓に停めてある車へと向かう最中の時の事だった

男はすぐに声の聞こえた方を見上げてぎょっとする

高さ五十メートル程の広葉樹に細々とした、例えるならば子供の腕くらいの太さしかない枝に案山子のような影が直立している

その影が満月をバックに男を見下ろして笑っているような気がした

のは彼の気のせいだろうか

あまりにも非現実な光景に一瞬彼は疲労による夢か、はたまたストレスによる幻覚かと錯覚した程だ

「・・・誰だ？」

思わず、男は謎の人影に問うていた

しかしながら、緊張のあまり反射的に言葉を紡いだだけの声はか細く、半ば独白の様な形で発せられてしまった

だが、影には届いたのか風に溶け込むような中世的な声で問いに答えた

「誰か？」

はて？そう言われましても私は貴方が納得出来るような返事を返すことが出来ません

仮に私が本名を名乗りましても、表の社会で過ごしていらっしゃる貴方様には意味すら解せないと思いますし・・・」

そこで人影が本気で悩むような素振を見せ、枝から地面に着地してそのまま彼のそばまで歩み寄ってきた

「一体なんと名乗れば私の事を簡単に理解して戴けるでしょうか・・・」

（な、何だ？こいつは・・・）

彼は頸動脈の血液が冷水に変わったかのような怖気を感じた

とにかく悪い予感がする。一刻も早くこの奇怪な人物から離れないといけない

彼がそう思ったのも必然だったのかもしれない

こんな夜中に懐中電灯すら持たずに木の上でひたすら満月を見上げる男。奇怪な風景だとしか答えようのなかった

とにかくこの男が変人だという事は理解できる

確かに、先刻の奇怪な行動、理解不可能な言動からしたら誰しもが枝の上の奇人を警戒するだろう

しかし、それ以上に中年の男性は目の前の人物から一般人と異なる様子を微かにだが嗅ぎ取っていたのかもしれない

妻と憎たらしい愛人の顔面を判別不可能の程に破壊し、鋸で遺体をバラバラに分割した己よりも禍々しい気配を放つ青年をだ

彼は男の注意が逸れている内に半ば無意に後ずさりしていた

自分の脚はごく自然にすり足の要領を保ちつつ半歩ずつであるが静かに後退していく

「……ですから、自分の事を理解させるために自己紹介というのは相手に伝わるように行いべきなのです。」

近今では日本もグローバル化が進み、会話による相互理解の手法が複雑になってきています。だからこそ私は「……」

最早、会話の体すら成していない青年の奇妙な独白も、彼の耳には入ってこない

彼は細い木の枝に立っている人物の話の価値など聞く気にもならなかった

まずはこの男から離れて、死体を処理するのが先である

乗ってきた車が停めてある近くに崖があった。そこに死体を投げ入れてさつさと帰り、シャワーでも浴びて眠りに就きたいのだが、ここは人里からそう離れてはいない深いだけの森だ

もしかしたら明日登山者がこの森を訪れて来たとしたならばせつかく遺棄した死体も発見されてしまうかもしれない

そうなつては一大事だ。だからこそ慎重に捨てる場所を選ぶべきなのかもしれないが

しかし、この男に現場を見られていとなれば、、、？

（こいつも殺すしなくなる）

スコップを握る手から冷たい汗が滲みだす

現場を第三者の他人に見られたら終わりだ。通報され事が露見すれば冷たい監獄暮らしが待っている

無論、犯罪者の人権が擁護されているこの国においては一人二人の他人を殺したくらいで死刑にはなるまい

人格者を気取った左翼弁護士に罪の減刑を懇願し、十年程服役すれば出所できるほどに罪は軽くなるだろう

しかしながら、彼は妻を殺した上でようやく手に入れた自由をこんな事で失いたくは無かった

「おや？人の話も聞かずに去るとは失礼な方ですね。

最近の日本人はモラルの低下が進んでいると聞きますが、もしや貴方もそうですか？」

会話が成立するかも怪しいのだが、一応この青年が自分の所業を確認していないか探りを入れて話すでしょう

「すみません。変だとは思いますが私はこの辺りで深夜の散歩も兼ねて森林浴をするのが日課なんですよ

ハハ、変わった趣味だとは妻にも言われますがね」

妻を会話に組み込んだのは自らが動揺している証拠だろうか？それと、声も若干うわずっていたような気がする

自分はあまり嘘も吐いたことがない。怪しまれたらどうか？

「そうですか。では、貴方はなぜ重たそうにスコップを引き摺っているのですか？」

「あ、いやいや、それはですね、。」

彼は動揺した。この青年から逃げることはかり考えており、それ以外の事に気が回らなかったからだ

「で、で、ですからこれは、、、、」

「もしかして埋蔵金でも探しているのですか、それとも、誰かの死体でも埋めて来たのですか」

「そそ、そ・・・そんな事有るわけないでしょう」

確信に迫った質問を返され彼は焦る

チラリと横目で一瞬スコープ方を窺った

血は付いていない

当然だ。死体を埋めるために使ったスコープは凶器ではないからだ

本物の凶器、返り血を浴びた衣類はは遺体とは別の位置に埋めている

9

同じ山ではあるものの、わざわざ車を使って移動する場所に埋めたのだ。念を入れて搜索しない限りは警察ですら発見できないという自負もあつた

それにシャワーも念入りに浴びて体も洗った。傍目からは見て怪しまれるような要素は無い

「そうですか。ではこちらから一つ尋ねたいのですがよろしいでしょうか？」

変人にいちいち構ってられない。彼は青年を無視してその場から立ち去ろうとしたが

「貴方。血の匂いがしますよ」

その言葉を聞いた次の瞬間に青年に向き直った

「いったい何を言うかと思えば・・・」

噴き出した興奮と共にスコップを握る手に力を込め一気に青年に接近する

「いい加減にしろ。私は深夜の散歩を楽しんでいるだけだ
木の上で月見をしているあんたに変人呼ばわりされる謂れはない！」

（こいつは殺すしかない。何があれば自分のやったことを暴露するよ
うな連中がいれば、殺す）

青年はどう見ても体力があるとは思えないほど痩せている。重量のあるスコップで殴打した後に止めを刺す

死体の隠し場所を増やすのは面倒だが、仕方が無い

口封じは、すぐに終わる

彼は一気に青年に近づきスコップを振り上げた

しかし得物を振り下ろした次の瞬間の事だった

青年の痩せた体を打ち据えて、かの肉体を粉碎するかと思われた

だが、現実には男が振り下ろした重たく大きい鉄の鈍器は、いつの間にか青年の腕に握られていた細いナイフによって受け止められて

いた

「先程から貴方から殺気を感じたのでわざと一撃を受けてみました」

（なんだ？ 奴が持っているのは只のナイフなのに・・・）

青年は男が振り下ろしたスコップを、片手で持った一本のナイフで受け止めていた

男はスコップを持つ手に更に力を込める。しかしナイフとスコップでは後者の方が明らかに重量に分が有るにも関わらず、微動だにもしなかった

そして青年が細い得物で男の凶器を受け止めている時に細目がちだつた目が見開かれ狂喜に沸いた相貌が自分を捕えているのを確認してしまった

「ひ！」

男は恐ろしいと感じた。青年の細腕に同犢肩目に見ても重量を込めたスコップを押し返す筋力が有るとは信じられなかったからだ

青年に対し畏怖を覚え、スコップを押さえつける力が弱まったと同時に青年が苦も無さげに小さな得物でそれを弾き飛ばした

後ずさりする男に向かって青年が笑顔を向ける

「……………っ！」

この場にそぐわない嬉しそうな青年の視線に晒された男は獣の様な

叫び声を挙げて明後日の方向に駆け出した

青年は対して急ぎもしない様子でそれを追った

(・・・分からない。なぜ俺はこんな目に逢っているんだ?)

彼は幻惑していた

まるで覚めない悪夢の世界に迷いこんだかの様に感じる

さつきから空気が粘性のコールドールに変化したかのようにだ

息を吸いこみ肌寒外気を体内に取り込む一步一步を踏み出す度に足が重たくなっていく、舗装もなされていない険しい山道を走破するのは日頃は労働以外に運動なぞしない彼にとっては苦痛でしかありえなかった

それでも今は走り続けざるを得ない

止まれば、背後から迫ってくる男に何をされるかわからない

今は脅威から逃げる事しか考えられなかった

（くそ、いつまで追ってくるんだ・・・）

月光のみが照らす薄暗い森の中でも湿った落ち葉を踏みしめる足音は聞こえてくる

もう三十分ばかり走ったろうか？

それでも自分を追ってくる足音は止まない

「どうしましたか？早く逃げないと追い付いてしまいますよ。」

男の姿が見えないのに木々の向こうからはっきりと声が聞こえた

「！？」

懐中電灯等の光源を持参していなかった彼にとって、多少目が慣れたとはいえ月の光だけが僅かに照らすだけの森の暗いお闇の中で得体の知らない何者かに追われる恐怖は想像を上回る

街中でやくざに尾行されるのとは訳が違う。此処ではどんなに声を張り上げて、救いを求めても誰も助けには来ないだろう

唯独り、偶然によって脅威に追われる不幸な中年男。それが今の彼の現在であり、辛い現実となっていた

しかし、そんな彼の不幸もそろそろ終わりを迎えることになる

「あ！」

地面に根を張らした木の枝に彼の足が躓いたのだ

枯れた落ち葉の堆積した慣れない地形で長時間走り続けたので木の枝に爪先が引っ掛かったのも無理はないだろうが

「なんだ・・・もう終わりですか？仕方ないですね」

針金のような青年が闇の奥から姿を現す

その手に握られているのは先刻スコップを受け止めた銀色の凶器

「う、あああ」

彼は一瞬にして恐怖に追い立てられた。逃げようにも腰が引けて立ち上がれない

救いを求めるように地面を這う腕は、枯れ枝や雑草を掴むだけで彼が求める助けはどこにも無かった

怖じ気づく彼に青年は場違いとも呼べる爽やかな笑顔を浮かべながら言った

「人が話をしてる最中にいきなり走りだすなんてマナーがなってませんよ」

「や、やめろ。」

こ、こ、こつちに来るなあ！」

彼がいくら懇願しても青年は口元を円弧状に歪めるだけで、聞き入れはしない

「ほらほら、早く逃げてくださいよ
じゃないと私が面白くないじゃないですか。」

自分からの逃亡を促しながらも、青年は足を止めない

（おい・・・嘘だろ？何でこんな悪夢みたいな目に遭っているんだ？）
状況をうまく飲み込めず錯乱している彼に理解の猶予も与えること
またずに

笑顔の青年が凶器が振り下ろした

青年は満足していた

殺人犯の中年男とは言え、久しぶりに人間の肉を裂く事が出来たか
らだ

今は生首を解体している最中である

愛用のナイフを器用に使い、表皮を剥ぎ眼球を抉り出し徐々にピンク色の筋肉を削いで白い骨を晒していく

作業中の血臭や、手に残る生々しい感触なんかも全く気にならない
それどころかその解体行為はかれにとっての悦びの一つであり生き
がいでもあった

一般人には決して理解されないであろうその行為も彼にとっては愉
悦であり、遊びでもある

そもそも、彼には普通の人間が普通に持ち得るであろう道徳心や平
等心などには縁のない場所で生まれ育ってきたので、ヒューマニズ
ムなど持ちようがないし、興味すら抱かなかった

彼の人格の根幹にあるのは殺すか殺されるか弱肉強食の掟だ

人間を解体^{バラ}す事に快感を感じるのもそういった世界で育ってきたこ
とによる結果でしかない

幼児が親に与えられたボールを用いて遊ぶのとなんら変わらない、
当然の結果である

しかし、この国は人を殺さなくても生きていける

この国家は貧乏人から無理やり搾取を行う役人も、徒党を組んで女
子を狼藉を働くならずものも、気分次第で人民を虐殺する軍隊も表
向きには存在しない

では、一見混乱とは無縁の様に見えるこの場所になぜ殺人を是とす
る青年が居るのか？

その答えは未だ無残な姿になり果てた男の体で遊んでいる青年の天
上で漫然と闇夜に輝いている満月だけが知っているのかもしれない

二話

『昨日の深夜二時に一人暮らしの老婆の上森カナさん（68）の自宅が何者か侵入を受け。現金十六万円等が盗まれた事件の続報ですが、韓国籍のリ・ヨンジュ容疑者（26）が逮捕されました』

被告は二年前から日本に不法入国し滞在していた模様で、強盗を繰り返し盗品の売買によって生計を立てていた模様。犯行の動機はパチンコで使う金が欲しかったとのこと。このニュースは続報が入り次第報道しますでは、次は天気情報です――

高月刀也は気の抜けた顔でテレビを眺めていた
ニュースの内容に興味は無い。一人だけの寂しい食卓にBGMが欲しかったかもしれない

しかし、彼も生まれてこの型ずっと独りきりというわけではなかった
彼も人間ならば自身を生んだ親も存在するのだ
父親はなぜか会ったことが無い、母親の女手一つでここまで育てられてきた

只、二年前から何らかの理由で失踪しただけである

いつか帰ってきてくれるとは信じてはいる。しかしその思いも半年が過ぎ一年が過ぎ、二年目を迎えた今年に至るまでに諦めと諦観に変わっていった

初めの内はひょっこり戻ってきてくれるものだ当たり前のように信じていた

しかし、その思いも時が経つにつれて摩耗していき今ではもう帰っては来ないだろうと殆ど諦めている

味気のないサラダを齧る

大量生産品にありがちな平均化されただけ味の無機質な食感

正直思うと、スーパーでトマトでも買ってきて適当に切り分けそのまま食べた方が安上がりだし美味しいのかもしれない

料理が出来ないと言う事でもない。寧ろ趣味と言い切れるくらいには嗜んでいるつもりである

只、今日は起きるのが遅かったためにやら無かったただけだ

（白けている。ガキじゃあるまいし）

あまり前向きに思考することの出来ない自分を心の中で嘲笑する

母親の事に諦めがつくと同時に彼の中で何かが変わった

昔抱いていた夢や将来といったビジョンがすっかり消えてしまったのだ

それは彼の母親である時雨が居なくなったのも理由の一つなのかもしれない

高校を受験する時も時雨は塾から帰って来た時に温かい夕食を出してくれた

コンビニで売られている大量に生産された無機質感漂う総菜ではないテーブルの上には刀也の帰ってきた時間に夕食を用意し、なるべく自身も一緒に食べるように調理時間の調整までしてくれた

惣菜屋の仕事が忙しいはずなのに息子と共に食卓を並べたがる時雨を当時は疎ましく思っていた

しかし、彼女が居なくなってからというもの。自分を大切に感じ、案じてくれた母の存在が実は大きな自分の支えになっていたのだと気付き始めた

家族がいない今の状況ならばそれが解る

残されたのは零が沢山並んだ預金通帳だけ

正直に言えば、ある程度贅沢をしつつ生活できる金額だった
しかし、刀也はそのお金に手を付けず、週末のバイトをしつつそこ
から得た収入でやりくりしている
母のお金にはなるべく手を付けなくなかったからだ
もともとこの家は借家ではないために余計な税金は払わなくていい
のだからそれなりにゆとりのある生活は保てた

しかし、高校から帰っても誰も居ない。存在するのは自分だけ。誰
も家で待っていてはくれない

一人だけの生活

無論、刀也も友人が居ないわけではない

幼稚園から小学校まで一緒に遊んだ保坂は高校こそ同じでたまに世
間話をするのだが最近は会う機会が減った

康盛や隆二はたまにバスケットをして遊ぶ仲だが高校からの友人である
せいか、昔の自分を知らない

ある時期の自分を知っていたのは母である時雨しかいなかった

あの忌まわしき記憶は今でも夢に見る、あの『事故』以前の記憶が
曖昧だ。母は父親について何も教えてくれなかった

真っ赤に染まった夕焼け

半壊し、フロントがひしゃげ、エンジン部が露出してもう動かないス
クランプと化した自動車

真っ赤に燃える炎をバックに立ちつくす生暖かく、ぐっしり濡れ
た”何か”を握りしめ何処かで呆然と立ちすくんでいる自分

そしてその前には――

（っと。そろそろ時間だな）

ニユースが7時半を示している事に気づき、暗く淀み始めた思考を無理矢理中断させ、学生鞆を手に持ち椅子に立てかけてあつた上着を乱暴に羽織つて袖を通してながら玄関へと向かう

いつもの事ながら強引にそうでもしないと体が全く動く気がしない
気力を振り絞つてでも、『生活』を演じなければならない

自分はあの時『居場所』守ってもらっていた

母親である時雨に

そして今は自分が守らなければいけない

母が戻ってきてても大丈夫なように時雨の『場所』をだ

そのために自分は生きている

彼女が戻ってこれるように自分の生活を続けておくことしかできないが、今は母が帰ってきてくれるのを待つただけだ

たとえどんなに確立が低くても母さんを笑顔で迎えられるように

時雨に「ただいま」と笑顔で言えるように

そう願いながらも玄関のドアを閉めた刀也はドアに鍵をかけ、高校へと向かう

見上げてみると、冬の寒空は青さはまるでコバルトブルーの絵の具で真っ白なカンバスを塗りつぶしたかのように快晴だった

三話

刀也の乗る自転車が軽快に坂を下っていく

下っているのだから当然、平坦に舗装された道を進むよりは断然に速度が違う。速い

冬のピンと張りつめたかのような冷たい大気を切り裂いて、銀色の車体は朝日を鈍く反射して坂を下りて行った

急激にスピードを出したことにより冷えた逆風が刀也自身の顔にぶつかってくるが、彼はそれを気にも留めずに相変わらずのスピードでチャリを飛ばした

（早く行かないと、遅れる）

毎度のことではあるが、彼はいつも始業のチャイムが鳴る10分前に家を出る

それは、先ほどのように憂鬱な気分でダラダラと朝食を食べているのも理由ののひとつではある

しかし、彼はそれ以上に・・・・・・・・・・朝には弱かった

その有様は普通には考えられないレベルに達しており、まだ時雨がいたころの高校受験の際には朝はいつも彼女に起こしてもらわなければ起きれない有様であり

専ら時雨が居ないときは刀也はいつも学校をズル休みしていた理由は無論のことながら寝坊である

しかしながらこうだらしく見えて彼はかなりの運動体質で帰宅部ながら体育の成績はオール5であり、只のグウタラといった体たらくでは無い為、

この寝坊体質については誰もが首を捻っていた

刀也自身も時雨が失踪してから目覚まし時計を3つつかつてなんとか朝の虚弱体質を改善しようと試みる点を見ると彼自身も努力しているのだろう

しかしながら未だに寝坊も多く遅刻、居眠りの点で担任に何回も指摘されることも多いのでまだまだ寝坊撲滅の道は遠いのもしいないが

坂の終わりに差し掛かり角を右に回るそこから高校への道のりは一直線だった

腕時計を見ると始業時間7分前

どうやら時間ぎりぎりで間に合いそうだ

1時間目の科目は数学の授業だ。担当の柴田は結婚できないOLのイメージをそのまま絵に描いたような30代前半の中年女で、刀也は前に注意を受けたことがあった

それは生徒に対する注意というよりもネチネチネチと美辞麗句で塗り固めた愚痴をぶつけられるようなものだった為、半ば自業自得だったとは言え

彼自身も二度と柴田のお世話になるのは御免だった

（とにかく、遅刻だけはしたくないな）

最悪、柴田が刀也よりも早く教室に着いていた場合は数学の授業をサボってでも、柴田とは顔を合わせたくは無かった

そんな懸念を抱きながら刀也は己が足に力を込め自転車を漕ぎ続けたまもなく住宅街を抜ける。公園の先の商店街を抜ければ間もなく学校だ

（あと5分、よし間に合うかもしれない）

早朝誰も居ない公園の角を曲がり、商店街のなかば付近にさしかかって刀也は心中で半分安堵する

このまま信号を無視して飛ばせばチャイムまでにはギリギリ高校に到着するだろう

大丈夫。うまくいくはずだ

このとき刀也は自分が遅刻しないでチャイム前に堂々と休室に入れる事をこれっぽっちも疑っていなかった

パチンコ屋の角からある人物が飛び出してくるまでは

「きゃっ！」

自分の進路上の右方向から誰かが飛びだしてきた

(ッ！)

刀也は反射的にハンドルを右に切って辛うじて接触を避けた

しかし突然大きく方向を変えた車体は残留した運動エネルギーによってそのまま刀也の制御空しくの横転し、彼の体は路上に投げ出された

なんとか受け身を取れたものの学生鞆の金具が拍子で外れ中に入っていた教科書が路上に散らばった

刀也はいきなり飛び出してきた人影に向かって怒鳴りこそはしなかったものの怒りをこらえた眼差しで突然の闖入者を見据えようとした、しかし

「ごめん。急いでいたとは言え注意力が足りなかったわ」

「お前・・・保坂・・・」

同年の知り合いであり幼馴染でもあるショートカットの髪形をした

少女を見据えて呆けたようにそんなことを口に出していた

保坂。彼女とは付き合いが長いのだが最近はおう機会が無かったのだ

「お前、何でこんな時間にこんな所に居るんだ？」

保坂は刀也の教科書を拾い集め、彼に手渡しながら言った

「忘れてたレポートがあつてそれを片付けてたら寝坊した」

「やっぱりお前は変わってないな。レポートなんざ二時間で済むだろう」

相変わらず馬鹿だな、守子」

「黙れ

私よりこの前のテスト結果が一、二番順位が上なだけでいい気にならないでよね」

「はいはい、判りましたよ自称『秀才』さん」

珍しい。守子をからかいつつも、口には出さなかったがそんな考えがふと刀也の頭に浮かんだ

彼の知っている保坂は男勝りでよく物申すタイプだが真面目で堅物で、読書家で行動力もあり『遅刻』といったマイナスの印象を持つ単語が

保坂のイメージと一瞬噛み合わなかったからだ

刀也は時計を見る

始業時間まであと3分。これからどうみても間に合いそうにない

「自転車」

「へ？」

保坂が刀也の自転車を指さして言った

「校則違反じゃない」

「う、うるせえ！」

刀也が弱弱しく言い返した。確かに自転車は校則違反だから校舎に入る前はいつも近くのスーパー駐車場で無断駐車している

しかし、いつもそうやって自転車登校してる訳ではない。これはあくまで遅刻しそうな時限定の秘密兵器だ

「今日だけだ。それよりお前どうするんだ？
このままじゃ俺もお前も遅刻決定だぞ」

右手の腕時計を保坂に見せる

「そうね。もう歩いて行くしかないわ」

「歩いてどうする。仮に走って行ってももう間に合わないぜ」

「分ってるわよ。高月に言われなくたってそんなこと」

保坂が一瞬泣きそうな顔になったのを刀也は見逃さなかった

「だからって今から歩いて行くのか？それだと絶対遅刻するぞ」

「だって仕方ないじゃない・・・」

刀也は倒れた自転車を起こしながら言った

「乗れよ。」

「えっ？」

「今から飛ばしたらギリギリだが間に合うかもしれない」

「え。でもそれって校則・・・」

「規則は破るためにあるんだって昔からいわれてるだろ？それに今は俺もお前も遅刻したくない。違うか？」

保坂はこくりと小さく頷くと荷台に座った
それを確認してか、刀也が呟いた

「捕まってる。飛ばすから振り落とされるぞ」

「え、何？」

「だから捕まってるって」

「どこに？」

「どこでもいいー！」

刀也が自棄になったように怒鳴ると、急いだように保坂は刀也の腰に手を回した

「行くぞ」

「ちょっと・・・いきなり飛ばすなっ。バカ刀也！」

「痛い！」

お、おい殴るな馬鹿。微妙なバランス崩れるだろうがっ！」

馬鹿馬鹿と連呼する2人の重量が乗った車輪が動き出し自転車がスピードを取り戻して加速を始める

二人の乗った自転車は先程とまではいかなくともゆっくりと少しずつ速度を上げて学校へと向かう

ちなみに刀也の腰にずっと捕まっていた保坂守子はどういう訳か顔が真っ赤になっていた

四話

時間的には遅刻であつたが幸いにして柴田は教室に来ていなかった
しかし、保坂と一緒に登校したことはクラス中で話題になっていた
ため、ある意味柴田の追求こそ説教を受けていた方が楽だったかもしれない

そして時が過ぎて今は三時間目。時限は体育

授業内容は球技の選択で刀也は野球やテニスではなくバスケットボールを選択していたために体育館での授業に参加している

そして、今彼はこの時間の恒例行事であるバスケット球技科目選択者による試合に興じて居たのだった

「パス、パス！」

「康弘、左に回せ！」

「抜かれた。誰かリング下まで行け！」

最近新築された木造と鉄筋で構成された体育館内を絶えることのない歓声と嬌声が響きあう

まだ昼食前に一時限残しているにもかかわらず、木造と鉄筋で構成された館内は昼休みとあまり変わらない賑わいを見せていた

この時間の教師は今時珍しい体育会系の人物なのにも関わらず、授

業中はある程度のノルマを生徒に課しその範疇を達成さえすればあとは生徒の自主性に任せるといった指導だった為か、生徒の間からは評判は良かった

そのせいかどうかは知らないが、彼が顧問を務めるラグビー部が三十人を超える人気を誇っている

しかし、そんな事を知らない刀也はリング内を縦横無尽に駆け巡り、相手方の選手と激しい攻防戦を演じていた

（案外、きついものだな）

味方の選手からボールを受け取っていた刀也は腰を落とした低い体制でのドリブルをこなしながら瞬く間にハーフラインを突破敵のゴールに一本入れるべく突っ込んでいった

前方に三人、リング下には二人の選手が刀也の猛攻を止める壁として立ち塞がっている

その中の一人の最近髪を染めたいと言っていた康盛が刀也の進路上に介入しようとした、がドリブルの持ち手を変えると同時の進路変更であっさり抜いた

後ろの二人は同時にブロックしてきたが行き先が完全に塞がれる前に突破した

そしてリング下、ゴール前の最後のディフェンサーは強引に押しつけ、ドリブルを止めボールを両手に持って強引かつ一気にリング下まで迫った後、全てを右手と指先の感覚に任せ滑らかかつ丁寧なボールをリングに向けて解き放つ

次の瞬間鮮やか過ぎるレイアップシュートがリングに決まり場内は歓声に包まれた

試合が終わり授業終了のチャイムが鳴った後、教室に帰る途中で隆二が刀也に声をかけて来た

「やったな、刀也」

「ほとんど適当にこなしたただけ。練習を積みれば誰だって出来る」

「でも、お前が相手にしていたチーム、現役のバスケット部が三人も居ただけ

ほら、あのリング下を守っていた奴とかレギュラーだったんだぞ」

「そうなのか？」

それまで勢いで喋っていた隆二はあちゃーとでも言いたげに頭を押さえて言った

「お前、もう少しクラスの事を知っとけよ」

「なんで？」

「いや、友達だろ」

「ああ、そうだな・・・」

咄嗟に返事を返してみたものの、刀也にはあまり実感が湧かなかった

確かにクラスの連中は大事だ、たまにゲーセンに行ったり繁華街に遊びに行くこともある

しかしそれだけだ

自分はクラスの仲間をはっきりと友人と認識している

しかしそれ以上ともそれ以下とも思っていない

確かに友人とも思っている、が

そういう認識はあった

しかしそれだけだ、実感が湧かない

自分が人と違うことは分かっている

でなければ『あの時』のようなことは起こり得ない

康盛や隆二が『あのこと』を知ったら確実に自分と距離を置くだろう

いや、それで済めばまだ良いかもしれない

「ん？どうしたんだ刀也」

「いや、激しい運動をしたあとって疲れるだろう。だから少しぼんやりしてたんだ」

「ふーん。そうかそうか」

でもお前ほどの人間があれだけで疲れるなんて想像がつかないがな
ア」

「おれだって悟空やルフィじゃないんだ。疲れる時は疲れるんだよ」

そう返すと隆二はさぞかし愉快そうに

「なんだそれ、新しいギャグか？」

と言って笑った

やはり自分は普通とは違うと刀也は思った

自分は人並み以上に運動をしても疲れることが殆どないのだ

それが何故かは分からなかったが、もしかすると自分は他人とは異なった異常な存在なのではないのか？と懸念を呼び起こしてしまう
時がある

中学のマラソン大会では全く休憩もせずが一番でテープを切った事もある

なぜかは分からないが、その一連の出来事が過去のあの事件に相当するのではないかと悩む時もある

それらの違和感を打ち明けられる人物は唯独り。失踪した母、時雨だけだった

何の確証も無い直観的なものかもしれないが、時雨は人とは違う自分に対する悩みを理解してくれているような気がしたのだ、だから、

「おい。ほんとにどうしたんだ刀也？」

「あ、ああ。そういえば次の授業は歴史だったよな」

一瞬、隆二はぽかんと間のぬけた様な表情を作り

「ああ、あいつの授業は退屈だよ」

とだけ返した

「俺も疲れてるし、昼飯前の昼寝の時間はもってこいだな」

「そういえば。あいつサヨクなんだろ？」

「なんであんなのが学校で教師やってるのさ？」

刀也は聞き覚えの無い社会教師の肩書は耳に覚えが無かったし、興味も湧かなかったので、適当に相槌を打って聞き流すことにした

「知らない。」

でも篠山が石頭教師ってのは事実だ。寝るときは気を付けろよ」

「分ってる、分ってるって。じゃあ俺購買部寄って行くけどお前も行くか？」

「いいよ。俺は食堂で食うから」

「あいよ。りょーかいっ」

隆二は教室とは反対方向にある向こう側の廊下へと走っていった

刀也は去っていく隆二の後ろ姿を眺めつつ平和だなあ。と呑気にそう思った

五話

刀也は窓の外に漂う雲をぼんやりとした面持ちで眺めていた

篠山の授業があまりに下らないからだ

年が50代にも差し掛かるであろう老年の社会教師である篠山は教科書内の記述をただ垂れ流すような意欲性の無い教師の模範でありこのクラスどころか、二年全体請け負う教師の中で柴田について生徒からの評判は芳しくなかった

しかも、この老人にはとんでもない悪癖が存在するのだった

授業の合間に暇を見つけると殆ど高確率の割合で旧日本軍の悪口を言うのだ

曰く昔の戦争行為は軍部が発狂して起こした大義も糞も無い侵略行為だとか、特攻隊は自殺志願者のアホがやることだとか、さつさと米軍に降伏すれば原爆も落とされず無駄な犠牲は出さずに済んだとか、生徒が全く興味を持たない太平洋戦争末期の祖国を罵倒しているらしかった

無論、人望がプラスどころか底辺レベルにまで嫌われている篠山の言う虚言などだれも気にしなかった為に、

社会の授業時間は専ら生徒たちがケータイでエロサイト見たり、漫画や雑誌を読んだり、昼寝したりといったような内職に勤しむ為のサービスタイムと化している

そんな様子だから篠山が受け持ったクラスにおける社会の定期テスト

ト結果における成績はあまり芳しいものではなく全六クラス中、尻から二番目の業績を遺していたため、専ら篠山の機嫌が悪い時は大抵の時に、過去の日本軍の罵詈雑言と共に生徒の成績に対する愚痴が吐かれていた

自ら招いた結果である癖にだ、もちろん篠山自分の失態を一筋も自覚してはいなかったのだが

そのお陰で生徒たちはますます社会の授業が嫌いになり成績は落ちていくといった負のスパイラルを招いていくのだった

刀也も篠山を嫌っている成績はの例の漏れず彼も社会の授業は昼寝か読書の時間と割り切っていた

こう見えて刀也がっこうにおける成績はそれほど悪いものではなかった

苦手な教科は殆ど無いといっても良かったし、成績は順位もクラスのトップ3に入っていた

特に勉強してる訳ではないがテスト前に教科書を数回読んだだけで大抵の事は理解できてしまうのだ

だから篠山の下らない授業なんかに耳を貸してやる必要もないし、刀也自身いい昼寝タイムだと思っている

霹靂の蒼空を流れる積乱雲を眺めているとそんなに疲れている訳でもないのに何故か眠たくなってくる。何故だろうか？

刀也は心地よい日差しで学ランの背部が温まってくるのを実感し、

教科書を立ててそこに隠れるようにしてうずくまり沈みゆく意識を
まどろみの底に委ねようとした

どうせ授業は後20分近くも有るのだ。少しくらい転寝しても大丈
夫だろう

刀也は篠山に気付かれないように教科書を立てるとそこに頭を隠す
ようにして蹲った

瞼を閉じるとすぐに意識が混濁とし、そのまま消えていった

「おい」

「………ん？」

声が聞こえた

「おい。起きろ」

まだ眠気を訴える瞼を意志の力でこじ開けて声がした方に顔を向ける

声の発生源は自分のちかくだった。当然だ

何故なら刀也の席の前に怒りで震えた篠山が立っていたからだ

「おい、お前。私の授業で堂々と寝息を立ててるなんていい根性だな？」

「あ、スイマセン」

とりあえず謝罪の体を取ってその場は逃れようとした

「お前、私を舐めてるのか？」

どうやら形だけの謝罪は気の小さな老年教師には通じなかったらしい

篠山は眉間に掘ったような皺を歪ませ、火が噴き出るかのように顔を紅潮させて刀也を睨みつけていた

「お前授業に参加する気が無いのならこの学校から出て行け」

篠山は寝ぼけたことを言っている

たかが一教師の分際で生徒を教室から退去させることは出来ないし、場合によっては口五月蠅いだけのPTAに篠山自身を糾弾する機会を与えてやるだけに過ぎない

そうなると困るのは篠山自身だ。下手をすると休職処分を受ける羽目にもなりかねないだろう

生贄か。と刀也は思った

そう。一人暮らしの自分ならば過保護気味な親に告げ口される必要もない為に、篠山のストレス解消のに都合が良いのだと

尤も時雨が居たとしても刀也自身は彼女に篠山の処罰を求めたりしないだろう

彼自身そうした卑劣な行いを嫌っていたし、時雨自体もそれを支持するはずがない

規則を濫用しての復讐は正真正銘の弱者がとる手段だと解釈していたから

「おい。何か言ったらどうなんだ？」

篠山が刀也の肩を強引に揺さぶった

刀也はそれに無視という形で抵抗する

篠山の茶番に付き合っただけやる義理は無い、この男の人間性は理解できた。どうしようも無い下衆の挑発に乗って切れてやるのも馬鹿らしいと考えていたからだ

「お前、私を舐めてるのか？」

文体は疑問形だったが、篠山の口調は間違いなく断言していた

「いいえ」

あんたの存在なぞ眼中にも入っておりません。と心の中で付け足した

「ふざけるなよ高月刀也。お前はこの私の授業を全く受ける気が無いからグウタラと昼寝なんぞ出来るんだろう？」

この男の小心さに思わず声に出して笑いそうになった。つまらない授業にしているのはそちらの方だろうと

「いや、だから違いますって」

「だったらなんで寝てられるんだ？」

授業を受ける気が無いんだったら出て行ってもらおうか」

（あんたが出ていくという選択肢は無いのか？）

「それは出来ません」

「何でだ？授業で寝ているという事は真面目に勉強している生徒にとって迷惑だろう？」

篠山は授業をつまらなくしている本人が自分自身であることに気づいていないのだろうか？

刀也は横目で教室に飾られている時計をチラリと除いた

休憩まで後一、二分

このまま篠山を挑発し続けると休憩が短くなってしまう可能性があった

不味いな。と少しだけ感じた。どうやら最悪のタイミングで篠山に絡まれてしまったようだ

もう少し考えてから挑発するんだった

篠山はまだ怒り心頭だ、とても数分で収まるようには見えない

あまりに軽率だった自分を少しだけ恥じた。食堂は混む、下手をすれば飯を食べられなくなる恐れがあった

「おい。聞いているのか！」

篠山はもはや授業なぞ関係ないといった風に絡んでくる。おそらく刀也が自分の非を認めるまでいびり続ける様子らしい

刀也はため息を吐きたくなった。もはやこいつの言い分を吞まないと昼飯にありつけそうにない

だからといって屈したくは無い、いったいどうすれば、、

その時だった、床に落下した鉄製のペンケースが教室に甲高い音を響き渡らせたのは

篠山も刀也もくらすじゅうの連中も音がした場所に視線を収束させた

「あーあ。スイマセン」

その場所ではペンケースを落とした張本人である隆二が反省する様子もなく、ニヤニヤしながら沢山のシールが張られているケースを拾っていた

《キーンコーンカーンコーン》

そしてチャイムの音が鳴り響いたと同時に、

「起立。礼！」

日直の女子の声が凜と教室に響いた次の瞬間に

『ありがとうございますッ！』

一斉に立ち上がった生徒たちによって、終礼の合図がなされ社会の授業は半ば強制的に終了された

篠山は刀也の事など忘れたかのように呆然としていた

その間に刀也は隆二によって廊下に連れ出されていた

「なんて言うか、すごい連携だな、、」

「お前が篠山にいびられてんの見てると授業が終わりそうに無かったんでな」

「とにかく助かった。サンキュー」

「良いぜ。その代わりなんか奢ってくれよ」

やはり助けてもらったのには裏があつたのか

刀也はクラスの団結力に感心すると同時に隆二の計算高さに呆れた

の
だ
っ
た

六話

刀也達二人が食堂に着いた頃には既には人で溢れ返っていた

おまけにそこに集まっている殆どの生徒はが三年生、チャイムが鳴ってまだ二、三分しか経っていないにも関わらずに食堂の席は空きが見えなかった

三年生が多いのも当然かもしれない。何故なら刀也達二年生が割り当てられている第二校舎よりも三年生の第三校舎の方が食堂に近く、隣に建てられていたからと言った地理的理由もある

それにこの時期の三年生は大学受験や就職活動を控えていた
そして、それらの活動に必要な書類作成の為に三年生担当の教師達は奔走し、まともに授業を受け持つ人員が少なくなる為に自習という形式を取らざるを得なくなるのだ

その結果として授業中に生徒の動向を監視する教師の居ない自習を
ボイコットする生徒が続出するためでもある

それは校則に違反するとはいえ勉強や面接練習のストレスを解消するためになるべく早く食堂へ赴いて友人と一緒に食堂の席取りをしながら食事を楽しむといった数少ない彼らの娯楽として見れば、それは仕方のない事なのかもしれないのだが

「少し出後れちまったな」

「そつだな」

お互いに苦笑を向けながら食堂の自動販売機まで食券を買いに歩く
販売機は入り口すぐそばに設置されていた。刀也は機械に硬貨を入
れ品名が記されたボタンを押し、金属の受け口に落ちてきた紙製の
食券を手取る

続いて隆二も食券を購入し、その後と言った

「メシ先にとった方が席取るってのはどうだ」

刀也は頷いた

「別に構わないぜ」

「よし、それじゃ後で」

二人はその場でいったん別れて、人が集まる行列のなかそれぞれが
購入した食券のメニューを取りに行った

チキン南蛮定食の載った緑色プラの盆を持つ刀也は空いている席を
目で探しながら隆二が来るのを待った、しかし、三十秒もしない内
に隆二は来た

・・・気持ち悪いウインクと共に

「刀也。席が見つかったぞ！」

「・・・その前に、気持ち悪い仕草はやめてくれ」

「おいおい。そんな反応で返されたら誰だって傷つくだろう
お前のツツコミ待ちのつもりでやったんだが」

「男にそんな仕草されても誰もうれしくないわ

それに俺はツツコミに向いてねえよ」

返答に隆二は気分を害した風でもなくわざとらしい仕草で肩を落と
し、すかした様子で両腕を掲げて見せた

呆れながら刀也は言う

「で、せっかく場所が見つかったてもここでもたもたしてたら誰かに
横取りされないか」

「おまえ冷めてんなア。もう少しリアクションってモノを・・・」

「早くしてくれ。足が疲れる」

隆二はそこでふっふっふと効果音が出そうな位少し怪しげに笑った後に

「大丈夫だ。場所取りは雪久に任せている」

刀也は少しばかり驚いた

「雪久？あいつが食堂に居るのか？珍しいな」

「雪久だけじゃないぜもう一人和己ってやつが居るんだ。お前は知らないだろうけど」

刀也は整った眉を顰めた

「和己？隣のクラスの奴じゃないのか？」

隆二は驚いたように目を僅かばかり見開いた

やや童顔の隆二がそんな表情をするともとの年齢よりも幼く見える事は始めは気になっていたものだったが、隆二のころころ変わる感情に慣れるとやがて気にならなくなる

時の流れ程偉大なモノは無いな。と刀也は少し思った

「よく解ってるなお前。和己と話したことであんの？」

「別に」

ただ知り合いとか前に関わりがあったという訳ではない。刀也自身、どこかで耳にしたというだけでただ覚えていた、記憶の片隅に軽く引っ掛かっていただけの事だ

只、彼に関してはそれに似たような既視感は度々有ることなので気にはしなかったが

「まあいいや。行こうぜ」

刀也はなぜ和己なる人物の名前を覚えていたのかは全く解らなかったのだが、いちいちそんなことを気にしていてもどうにもならないと判断して歩き出した隆二の後についていった

別に気にすることでもない。本でも読んでたまたま覚えていた名前が和己だったことも有り得る話だ

それより、腹が減っているから今は飯だ

「ほんとに珍しいな。お前が食堂に来てるなんて」

「たまにはそういう気分にもなるさ」

古い木製椅子に座りながら隆二が話しかけた人物は、眼鏡をくいと上げて答える

「・・・久しぶりだな。雪久」

「こちらこそひさしぶりだ。刀也」

眼鏡の人物——雪久は当夜に顔を向けて隆二とは対照的な落ちついた表情で返した

「俺が食堂で食うようになってから、しばらく会わなかったしな」

「そうか、そういえば俺が前に薦めたマルクスの『共産党宣言』は読んだか？」

刀也はうつ、と声を詰まらせるそういえば最近では思想や哲学関係の本は全く読んでいない

「・・・まだだ」

「そうか。お前はそんな状況じゃなかったよな」

「すまん」

「いいよ。暇な時に頼む」

「悪いな」

刀也は素直に謝った

雪久は刀也にとって中学の時から知り合いであり、眼鏡をかけた地味な容姿をしており学校の成績も常にトップにいるような秀才で、様々なジャンルの本を読んでいるためか、同年代の連中に比べ随分と博識であり、クラスの一部からは博士や教授とまで呼ばれていたような人物だ

それでいて読書家になりがちで閉鎖的な考えは持たず、進んで他人と接触はしないのだが誰とでもうまく話し、随分と肝回る為に集団の中の知恵袋的な役割さえも果たしている

刀也とは志望校が同じだった事が知り合うきっかけになり母が失踪した直後の時も彼を支えてくれた人物の一人だった

物事を随分と深い目線で研究し多角的かつ客観的な視点で自分の意見を構築できる雪久と、勘が鋭すぎるが故に他人と距離を置きやすい傾向にある刀也とは隆二と同様お互い気遣う事もなく親しげに話せる仲だった

そんな雪久の隣に黙って座って居るの人物がいた

刀也の視線に反応したのかどうかは分からないが彼は刀也と目が合った後に恥ずかしそうな、それでいて落ち着かないような不安定な笑みを向けてきた

それは一目で無理をしている表情だと刀也は理解出来た

それに気付いたのであろうか雪久が説明を始める

「ああ、すまない。刀也は和己と会った事が無かったな
こいつの名前は和己^{かずみ・せいじ}青磁。隣のクラスだが自分の友人だ」

雪久の後押しのお陰かようやく和己が言葉を発する

「ど、どうも。は、始めまして・・・」

和己は弱々しく挨拶告げた

「よう。俺って隆二って言うんだけどマジでよろしくな」

隆二が真っ先に和己に自己紹介し、多少強引に右手を差し出し握手を求める

和己は一瞬戸惑ったかのように隆二を見たあと

「こ、こちらこそよろしく」

あまりテキパキしないようなぎこちない仕草でおずおずと右手を差し出て隆二の腕を掴む

それは間違いなく和己が人付き合いに慣れていない証明だった

「おうよ。これからは友人同士だからなんかあつたら気楽に声をかけてくれよな」

「あ、有難う、」

正直言つて刀也は和己の態度にどこかむず痒いのを感じ取っていた
どつという訳か彼が他人に対して自分の気持ちを出さず卑屈に過ぎる
態度を取っている様に見えたからだ

正直に言えば刀也その手の性格を持つ人間をあまり好きにはなれな
かったからだ

それは刀也自身も他人に心を開いて接するのが苦手だからなのだろ
うか？

「・・・あの」

和己が刀也に声をかける

刀也は思考の渦から強引に意識を引き寄せるとなるべく自然な動作
でゆっくりと右手を差し出して握手し、和己に言った

「どうもよろしく」

刀也達四人は随分と人が減った食堂にて雑談しながら各自昼食を取っていた

「でさあ、凄いだぜ刀也の奴。」

ゴール前三人のディフェンスをかくぐって強引にレイアップ決めたんだ

凄いだろ。並の奴なら味方にパスを回すか、ディフェンス前で怖気づいて入らないシュートを決める連中もいる

バスケット部の連中も味方が来るまで待つか、フェイントを繰り返しながら一人ずつ抜いていくしかないのに刀也の奴は馬鹿正直に一直線に突っ込んで行ったんだ。並の判断力じゃないぜ」

「隆二。食堂内では少し黙っててくれないか？」

「おおっと。すまねえ」

雪久に諭されて隆二が渋々口を閉じる

しかし

「でさ、四時間目の授業の時なんだが…」

「隆二。喋るのは構わんが少しゆっくり喋ってくれないか？
飯が食えないし話も聞こえないだろう？」

「おおっと。これまたすまない

悪かった、悪かった」

「そつえばお前の教室から怒り心頭の篠山が出てきたのを見たのだが、隆二。あれはさっきお前が話そうとして事と関係があるのか？」

「そうそう。刀也の奴が篠山をキレさせてしまつてこっちはこつちで苦労したんだぜ」

隆二の熱弁に雪久は返事を返しながら興味深そうに耳を傾けていた
その間刀也はチキン南蛮定食を黙々と食し、和巳は購買で買ったらしいツナサンドを少しづつかじりつつオロオロとしながら二人の話を聞いていた

七話

街を流れる人波で埋め尽くされた雑踏。

見渡すばかりの人の波、人、人、人

人口十万を越えるこの町でこの時間帯は学生、会社員等帰宅する人々で溢れていた

刀也是そんな人ごみの中、両手に買い物袋を持って歩いている

食料買い出しの帰り道の途中だった

家に備蓄してあった食料の買い置きが尽きかけてきたのに気付いた彼は鞆や自転車といった荷物を置いて近くの商店街まで買い物に行つたのだ

今回のメインはコンビニ食では無く、ある程度保存の利く惣菜を中心に米やインスタント食品といった手軽に調理出来る簡単な物ばかりチョイスした

調理は自分で出来ないこともない刀也だったが、自分でするのは面倒臭い上に時間も取るし、手間がかかる

その上、彼自身あまりやる気は無かったので、自分で夕食を作るという風な自発的な行動を忌み嫌う程の面倒臭がり屋だ

少しでも手間がかかることはあまりやりたくないのが本音、自分の興味外にあるものはなるべく積極的に手を出さないのがここ最近は

主流になっている

昔はこうでも無かった気もするのだが、母の失踪が刀也から氣力を奪い、感性を鈍らせダラダラと生きる要因と化したのはしかたない事なのかも知れない

得にきつかけが無ければ改善しようとは思わないし、別にそれでも構わないとも彼は考えている

悩んでいても自分を突き動かす程の活力が湧水の様に出てくることなんて皆無だと考えていたし、最近は些細な事にすら悩む事を放棄してダラダラと惰性に任せた日々を送っている毎日だった

彼に現状を変える気はさらさら無かった

つい先刻までは

(…?)

視線を感じる。別に不自然と言い切る事でも無いような気もする

この人ごみの中だ、幾らかの他人の視線上にたまたま自分が突っ立っているという事実も有り得る

また、そういった見解も出来る、しかしながら、この気配はそれとも違う気がした

謎の視線は見えない圧力となり刀也の背中に突き刺さっているような感覚すら覚える

何故か昔から勘だけは異常に利く。自分でもこればかりは自信を持てるし、頼りにしている

無視して歩いていても、曲がり角をわざと幾つか曲がっても視線はぴったりと彼の背中に張り付いていた

ここまで来ると刀也自身、自分が何者かに尾行されていると気付いた

それでも彼は歩き続け、ある程度人が少ない狭い路地に入った瞬間に尾行者を確認する為、振り向いた

やはり居た

刀也に視線を突き付けていたであろう人物は隠れることすらせずに堂々と彼の前に立っていた

不自然な程に整った美貌を持つ柔らかい雰囲気を抱かせる女性は笑みすら浮かべた余裕の面持ちで刀也の前に堂々と立っていた

「あんた。いったい俺に何の様だ？」

『まさか行き先がたまたま一緒だった』なんて寝ぼけた言い訳をす

るつもりじゃ無いだろうな？」

四の五も言わず、単刀直入に切り出す

相手が女性で在ることさえも忘れて、警戒心を剥き出しにした攻撃的な口調と言葉で自分を付け回してきた尾行者を問い質す

この女は只者では無い

何故か胸騒ぎを覚える

悪い予感がする

それに、

（この既視感は何だ？）

刀也自身、こんなモデルの容姿を持つ女性は知らない

それに此処まで目を引く容姿の人物がこの町に住んで居るのであれば何回かは顔を会わせているはず

その時に女性の顔を覚えていない筈がない

記憶に無いはずがない

女性は笑みを浮かべていた

白いワンピースにレース生地の手袖
それに短すぎないスカート

肩口まで揃えた綺麗な金髪
人形のように整った顔立ち
形のよい桜色の唇

前右にわざと伸ばした前髪を銀色の留め具で括っているのは一種の
アクセントになっていた

それら全ての要素を備える美人だが歴戦のナンパ師ですらも声を掛ける事を一瞬躊躇わせるかの如く雰囲気を纏わせていた

まるで世の中から浮き出ているかのような

有名モデル雑誌の表紙を飾らせれば印刷紙の外からも老若男女問わず癒やしてしまえそうなオーラ

容姿だけ見ればそう感じるだろうが、直に遭って肌で雰囲気を感じるのと、写真越しに美貌を堪能するのとはまた別の話だった

それが異常だった

そして、これ程整った容姿を持つ彼女が人通りが比較的少ないとは言え一目を惹きつけない筈もない

なのにも関わらず二人の周りを闊歩する通行人は振り向きすらしない
まるで二人の存在を意図的に無視しているかのように

否、二人の姿すら全く見えていないかのように通り過ぎていくのだ
刀也自身、最初は自分が少し大きな声を発した事により、荒事に巻き込まれたくない臆病な一般人達が自分達をワザと意識せずに知らぬ存ぜぬで知らんぷりしているのかとも考えた

それが最も常識的な考えだ

なら、何故通行人は刀也達を大きく避けずにすれ違う位の距離で通り過ぎていくのだろうか？

接触の可能性もあるのに？

それすら若者の道徳が荒廃し、昔に比べて遥かに治安の悪くなった日本では最悪の場合、訴訟沙汰にまで発展するようなトラブルの種類になる可能性もある

ならば何故通行人は『刀也達を見ずに彼等から最小限避けるようにして歩いている』のだろうか？

此処は狭い通りとは言え、それに比例して人通りも少ない
しかしながら今は夕方の帰宅ラッシュの時間帯だ
全く人が居ないわけではない

わざわざ接触の危険を侵してまで自分達に近付いてやる必要性ま全く無いのだ

女性はそれが自然で有るかのように振る舞っている

ならば、考えにくい事ではあるものの彼女がこの異常に直接または間接的に関係していると言い切れないだろうか？

「あんだ。一体何をしたんだ？」

女性が笑う

「ふふ、

ここは初めまして、なんて言うべきかしらね」

自分を尾行しといてあからさまに開き直られた態度を取られ刀也の頭に少し血が上る

「勝手にストーカーしとしてはじめまして？
ふざけるのも大概にしろ？」

刀也自身驚いていた。此処まで自分が感情を晒し出したのは母が失踪した直後以来だったからだ

「そんなに怒らないで、私は君が嫌いじゃないから」

ぞくり、とした

この女は自分を以前から知っているのか？

「何で俺を尾行した？」

先程と比較して幾分落ち着いた声音で問う

「伝えたい事があったから」

「？」

そんな事は全く心当たりが無い

一体彼女は自分に何を伝えたいというのか

「あなたを狙う暗殺者がそろそろこの街に着くわ」

暗殺者

狙う

俺を？

「な、何を言っているんだ？」

突然出てきた暗殺者という単語

それに自分が狙われているという状況

あまりの驚愕により刀也の思考は一瞬止まった

八話

「何を言っているんだ？あんたは……」

刀也は半ば理解出来ないといった風に女性に反論した

言っている事があまりにも現実離れしている。まるで漫画の世界だ

いくら美人だとは言え、常識を著しく欠いているであろう頭の可笑しい女の話について行けない

暗殺者？戦え？どついう意味だ？

全く訳がわからない

「まだ実感が湧いてこないようだけど。君、大丈夫？

そんなに呆けてるとすぐに死ぬわよ。『機関』の連中にバラバラにされてね」

大丈夫なのかと問いたいのはこちらの方だ

そして、いきなりの事だった。女性は言葉の後に、何かに向かい合図を送るかの如く白くて細い織手を掲げた時

彼は背後から殺氣が自分に向けられていることを動物的勘から一瞬の内に察した

その鋭すぎる気配はまさに何者かのモノ、それは視線にあらず人を殺すための線——殺氣

殺気を感じたのと同時に刹那の思考すらせず反射的に殺気の発信源と自分の頭部を繋ぐ空間上の線を手に持ったビニール袋で遮断する。それと同時に袋が微かにささくれるような乾いた音と共に銀色に光る何かがアスファルト上に落ちて澄んだ音を立てた

「針？」

刀也がレジ袋で弾き飛ばした物は殺気の方から彼に向かって投げつけられた針らしい

幸いにして投げつけられた針の速度はそれほど無かったらしく石油製の脆いポリ袋で防げるほどのものだったが

しかしこれを一体誰が投げたのか？

目の前の女性は針が飛来してきた方向とは全く正反対の位置に居るならば女性の協力者であろう第三者が彼女の言葉が脅しでないことを示す証明なのかもしれない

とどのところ、ただの威嚇。つまりこの結界の中にはもう一人居るのだ

（こいつ以外にも近くで妙な事をやってる連中が居るらしい）

情報が少なく女性の話の裏を取る手段も無いので、多分の確率でこいつの協力者なのだろうか

気配を探ってみてもさっきのような鋭さを持つ気配はすでに近くに

存在しない

恐らく針を投げた直後に現場を離れたのだろう

笑わせる、何が脅しになっているのだろうか？

「・・・・・・・・」

女性は刀也を値踏みするかのように無言で微笑んでいた

刀也に対する謝罪どころか一辺の邪気も見えない顔で

常人には真意を全く計りえない仮面じみた笑顔を刀也に向けながら

それは誰の目から見ても決して不快になるような物では無かった

事情を全く知らない一般人がみたら一瞬で骨抜きにされてしまいそんな女性らしい柔らかな笑顔だ

しかし先刻の出来事がこの女の指図で行われた事を考えると、それは甘い香りで虫を誘い込む食虫植物を髣髴させる人を油断させるための笑みに他ならないだろうが

「何が目的なんだ？」

彼は問うた。相手が自分に危害を加える為に目の前に居る存在だという事は先の一件で証明されている

しかしそれが相手に何の利をもたらすのか？また、何を目的として行っている事なのかは解らないままだった

突然の出来事——あまりの非日常な状況に対し思考が追い付かず理解が出来ない

だから多少攻撃的ながらも、状況の説明を得体の知れない存在である彼女に求めたのかもしれない

そして、無言なれどもこの場の雰囲気を仕切っていたのは完全に目の前の女性だった

自分は最早、あらゆる異常に対し後手に回るしかないという現実を刀は見失っているのかもしれない

やっかい事、それも命を狙われる位に

しかし、自分は命を奪われるような恨みを買った覚えがあるのは五年前のあの事件意外位しか心当たりがない

極力、必要以上に他人と関わることを是としなかった彼はそれと同様、自発的に他人に対し危害を加えようとしたこともほぼ皆無だった

あの事件以外は

（五年前のあの出来事。もしかしたら関係あるのか？）

そこまで思考が至ると共に待っていたかのように女性が口を開いたまるで台本通りに演技をこなす女優のように

「そうね。自分のしたことに関係がある事実にやっと気づいたよう

ね

「…」

一体この女はどこまで自分の秘密を知っているのだ？

薄気味悪さと共に形容し難い不快感に襲われた

あの事件は何故か警察沙汰にはなっていない、マスコミですら取り上げて居ない

どんな手を使ったのかは図りかねたが世間の目に触れたことはまずなかった筈である

それを、女性は知っていた

だとすると今日初めて会ったばかりのこの得体の知れない人物は、少なくとも自分の過去を五年前の出来事から知り尽くしている羽目になる

正直に言えば不気味以上に不快感があつた。自分の経歴が第三者の監視を受け続けていたことは

「こっちは刀也君の事を大抵知っているわ

貴方に、あの事件の真相。そして真実を知る気があるのなら命がけでこの“テスト”に挑みなさい」

言われた直後に彼の中に沸きあがってきた感情は怒り

ふざけるな

どこの馬の骨とも知れない余所者に自分が言いように扱われていると言われただけで吐き気がするし、何よりも気に喰わなかったのが脅しに失敗したくせに自分より格下の相手にここまで侮辱された。その一点に尽きる

年月を経て、汚泥の底に溜まった空気が水面に浮き出てくるかのようには噴出する

自分でも信じられない。ここまで負の感情を特定の他人に向けたのは恐らくこれが初めてなのではないか？

そして。何故、どのような基準で彼女を“格下”と見たのかは刀也にも解らなかった

（殺そう）

失敗したとはいえ、相手が自分の挑発し侮辱された報復にしては物騒にも程が有り過ぎる考えが彼の脳内を埋め尽くす

そう思うことによって、女性が自分の目の前に現れた際の恐怖などは薄れ、両腕に下げた重い物袋を乱暴に地面に投げ捨て、量の拳を前方に突き出すようにして構える

夕飯など知ったことが、今はこいつをぶちのめせればそれでいいアクションがとれるように体勢を前屈みにし、いつでも前方に飛びかけられるように腰を低く落とす

正面にいる敵を睨みつけ、両の拳に力を込める

指を手の中に硬くねじ込むかのようにして握力を全力で込める

（こいつは恐らく簡単に殺れる）

確証は無かったが、何故かそう感じられた。そのような思考を抱いたことに彼は疑問を抱かなかった

九話

「血の気が多いのは元気が良くてよろしい事だけど…そうだ。一つ良いニユースを教えてあげましょうか？」

情報など要らない。この女は自分にとっての黒歴史を暴いた。それだけで生きるに値しない

「聞きたくないのかな？私の主観ではあなたにとって、とてもとても重要なことだと思っただけだ」

「…」

刀也はこの女ともう話す言葉はとくに無いと思っていた

「例えば——そうね」

無駄だ

何を言おうとも一言言葉を発した次の一秒以内の瞬間には自分の拳がこの“敵”の頭部を粉碎する

これ以上女の戯れ言につき合ってやる余裕は無い

こいつが何を企んでいるか知らないが、何を言っても自分の決断を覆す事は出来ない

刀也はゆっくりと名も知らぬ傍から見ればか弱い美女にむかって歩み寄る

瞳はこれ以上ないほど無表情に静かな怒りを滾らせて一步一步確実に近づく

次の言葉が彼女の口から出るまでは

「行方不明になったあなたの母さん。

名前は、確か高月 時雨さん……でいいのかしら？」

言葉が刀也の脳内に流れ込んできた瞬間。突然の事態に一瞬何が何だか判らなくなった

その証拠に、今サラリーマンが彼の肩にぶつかっても彼は全く気にしなかった。とうのサラリーマンは一瞬だけ彼を眺めると無表情な表情で彼を眺める

刀也はそれに気付かなかった。ある意味では異常な風景だったかもしれないが彼はそれを気にしている状況では無かった

（な…に？）

今、何を言った？この女は？

状況が全く飲み込めない、突然知らされた母の手がかりは是が非が彼女に確認する

「あんだ……手がかりを知っているんだな？母さんの」

女性は唇に指を当てて微笑んだ。それだけの仕草がやけに露骨らしく淫靡で扇情的だった

「さあ？私はただ覚えていた一つの情報の独り言を漏らしたただけでも、あなたが素直にいう事を聞けば少しは教えてあげないこともないわよ」

ぬけぬけと言う

聞く対象が一人しか居ないのにここまでのうのうと独り言だと抜かす輩は詐欺師はおるか政治家にもいるまい

しかし刀也にとって情報の信憑性はどうでも良かった

（この情報が嘘かどうかなんて関係無い。まずはこいつから母さんの居場所を聞き出す。考えるのは後でいい――）

一瞬で決断し、駆ける。

正面へ女性へ向かって右手を後ろに投げ出し、筋に力を入れる

あと五メートル

「ふふ。ちよつとは人の話を聞いたらどう？」

女は自分の置かれている状況が理解できていないのか、はたまたあえて刀也を挑発しているのかは知らないが何故か余裕の様子だった

右手に力を集中。先程とは異なり殺傷力を抑え、人に与える衝撃を気絶レベルにまで落とす。何故自分にそんなことが出来るのか？そのことに彼は疑問を抱かなかった

目的が変わった、この女性はすぐに殺さない。母の情報を得られるまでは

「ねえ、聞いてるの？もしかしてあなたひよつとして」

聞こえない。聞こえていても頭に入ってこない
距離あと三メートル

背後に人の気配を感じたが無視した

「もしかして、学校でも気に食わない先生にも同じ態度取るんじゃない？

人の話は聞きなさいって大事な大事な母さんに教わらなかったのかしら？」

あと一メートル、右爪先で熱が残留したアスファルトを蹴る、前方に重点を置いた体が少し宙に浮かぶ

粉碎すべき敵の顔を真っ先に見据える。しかし常人ならば失禁してもおかしくはないであろう殺気を真正面から叩き付けられても女性
は平然としていた

- - - - - 変だ、何かがおかしい

刀也の頭蓋に微かに残っていた理性が警告を発する

しかしながら、部外者によって完全に過去の傷跡を穿られ、母の失踪にまで彼女が情報を握っているらしい人物を前に彼の理性はブレ

―キはとうに決壊していた

彼の頭はもう時雨の情報をどんなことをしてでも聞き出すという以外の選択肢は有り得なかった

「なら、こちらもちよつと荒っぽい手段を取らざるを得なくなるわね・・・」

彼女はひどく残念そうに呟く

刀也の背後の気配が動いた。この女と自分以外は自分たちのことを誰も感知できないにもかかわらず、だ

完全に勢いと共に伸びきった拳の速度が僅かに落ちる

なぜか不吉な予感がした、これはそうあの事件の後に何かしら味わったような気配――俗に虫の声というものに酷似していた

必ず悪いことがおきる前兆

前に似たような既視感を発現したときはよく遊んでいた友人がジャングルジムから転落して首の骨が折れた、入院していた友達が病室で首を吊っていた、母が失踪したときもそうだった

女性との距離が半メートルに縮んだ時も敵は変わらずに余裕の笑みを顔中に貼り付けている

そして彼女の薄紅色の唇が唐突に言葉を紡いだ

「じゃあ、これもまたあなたの責任。」

その声音は弱者の唱える錯乱した意味不明な言い訳ない。堂々たる勝利者に宣告の様に刀也の耳に響いた

その声の後に、女性の冷たく凍り付くように変化した声の後に異変が起きた

「え？」

刀也のすぐ右を歩いていたサラリーマン風の男性の後頭部から銀色に光る太いナイフの太い白刃が垂直に生えていた

「あーあ、使えないわねえ・・・」

淡々とした声で笑顔の女性が告げる

刀也は女性の顔から一指幅ほど離れた位置で拳を止めていた

十話

後頭部にナイフを生やした男性の体が糸が切れたかのように崩れ落ちた

刀也が見たことのある家庭用の果物ナイフとは一線を描く殺人凶器――アーミナイフ

それは米軍や欧州の軍隊を始め軍事目的の野外活動で広く使用されるタイプものだ

投擲用の物とは異なる汎用性に重点を見据えたそのデザインは柄の形状、重心のバランスに、手持ちの刃物にしては大きすぎるであろう刀身はサバイバル分野において圧倒的な汎用性を誇る物の必ずしも投擲に適したナイフではない

その刀身の半分ほどが男の後頭部に埋まっているのだ

刀也は反射的に男性に駆け寄るが、怒りが止み熱が冷めた理性は既に既に絶命している事実を受け止めていた

そして、すぐさ思い出したように背後を見る

ナイフが飛んでくる寸前まで感じていた殺気は既に無い、が

（あいつがやったのか？）

一言で表現すると死神のような雰囲気を持つ男が立っていた

幅広い黒いコートらしきものを纏う長身の男は剃刀を思わせる鋭く冷たい視線で二百メートルほど離れた距離に居る刀也を一瞥すると、何気ない仕草でポケットに両手をつ込んで人混みの中へと去っていった

「待つ……」

「貴方、私がまだ居ることを忘れてない？」

「あんた」

自分の仲間に人を殺させておきながらまるで他人事の様にのたまう女性に彼は怒りを込めた視線を見据えた

女はおどけた様に、

あえて説明するならばなかなかデートの誘いを断った後、彼氏に言い訳を聞かせるように説明する

「あれは半分貴方が悪いんじゃない？」

刀也君がいきなり私に殴りかからずに、大人しく話を聞いてくれたら颯斗^{ハヤト}だって可哀想なサラリーマンを死なせずにすんだかもしれないのに……

本当に残念な事だわ」

無表情とも無関心とも異なる、むしろわざとらしく感情を込めたような口調で女性が言った

「だからって、無関係な人を……」

「あら、私は注意したはずよ

それなのに貴方が余計な事をするからその人は死ぬしかなかった」

彼女の言葉に刀也は反論せずに戸惑った

自分にも多少なりと責任が有ることを自覚していたからだ

確かにあの時この女の態度は不審すぎて信用が出来なかった

母の失踪に何らかの形で関わっている女性を信じきれなかったのは仕方ないのかもしれない

彼はさっきまで女性に対して殺意すら抱いていたのだ

しかし、軽率な行動によって自分ではなく他人に被害が加わった場合
合は違う

彼にも多少なりとも非はあるからだ

サラリーマンの死に冷静さを取り戻した刀也はその事で自分を責める

（何をやっているんだ俺は…）

女性はそんな彼の心情を知ってか知らずか言葉を紡ぐ

「これで頭も冷えた事だし、安心して本題に移れるわね」

刀也の心に再び怒りが巻き起こる

「…あんた…」

「仕方無かったのよ。あの時あでもして気を収めてくれないとし

ないと刀也君は間違いなく私を殺していたんだし用件も十分に伝えられなかったでしょうね

つまり、あの人の死は無駄では無いのよ」

「あんたはどうしてそこまで言える？ そんな事が出来る？

巻き込むのは俺一人で十分な筈だ

なのに何故わざわざここまで非効率的な事をする？

此処みたいな人を巻き添えにする場所でわざわざ話をする必要は無いだろう？」

刀也がそう訴えたとき、女が表情を変えた

そう、まるで今まで浮かべていた笑顔の仮面を外して冷たい絶対零度の表情を晒したかのように

目は糸のように細まりその瞳の中に有るのは刀也に対しての純粹なる悪意——憎しみや殺意、嫉妬といった負の感情

「さあ？ 何でわざわざ教えてあげる義務は無いわ
知りたければ自分の胸に聞くことね

その人も元はと言えば貴方が殺したようなもの
私達にも責任は無いとはいわないけれど……」

そこで女性は一瞬口元にある笑みすらも消し、完全な無表情になった

「元はといえば貴方が生まれてきたことが全て悪いのだから」

「——」

生まれてきたことが悪い？

全くもって意味不明だ

なんで自分が見知らぬ女性に恨まれなければいけないのか理解が出来ないしこれといった心当たりも無い

「なんでだ？…全くわからない」

「…」

女性は既に仮面を被っていた
張り付けたような笑顔で微笑を浮かべて刀也に言う

「保坂さん」

「え？」

まさか

「暗殺者と戦わなければ次は保坂さんの身が危ないかもね」

「どうしてそこまでする。彼女は関係ないだろ」

「答えてやる義理も義務も無いわよ。貴方が私達の言う事を素直に聞けば保坂さんも身の安全はほしうするわよ
どうしてもって言うんなら人質は隆二君でも構わないわ」

暗殺者

もしかしてさつきサラリーマンにナイフを投げたあの颯斗とかいう長身の大男だろうか？

「安心なさいな

今回は颯斗はこれ以上この件に介入しないわ。この件に関してはあくまで、ね」

《この件に関しては》

まさか、今回の出来事以外にもまだ自分が捲き込まれるべき厄介事は残っているというのか？

女性はもう用件を伝え終わったという風に刀也に背中を向けて歩き出す

殺されかけた相手に余裕綽々で背後を晒すのは彼にもう戦意が無いことを見て取ったのだろうか？

歩きながら彼女が言った

「そついえば自己紹介をしてなかったわね

刀也君やお友達の名前を知ってて自分の名前を教えないのは不公平じゃない？

一応私は静シズカって呼ぶの覚えておいてね」

刀也は無言だった

こんなやつに対して返事を返す気力すらも湧かないしその気も起らない

名前すらも記憶にも残しなくなかったが、しばらく忘れる事は出来

ないだろう

そして忘れていた用事を静は思い出したかのようにただの刀也の方向を振り返った

「最後に一応忠告しておくわ
“青雲会”に気を付けなさい」

静はバイバイという風に手を降って人波の中に堂々としていき姿が見えなくなった

その場に残された刀也は静が居なくなった事により周りの人間がサラリーマンの死体に気付き始め、あらぬ疑いをかけられぬ内に地面に落下し底が少し破けた買物袋を拾って駆け出した

もうこれ以上の厄介事はご免だった

気付くと既に自分のアパート前に来ていた

一刻も早くあの場所から逃げたくて走ってきた結果だ

情性のまま体を動かし二階にある自分の部屋に入ると緊張と恐怖感と罪悪感が洪水の用に胸の中に押し寄せてきた

突然巻き込まれた非日常に対する緊張と

静とその仲間に対する恐怖感と

自らの軽率な行動によってサラリーマンを死なせてしまった事による罪悪感だ

手は汗まみれになり刀也は再び買い物袋を落としてしまっていた

しかしそれよりも恐ろしかったのは

昔から自分の持つ気を操り、自らの力とする能力で自分に害を与えようとする敵ながらも本気で人を殺めようとした事だった

思い出しただけで背筋が凍る

あふれ出る殺意、虫けらのように人の命を摘み取ろうと決断した事それら思考のプロセスを良心のブレーキを経ずに簡単に思いついてしまった紛れも無い事実

「、、、、つつつ」

途端に吐き気がこみ上げてきて、刀也は洗面所に向かった

洗面器に胃の中のモノをぶちまけている間に今夜作ろうと思っていた自炊のメニューはすっかり頭の中から吹き飛んでいた

十一話

その事件を目撃したのは学校からの帰り道での事だった

この出来事に遭遇してしまった要因はいくつか有る。まずは自分がたまたま帰り道に本が読みたいと思ってしまった事がひとつ

それで近くの本屋に向くとその本が置いていなかった事もひとつ

そして別の本屋を探しに行く際に帰り道と正反対の方向へ言ってしまったことも原因である

その行き先が商店街だったことだ

運が良かったのか悪かったのかは彼にも判らない

探している本を結局見つけることは出来たものの、小遣いをはたいて買ってしまった為直ぐに帰って読むつもりだった

それが原因で自宅に帰る時間が遅くなるのを恐れたこと。帰る時間が遅れると親が五月蠅い

それだけではどうしても避けたい物だった

だから『彼』が自宅への帰路へ着いていた時その異変に遭遇する事が出来たのだ

『それ』はまるで白昼夢みたいな出来事だった

いや、そうであるとして説明できないような出来事だ

その場所には彼の知り合いが居た

高校等でもよく話すし彼の事を心から良き友人であると認めている人物だった

彼はその友人――刀也がここにいる理由を考えた

（食料の買い出しで此处まで来たのか？）

そして彼は不審な点に気付いた

刀也はこういう意図か尾行を巻くようにジグザグに進み、あちこちの通路を行ったり来たりしながら移動した後一通りが比較的少ない路地へと入っていく

彼は友人の奇行が何故か気になった

別に何者かの尾行を巻く事自体は不自然ではない、むしろ近年の不況によるリストラ、計画性の無い安い外国人労働者の大量流入によって治安が悪化している現状ではごくごく自然の事なのかもしれない

実際にこの街の郊外にある工業地帯は沢山の労働者が住み込んでいる家族を養うために地方から来たもの、またまた金持ち外国人が日本でのショッピング又は観光ついでに資金を稼ぎに来るただけにやってくることもある

大抵の者は『郷に入れば郷に従え』ということわざが示すようにその地域の規約を守り、多少の差は有れど充実した滞在生活を送っているが中には始めから犯罪目的で偽造パスポートや盗難された身分

証明書などを用いて此処を訪れるものも居る

つい最近も中国人の国籍ブローカーによる盗難パスポートを使った大規模な密入国事件がお茶の間にニュースとして流れていたのを思い出した

日本という国は確かに世界で一番治安が安定しているといっても過言ではない国だ

妙齢の女性が夜間に散歩しても襲われる可能性はほとんど無いし、地域によっては戸締りの必要が皆無な所もあるくらいだ

その安心を空気の如く享受しておきながら、それを自覚せず感謝すらしないで当然のものと世論になりつつある現状を彼も悩んでいる所ではあったのだが

（少し気になるな）

刀也があからさまに変な行動を取るとは思えないし、知り合いのプライバシーに下手に関わりなくなかったのだが何故か妙に気になるそれは後になって考えてみると感とか、一般的な解釈で虫の知らせとか言われる第六感的なものだったかも知れない

（とりあえず、こちらも付いていくか？）

時計を見ると、まだ門限には多少の余裕がある

彼も裏路地に入って行った、しかし刀也は確かにこの場所に向かったはずなのに彼の姿を確認する事は全く出来なかった

そこで彼は奇妙に思った

あの通りから狭い裏路地へ行くには道が限られている

刀也が入った通路からして裏路地に出たのはほぼ確実

それに表通りとは異なり此处も通行人の数は半分だ

人混みに紛れて見えなくなるなんていうことも考えられなくもないがこんな短時間で知り合いを見失うほど交通人の人数は多かったろうか？

彼はしばらく辺りを見回したが刀也の姿を見ることは出来なかった

二、三分程知り合いの姿を探したが刀也が何処にも居る気配は無かった

（帰るか）

彼はそう考えた。刀也が何をしていたかは明日の学校で聞いただけば解ることではあるし、これ以上無駄な時間を消費して門限に遅れたらまた厄介事が増えてしまう

それに今日購入した本も早めに読んでみたい

無駄なこととはなるべくせずに済ませるのが彼の基本スタイルだった

彼はその場を離れようと一步を踏みだそうとした拍子に辺りが急に騒がしくなったのに気付き足を止める

そしていきなり目の前にこちらに背を向けたまま茫然と突っ立って

いる刀也が現れた

（何だ？）

瞬時に頭の中を埋め尽くす疑問符

一体今まで何処に居たのか？

なんで商店の少ないこの通りで三分ほどの間をも同じ場所に止まっていたのか？

謎は泡のように浮かび上がって来たが彼は尋常では無い様子の刀也が走り去っていく方向の反対側——さっきまで刀也が居たであろう地点を一瞥しぎよっとした

そこには冗談のように後頭部にナイフを生やしてうつ伏せになって倒れているスーツ姿に身を包んだ男性とその周りを囲む野次馬で騒ぎになっていたから

刀也は彼——雪久に背を向けたままビニール袋を拾い上げてそのまま走り去っていく

辺りには遺体に群がる野次馬と雪久だけが残された

「おい、大丈夫か？」

「これってメイクとかじゃなくて本物のナイフだよな・・・」

「やだっ。怖い」

周りから無責任な嬌声が耳に入ってくるが雪久の耳にその雑音は聞こえていないのと同義

彼の関心はとある疑問ただそれ一つに尽きる

「刀也…お前は一体何をしたんだ？」

あまりにも衝撃的な出来事に彼は思わず噴出した心情を独り言にと
して洩らす事しか出来なかった

十二話

夕食を作る気などとうの昔に失せていた

今日起きた事件のことを考えると、とてもではないが調理をするどころか、食欲すらも沸いてこない

当然だ。目の前で殺人が行われてのうのと日常を過ごしていける奴なんて単なる異常者か、シリアルキラーかよほど常人からかけ離れた感性を持つキチガイ馬鹿位なものだ

彼——外の夕焼けが没していくに従って自分の周りが薄暗くなつて行くにもかかわらず、自室で蹲っていた刀也はそんなどうでもいい思考を鬱々とした頭の中でループさせていた

窓の外の風景は既に太陽は地平に沈みつつあり、すっかりと暗くなつた空は九割方が薄い闇に侵食されつつある

カーテンすら閉めていない刀也の部屋も少しずつ色彩が薄い黒に書き換わっていく、しかしながら彼は電灯すらも点けようとしない

それは単なる電気代の節約の為ではない、金ならば母が失踪した当時から一生普通に生きていく程度の貯蓄に困らない程あるからだ

床にだらしなく無気力に転がる刀也。彼は自分の中で独り問答を繰り返していた

・今日のアレは何だったのか？

・ 静と名乗る女性と颯斗と名乗る仲間らしき男

・ 暗殺者と言う自分を狙っているらしい謎の存在

・ 静が口にした『機関』という単語

全く理解できないキーワードばかりだ。自分も他人や外部から裏も取れない状態でこのような話を聞かされ、「君は何者かに命を狙われている」だの言われてもまず相手にしないか、曖昧な態度で適当に流すだけだろう

そして、自分もこの事を夢だと思った。麻薬でもキメてラリった馬鹿が現実と妄想の区別もつかない頭の可哀相な人間の戯言としか思わなかったろう

しかし、そう思い込むには目の前で死んだサラリーマンの死体はあまりにもリアルで、男性の体が力を失ってアスファルトに倒れこんだときの音は生肉をそのまま地面に叩きつけられるような感触が耳の中にまだ残っているようで、無性に気持ちが悪い

現実感を伴いすぎているそれはまるで、自分が不安定な悪夢に迷い込んでしまったような錯覚を感じさせてしまい今の刀也から冷静に思考する余裕を損なわせていたのだった

彼の頭の中できくくる巡る単語「母さん」、「暗殺者」、「青雲会」、それらのキーワードはなんら関連性を持たない様に思える。しかし彼は確信していた脳内を循環するこれらの単語にはそれぞれ深い意味で繋がっているのだらうと

それは何の確信も持てない只の山勘のようなものでしかなかったが、先程の事件のことも考慮すれば決してそうでもない可能性も浮かび上がってくる

母さんの失踪から静の登場まで一連の流れに沿って動いている出来事なのではないか？という仮説だ。だが、それだけでは確信が持てない

只の偶然が積み重なった結果であるという可能性も情報が少ない現時点では考慮されるからだ

では、何故自分が事件に巻き込まれるのか？それについても刀也には絶対的な確信を持つてこう考えた

「あの事件」のときもそうだったし、「時雨の失踪」の時もそうだった。事件の度に束の間の平穏が訪れるのだがそれも毎度のことのように破壊される。見えない何者かの圧力によって

だから刀也は他人とあまり積極的に関わろうとしなかった。巻き込んでしまう恐れがあるからだ

多少の友人はいる、たまに遊ぶ、集団の中で孤立することも無いしかしそれだけだ。それ以上関係は刀也自身が望まなかったからだ。どんなに今が楽しくてもそれがいつか破壊されてしまう物だと思っていたからだ。ずっと昔からそうだったのだから

知らない。何故こんな目に自分ばかり遭うのか？解らない

自分を脅して誰が得をするというのだろうか？時雨の失踪に何らかの関わりが在るのかどうか？疑問だけが脳内で響いて反響しているだが、それを推理する思考を行う気も、する気も今まで起きなかったいや、それからずっと逃げ続けてばかりいた

考えなくなかったからだ、自分が中心となって問題を引き起こしていることなんて

実を言うと刀也がこの様に自己否定の虚脱状態に陥るのは別にこれが初めてのことで無かった

「あの事件」のときもそうだったし、「時雨の失踪直後」の時もそうだった

事件の度に束の間の平穏は訪れるものの、新たな事件によってすぐに壊されるからだ。その度に刀也は自分を責め立てていた

どんなに平穏な時の幸せが彼の心に穏やかさを感じさせても、それも束の間のこといつかは必ず失われその度に払いたくない代償を支払わないといけない
時に友人を時には母さえも、彼の日常の対価として生け贄に捧げられる

自分には、決定的に人とは違うある種の「個性」が有る
そして、事件を引き起こす不幸の原因はこの「体質」のせいなのか
もしれなかったが

『体質』

それは彼自身が持つ他人には無い謎の現象だった

例えば、中学生の時に小型トラックに轢かれて三箇所骨折するといった大怪我を負った事がある

医者是全治三ヶ月ほどかかると言っていた刀也の怪我は結果的に二週間で治ってしまったのだ

診断を下した当の医者どころか、当時のクラスメイトでさえその事

に閉口した。母の時雨だけは特に気にしていなさそうだった

しかしながら何故かこのことで刀也の事を気味悪く言う噂が立ったり、村八分等の苛めに遭う事はどういう訳かなかった

言われてみれば骨折した部位もそこまで直りが遅いといわれるまでの場所ではなく、適切な処理を行えば一ヶ月ほどでほぼ直ると言われるのが骨折だ

普通の人よりたった一週間直るのが早かっただけの事。当時は周りがそんな風に御都合主義的な屁理屈を駆使して自らに言い聞かせてきたのだとそう思っていた

しかし、この事も現在の状況から見ればほんの少し不自然に見えてしまう

騒がれなかったのが、気にしなかったにではなく誰かが口止め、もしくはどこかの機関が意図的に情報を遮断していたのだとしたら・・・

（あまりにも陰謀論過ぎる、只の憶測に過ぎない常識外れもいいところだ。馬鹿馬鹿しい・・・）

しかし、それらの不自然な点を一気に結び付けてしまいそうなのが今回の事件だった

静と名乗る女性は母の秘密とあの事件の結末を知っていた。それを知った上で強引にアプローチをかけてきたという事は

（連中の狙いは俺か母さんか？）

多少推理が間違っていたとしても真相はそんなものだろうか？

ある程度相手側の目的が掴めたところで刀也は表面上のみながら冷静さを取り戻す

思考の追求は宝であるとは母の弁だったが正鵠に的をいっていると感じられた。おかげで取り乱さずに済みそうだったから

しかし相手側の最終目的はいまだに不明である

連中がどういった動機、目的で自分を付け狙うならばなにかしらの理由は有る筈である、もしかするとさつき裏通りで起きた出来事が殺された男性を含んだ茶番で有り、母が遺した資産目的の可能性も有る

金で解決したいものならばそうしたいがああ静なる女性の言葉から察するにそれは無いように思えた

刀也は床に転がった。思考中の間完全に日は没してしまったので電気を点けない部屋は暗く、仰向けになつて天井を見上げても視界にはうつすらとした闇が広がるだけだった

「怖いよ。母さん……助けて」

か細くもれた独り言も闇と同化した大気に溶け誰にも聞かれぬうちに消えていった。

十三話

それから少ししてからのことだった、いきなり近くに人の気配を闇の中に感じたのは

「!？」

何があったのか理解しかねるといった状態ながらも暗闇の中、刀也は跳ね起き気配のする方向に体を向けた

その間『人影』が何故か行動を全く起こさず刀也が起き上がるまで視線を向けているだけだった不自然な行動を取っていた事実には彼は全く気付く余裕が無かった

この事は後に重大な意味を持つのだが神の身ならぬ彼に現時点では察することすらも不可能だ

突然の出来事に瀕し、彼は思い当たる事情に次々と脳内にて検索をかける

咄嗟の事に混乱しながらも彼は一瞬でその原因に思い当たった。それは予測ではなく事実裏打ちされた確信に基づいての事だった

それとほぼ同時期に、『気配』を放つ『人影』が何か言った

「こんばんは。今宵は月の明るい綺麗な景色が望めますのに、カーテンを閉めっぱなしにしているとは勿体無い

余裕の無い世の中ですが少しは風情を楽しめましたらゆとりが持てますよ

あ、ゆとりを持つという事は別に勉学に励まず努力すらも怠ける馬鹿になれと言うことでは有りませんか」

突然部屋に明かりが付いた

いきなり周囲が闇から光で満たされた事もあり眩しさで刀也自身もわずかに目を細めた

当然、明かりを付けたのは彼ではない

「いけませんねえ。光源はしっかり確保しておかないと目が悪くなりますよ」

電灯のスイッチに手をかけたままいつの間にか、針金を連想させるような男が当夜の眼前に立って笑っていた

刀也は警戒心も露に男を睨み付けた。普段他人に向ける事の無い苛烈な疑念と不信感を剥き出しにした視線を男にぶつけても、とうの彼はそれすらも夏の残暑すらも軽々と受け流してしまいそんな爽やか過ぎる（？）というよりどこかで刀也の眼光を受け止めた

否。受け止めたというほどその表情は険しくない、むしろ男の微笑は普通に一般人と挨拶を交わす時のように平然としていて不法侵入を果たした身の分際で、堂々とした雰囲気すらもまとっていた

居直り強盗とはここまで堂々とした態度で犯行を実行するのだろうか？

そんな無駄な思考が刀也の脳裏に展開させてしまうほどに男の態度は平然としたものだった

しかし、彼の格好を見てようやくこの男が金とか貴重品目当てに刀也の部屋に進入したのでは無いことを悟った

男の顔はやけに整っていたが、あちこちに顔の右半分を覆い隠すまでに伸びた前髪と詐欺師の見本というマニュアルにあわせて口の形を胡散臭そうな笑いの形を取らせている事が彼にどこか漠然とした胡散臭さを感じさせられた

そして、漫画やアニメなどで見るようなコスプレじみた黒いマントを首から膝下までかけている事実も刀也の男に対する警戒心を強めていた

更にマントの隙間から見える細長い棒の正体も気になるが黒塗りの棒の先から拳三つ分の位置に取り付けられた円盤状の装飾品みたいなものから、その道具の正体はあらかた理解できた

あれは間違いなく日本刀だ。では何故日本刀なんぞ担いだ男がこんな時間に自分の部屋に無断で入ってくるのか？

日本刀なんて道具は二百年以上昔の時代ならともかくおいそれと誰も彼もが手にすることのできる物なんかじゃない。模造刀なら通販で一万円程度から販売していると聞くが本物売っているサイトなんて刀也は聞いた事がないし本物の日本刀。それも実用性と芸術性を兼ね備えた類のモノならば争いの無い現代の世で打つには相当の時間と費用がかかる

実用性をほぼ捨て去り最低限の強度を与えただけの観賞用の日本刀でさえ当然のように百万以上の値が付いているのだ

正宗、虎鉄といった歴史に名を残すくらいのブツならば当然の如く豪邸が建つほどの値打ちがするという

では、実用性と強度を兼ね備えた刀が鑑賞目的以外の事に使われるとするならば

それは、誰かを傷つけるか、殺す時意外にはありえない時だった

「あんたが、俺を殺しに来た暗殺者とやらか？」

自然とそんな質問が刀也の口から滑り出てきた

男はあいかわらずだだぼんやりとした仮面じみた笑顔を顔面に貼り付けながら答えた

「そうだとしたら、どうするのです？」

要領を得ない曖昧すぎる返答。質問を質問で返された事に対する不快感はこの際はつきりと表には出さず刀也は答えた

「全力で抵抗させてもらう。俺だってまだ死にたくないし母さんと再会してないからな」

「それで、どうするのですか？見たところ貴方の身体能力はずば抜けているのでしょが所詮は丸腰。それにこちらは貴方の情報を多少は知りえているのに加え、使い慣れた愛用の武器すら持ってきている。それに・・・」

男は突然マントの下から腰にぶら下げていた刀を手前に放った。真っ黒な美しい艶消しに塗られた鞘が日本刀が刀身を収めたまま安っ

ばいフローリングの床に投げ出される

「な・・・に・・・？」

男の行動が全く理解できなかった。自分から獲物を捨てるなんて

「徒手空拳でも『今の』貴方は殺すのは可能ですよ」

次の瞬間、男が拳を構え一気に接近してきた

そのとき、刀也の見える『世界』が変わった

急に男の一撃が緩慢になる、必殺の拳がやけにスローに見えた

「!？」

（なんだこれは？）

状況が全く理解できない

自分を殺しにきた暗殺者がやってきて現在進行形で自分を殺そうとしている時に自分の知覚が数倍に向上する

急激に変化する環境に理解と対応が追いつかない。自分の意思とは無関係に事が大きく進んでしまう。まるで創作上の物語のように

気が付くと目の前に男が捨てた刀がある、それに男の拳は遅々とだが刀也の命を削り取らんと眼前に迫ってくる

（――）

頭の中に正体不明のノイズが走る、早くやるべき行動を取れ、むざむざ殺されるな。そう自分に語りかけてくるようにそれは刀也に思念を送ってきた

「ッ！」

選択の余地は無い

たとえ、何者の掌の上で踊らされていようと今は目の前に降りかかってくる火の粉を振り払う事が最優先だ

刀の柄をつかみ、鞘から一揆に引き抜く

意外な事に、得物は異常なまで刀也の手に馴染んだ。まるでずっと前から共にあったかのように

そして、驚くべき事に刀の刀身も時代劇で見るとような煌びやかな白刃ではなく鞘と同じ艶消しの黒だった

しかし、脳内に沸いた疑問は無感情に切り捨て、今は自衛の為だけに黒い刃で眼前の敵を薙ぎ払った

男が彼が横一文字に振るわれた凶線を身を反らしギリギリで回避するのと同時に

刀也の知覚が一気に元に戻った

十四話（前書き）

十四話

刀也の放った鋭い斬撃は男を捕らえる事は一見出来なかったように見えた

だが現実には目の前には黒いマントを赤黒い血で染め上げ、左腕で傷を抑えている男の姿があった

「少し痛かったですね。貴方の力を甘く見ていました
身を振るのがあとコンマ0.5秒遅れていたならば、私は自分の
下半身にお別れを告げなければいけませんでしたよ・・・
くくく、人間にも力を持つものは居ますが、本当に貴方は人間ですか？」

男が前髪に半分隠れた秀麗な顔を緩ませて友人に微笑むかけるかのように笑う、まるでピエロの仮面が笑っているようで不気味だった

「それでも・・・この様ですがね・・・」

彼は刀也に醜く肉が引き裂かれた脇腹を見せた。傷口は刀で切りつけたものとは到底思えず、へその中心から左脇までの肉がこっそりと削られている

（俺が・・・あれをやったのか・・・？）

その表情に自らを両断しかけた刀也に対しての被害者的ナシヨナリズム・・・主に謝罪や賠償、先程の刀也自身の自衛行動への怒り、憎しみ、人格批判といった物は伺えない

それどころか彼の表情にはある種の達成感、充実感といったものさえ感じられた

瞬間、刀也は目の前の男が理解できなくなった。殺されかけて喜んでいるなんてマゾヒズムにも程がある

「え・・・あ、ああっ・・・」

刀也は混乱した、みつともない事に声すらあげた。眼前の人物が人間じゃない怪物のように感じられた

意味不明である。

どうしてこんなに笑っていられるのだろう

どうして苦しむそぶりを見せないんだろう

どうしてそんなに嬉しそうなんだろう

こいつは、いやこれはほんとに人間なんだろうか

此処まで痛みを感じていないんだから人の形をした入れ物なんじゃないだろうか？

ほら、だって

「すばらしいですよ刀也君。私は『きつかけ』を与えたに過ぎない。君の半鬼としての素質は以前からあった。ほら、君の周りでよく人が死んだり、不幸になったりするような事がよくありませんでしたか？」

ある。だからそれと今の事と何の関係があるのだろうか？

「貴方のその素質・・・いや、体質と呼ぶべきなのでしょうが？

刀也君。君は知り合いがいろいろ不幸な目に遭っているながら、自分は殆どいつてもいいほど面倒ごとに巻き込まれませんよね

これって、不思議だと思いませんか？真実の断片に触れてみたことはありませんか？・・・くく

どうやら『他の要因』も有るみたいですが。我々とは別の組織が動いているようみたいですがね」

先程まで自分が悩んでいた事をまるで凄腕の占い師のように尋ねてくるのだから

「それと、今の事と一体何の関係が・・・」

男はそこで嗤った。巢にまんまとかかった蝶を品定めする蜘蛛を想像させるほどにその笑いは不気味なものに見えた

刀也はそこで一生後悔する選択はしてしまうかもしれないと何故だかわからないが悟ってしまった

男は生け贄と契約完了を果たした悪魔の如くさらに唇を吊り上げ、嗤いを醜悪なものに変えた

もう後戻りは出来ない。言外にそう告げるように

そして、緊張する刀也に向けて男が言った

「いいですか。よく聞いてください。貴方の周りで不幸が起きる反

面、貴方自身が特にこれといった面倒に巻き込まれないのは……

貴方が周りの人間の気力。運命、生命力に作用する根源のエネルギー、簡単に言うところ『氣』のようなものを無意識に取り込み、喰らっているからなのですよ。

もちろんそれだけで人は死にません。それにしても貴方がここまで知らないのは……いや……それだけではないようですが、私は良く知りませんねえ……」

「半鬼……氣……」

解らない、この男の話していることが理解できない

男が愉快犯の知的障害者だと説明するのは簡単だ、しかしこの男の言葉を胸を張って否定できない自分が居るのも受け入れられなくも無い

「貴方の母さん、名前は時雨さんと言いましたか、此処にいたるまで貴方の良心が潰されずに耐えられたのも彼女の存在も大きいしかし、彼女は今ここには居ません。それに貴方を監視する『組織』も動き出したようです」

高月時雨——

その単語が男の口から漏れ出すと共に刀也は彼に詰め寄って半ば叫ぶような形で言った

「あの人の行方を知っているのか！」

「今、私の口から話せることは此処までです」

男の口から非常に過ぎる言葉が出てきた

言うことを聞けばそれ以上の情報をくれてやる。刀也には言外に男がそう言っているように聞こえた

その時刀也の頭の中の温度がすう——と冷えた。例えるならば津波の前に海岸の水位が一気に下がるように

そう、まるで不吉の前兆の様に

そして、先程にも響いた声が、聞こえた

——何を迷っている。時雨の行き先を知りたいのだろう。

抱きしめて頭をなでて欲しいんだろう？「辛いのによく頑張ったね。」と褒めて欲しいのだろう？

ならば躊躇する理由はない。目の前の男から情報を引き出せばいい。それだけの話だ

手段は何でもいいどんなに汚いことをしたって構わない。あいつを虫の息になるまで衰弱させる、徹底的に痛めつけて恐怖心を植えつけ服従させるのも自由だ。弱った後に絞り上げて知っている事全てを吐かせればいい

お前には時雨とこの男。どちらかが大切であり、重大かと言うことについてはもはや天秤に掛けるまでもないだろう

良心を棄てろ、道德観を棄てろ、偽善者どもが好む下らないヒューマニズムなんか無視しろ

お前は時雨と遭いたい。その気持ちが免罪符になってくれる

他人を蹴落として自分が上に上がる事にどこが悪い？古来より人間はそうして発展してきたのだ

ケモノになれば、自らの欲望を満たすために――

（・・・そうだな、そうしよう。）

刀也は一度は下げた黒い刀身を再び強く握り締めた

一度振っただけの刀は刀也の手に馴染む。まるで以前からずっと使っていたかのように

先刻と違うところがあるとすれば今度は自衛ではなく明確な害意を持って相手に切っ先を向けることだ

男の顔をゆつくりと見据える、目が合う敵は余裕の表情で刀也の方を眺めていた

フローリングの床を蹴って一直線に間合いを詰める、三メートルほどの距離は一気に狭まる

そして、さっきの体の中から湧き出る力を刀身に注ぎ込んで一気に薙ぎ払うように刀を振った。黒刀に注いだ『気』はさっきと比べ物にならない。剣先からそのまま延長されるように伸びた不可視の刃が男に襲い掛かる

しかし、

「さっきのは僅かに回避が遅れましたが、そんなに剥き出しの殺意を向けられるとせつかく刃が見えなくても、当てる事は出来ませんよ」

先程に比べて幾分か冷静にかつ殺意を込めた斬激は二足ほど後方に下がった男の体を捉えることができぬまま、刃は空を切るだけの結果に終わり、いつの間にか刀也に背後に立った男が当然のように告げた

「!？」

素早く男の傍から離れる刀也。無論距離を取ったのは反撃を防ぐ為

「私に意識して攻撃を当てるなんて、死線を全く潜った事の無い貴方には無理です」

しかし、彼は刀也に対して殴りかかるどころか、なにもしてこなかった

「・・・ほざけ・・・意地でもあんたの知っている事を吐かせてやる・・・。」

「おお、こわいこわい」

刀也の殺意に満ちた視線をありありと浴びながらも、男は余裕の態度を崩さずにむしろ挑発するかのように両腕を目の前でひらひらと振ってみせる

彼の頭が怒りで沸騰しかける、この男は痛めつけるだけじゃなく半殺しにする。仮に死んでしまったとしても自業自得だ

もはや全力で『殺る』つもりでいくしかない。

決意した時、大気が微かに震える部屋の温度が微かに、ほんの一、二度だが上昇したような気がした

男は高校生ならぬ気迫に満ちた刀也を大したものでもないように一瞥すると突然背を向けた

「ふむ、もういいでしょう。このへん今日でドンパチは終わりにしませんか？」

「なん…だと」

突然の男の言葉に刀也が絶句する。微かに彼の怒りが静まった。一時的な気温の上昇も収まりを見せつつある

怒り心頭の刀也が一方的すぎる男の停戦宣言を受け入れた――
――のではない

（ち、力が…）

さっきまで刀也の全身を覆っていた目に見えぬ気の流れは既に存在していなかった

どういう訳かは知らない、只、底を抜かれたバケツのように全身から力が抜けていくのかがわかった。それどころか意識も一緒に流れていくような気がする

「あ…んた……。何をし……。た…？」

視界すら徐々にぼやけ、曖昧になっていくなかで男に問うた

「何もしていませんよ。貴方が無理に使い慣れない膨大な量の気を行使しようとしたので負荷に悲鳴を上げた肉体が強制的に体の活動を停止させ、エネルギーの暴走を阻止しただけです。

いやはや、便利なものですね

いくら人間離れた半鬼の肉体でもやはり実戦経験が備われなければ只のお荷物といったところですか
いや・・・それとも肉体そのものが・・・」

後半の言葉は良く聞こえなかった

「やはり、・憶を無く・・・の器が憑・しただけ・・・の人間の・・・のは、どうも時間がかかる・・・すね。それにしてもここまでの力を――」

（俺は・・・一体・・・）

男の言葉を半分聴き終わるか聞き終わらないうちに刀也の意識は闇に落ち、同時に体は床に倒れ伏した

十五話

力無く地に倒れ付した刀也を見やり、男は僅かにため息を吐いた

呼気は外気にさらされると同時に白い半透明な靄となって空気中に飛散する

夏の終わりと秋に挟まれた節目の時期であるとはいえ、現在の気温はまだ遠い冬の寒さに向け少しずつだが平均気温は確実に下がっている

温暖の差が激しい夏から冬の準備期間においては一年の間に気候が最も変化を起こす時期だ

加えて季節の変わり目は気温の変化が著しい。体の弱い者ならば少し体調を崩した途端、風邪に罹ってしまう位に

「すこし、寒いですね・・・」

言葉と共に白い息が男の口から零れ落ちる

彼の役目は終わった。後は帰るのみだったが胸中は拳一つ分ばかりのぽっかりとした空洞が出来たかの様に空虚だった

つい五分も前は床で倒れ伏している刀也とは若干とは言え命の死闘を演じた

下手をすれば自分は殺されてもおかしくは無い程の力を持っていると主から聞かされていたのだが、実際は彼が力を使いこなしておらず、体力的にも精神的にも限界だったが為に彼の覚醒を促す『刀』

を持たせても、自分の体に慣れない気力の放射をさせたがために消耗し尽くしていたため意識を喪失させてしまったのだ

彼は弱い、自分が言っただけに見せたように実際には素手でも彼を倒すことが出来た。懷に飛び込んで手刀で喉を破壊してやればそれで事足りる。恐らく半鬼として中途半端に特性を備えているだけの刀也ならば再生能力もそう働かないはずだ

彼は人間のまま死ぬことになるはずだ

自分も人から大分離れた存在になってしまったのでこんなことを考えるのも皮肉じみていると言えはそれまでだが彼にとってはその方が良いのかもしれない

主の命令どおり彼に『鍵』を渡すことには成功した。これから彼も自分と同じ・・・いや、それ以上に禍々しい存在と化していくのだろう

彼も衝動を抑えきれなくなりやがては身近な人間に牙を振るうことになる。そうなれば彼も人間社会の中で生きてはいけな

大きすぎる力は差別と迫害と畏怖を引き起こす。そうして彼の居場所は無われ桃源郷を追いつけられた人外存在は自分の存在を肯定して生きていくために外道の道へと手を染めるだろう

その未来はさつき自らに向けられた彼自身の欲望と暴力に飢えた眼差しを思い出しただけで容易に想像できた

（私としては多少の命の危険は覚悟していたのですがね）

彼の任務は刀也の殺害でも脅迫でも無かった

只、彼にごくごく自然な形で『刀』を使わせること
ただそれだけの事だったのだから

（あの方からの命はどうにか終わりましたが、なんか物足りません
ね）

確かに、高月刀也の能力適正は実際に存在する事が確認出来たのだ

別段任務自体に不足は無い、無いのだが…

任務とはどこか離れている自らの心中をくみ取って、男は苦笑した

自分はおそらく刀也を憐れんでいる

自らのやったことであるとはいえ赤の他人によって知らず知らずの
内に人生のレールを敷かれるのはだれにとってもさぞかし屈辱的だ
ろう

自分も他人から見ても真つ当な人生を送っているとはとても言い難い
が少なくとも彼は自分の意思によって今の状況に胡坐をかいている。
最低限自分の足で立って生きているのだ

最低の条件下の中でも信念を持つてして自分の道を進むことができ
るのは人間にとって一番の幸福ではないか？

人間の命を消す際に見せる足掻き、信念。目に見えない他人のそれ
—— 生き様を鑑賞するのが彼最大の娯楽であり、数少ない生
きがいの一つだった

「…。」

感傷を棄て、彼は自分が部屋に侵入してきた時と同じようにベランダへ向かった

普通にドアから出て行けば住人に姿を見られる可能性がある
別段自分の姿が目撃されても消せば良いことなのではあるが、彼の
『仲間』も複数この街に潜伏している以上勝手な行動は許されない
だろう

この前みたいに森林へ月見に出掛けた際にたまたま出会った獲物を
狩った時とは事情が違う

『計画』が進むまでの間の面倒事を避けるのは当然である

そして、彼はベランダから軽く跳躍

そのまま地上三十メートル程の高さにある刀也の部屋から地面へ向
けて落下する

下方から来る風圧が前髪を撫でつける

そして一秒もしない対空の後、何事も無かったかのように大地に降
り立つ彼にとって別にこれは驚くべき事ではなかった

むしろ着地を成功させた彼が驚嘆したのは目の前に立つ人影の存在
だった

彼は開口一番に告げた

「やはり、と思っていましたが実際に着けられていたようですね。」

此処に来るまで薄々とながら気配は認知していたのですが」

前方に立つ長身の男——最初に口を開いた『彼』よりも高い二メートル位は有るであろう男は彼から視線を逸らさずに淡々と告げた

「お前達は何者なのかは知らないが、此处最近騒ぎを起こしているのは貴様だな？」

言葉を突きつけられた彼——針金男は質問に答えず挑発するように返した

「そんな事は公安にでも調査を依頼すれば良いでしょう
国家内の三権分立から完全に独立。内閣のみが直接指令を発することが出来る特殊団体『機関』も素人の探偵業まがいまでにレベルが落ちてしまったのですか？」

挑発には答えず、長身の男が無感動に言った

「ゴタクは良いんだ。貴様は黙って俺達に情報を差し出せ
お前たちの組織と目的についての事をな
実際にお前のような奴と会うのは今日で二回目だ。
何も知らないとは言わせない」

それを聞いた直後、針金男の纏う雰囲気に変化する

男を見つめるまなざしに一切の余裕が無くなり、一挙一動に対してまで慎重に『敵』を観察する

隙あらばすぐに始末できるように、又は逃走可能なように

長身の男に向けて静かな、それでいて鋭い氷点下の温度を誇る殺意が向けられた

「…こんな時間にまで仕事熱心なのは関心します。が、私があなたに脅迫されてプライベートを話してしまうのは基本的人權の尊重に反しませんか？」

長身の男はそれを聞いて唇の端を片方だけ吊り上げた
なのに眼光は変わらず針金男を捉えて離さない

「安心しろ。お前達のような連中は人間の枠内に入らないから人權など初めから存在しない。それに、」

一旦言葉を切り彼はコートの内側から手に滑り込んできた軍用アーミーナイフを握り締めてから

「初めにお前がボヤいたように俺達『機関』は権力の三権分立から完全に独立している
つまりお前が仮に人間だろうが全く無問題と言うことだ」

針金男はやれやれ。という風に肩をすくめた。「冗談に対して真面目に返答を返してきた友人を諭すかのように」

「やれやれ、公務員がそんな物騒な発言を普通に言ってしまうとは、恐ろしい所になったものですね。この国も」

針金男もいつの間にか手にした半メートルの長さを誇る脇差しを手
に長身の男と向き合う

あからさまに敵に対して敵意を向ける針金男とそれを淡々と受け止めつつ鋭い鷹のような眼光で威圧しながら相手の出方を伺う長身男二人が立っているマンションの駐車場は互いを殺し、食い合おうとする殺気に汚染され、一種の異界と化した

十六話

先に動きを見せたのは長身の男の方だった

右手で得物を保持し左手を柄の頭に添えたナイフの持ち方は純粹に貫通力を高め、殺傷力を向上させるやり方だ

人体に深々とナイフが通れば刃先をねじ込むだけで相手に重傷を負わせることが可能である

最も、それも相手が普通の人間だった場合に限るが

しかしながら馬鹿正直で猪突猛進な突撃は素人相手ならともかく人外の存在、それも幾人も己よりも体格のある人間を赤子の手を捻るかのように遊びながら殺しをやつてのける殺人鬼——目の前の針金男に通用する保証は無い

それでも、10メートルもの距離をたつた三步で踏破するコート姿の男の突撃は燕の弾丸の如く素早く、そして見ているものを戦慄させる迫力があつた

迫りくるその威容は、まるで生者の魂を刈り取らんと地を這い迫る這う黒い死神を連想させる

それは、ただの押し入り強盗、並みの殺人犯ならばこの場で委縮して逃げ出すか、警察に駆け込んでそのまま自首するかもしれない威容

しかしながら、目の前の針金男に戦意を失つたような様子は見られない。むしろ楽しそうにクルクルと柄に入つたままの古脇差を玩ん

でいた

その後すぐに、針金男はコンクリートを蹴り無音で後方に跳躍。男との間合いの調整を計りながら脇差しを目の前に翳す

（流石普通の人間よりは速い。ですが所詮は鍛錬を積んだだけの只の人間。畏れることは何も無いはずです）

針金男の考えはこうだった

敵は先手必勝を狙って無謀にも突撃してきた

だから当然。敵との間合いを完璧に計算した後で一気に接近しての刺突で一気に自分を仕留めにかかるつもりなのだろう

確かに敵の動きは早い。が、目で追える範囲内だ

彼も気付いているのだろう、自らが体力的に劣っているであろうことを

消耗戦になると勝ち目は薄いということ

だから一気に勝負を付けに来ている

（・・・だとしたら人間らしい浅はかな考えですね）

ならば話は簡単だ

こちらはひたすら間合いを調整して彼の攻撃範囲に入らず相手を疲弊させ、カウンターで反撃するなりして少しずつ消耗させてしまえばよい

彼がこれまでに出会ってきた中で強敵なのは判る。実力が伴っている人間は自然に冷静さと自信が態度に裏打ちされたそれは先ほど彼と対峙したことで解る

敵は強い。だからこそ自分も普通の『狩り』の時以上によりも慎重に立ち回らなければなくなる

どうせ基本的なスタミナは確実に自分の方が上なのだ。人間がいくら鍛えても限界は知れている筈。

身体的な強さ。すなわちスペックは後付けで劇的に向上するものではない。鍛錬や薬物でどれだけ肉体を強化しようとも『人間』という枠の限界を超えることは出来ない

体格的に鼠が像に劣るのと同じ理屈、決して覆せるものではない。もとの枠に加えて基本的な身体能力、限界値ですら自らは人間のそれを遙かに上回っているのだからこそ

道理としてパワー、スタミナのある方が最終的に有利なのだ

故に持久戦に持ち込めば必ず人を超えた存在である己が勝つ

それに、針金男にはもうひとつの強みがあった

それは彼が情報を求め自分を捕えようとするならばどうしても手加減を考慮して戦わざるを得なくなるということだ

先刻の会話の中の情報を整理すると男は自分と『仲間達』が複数で行動を起こしていることは知っているが、自分たちの目的や主人に

ついでに明確かつ確実な手がかりは有していないと言うことだ

仮に会話の内容にブラフが含まれていたり、情報を故意に隠蔽しているのであれば、

こういった荒事ドンパチを起こすことなど有り得ないし、さっさと自分を処理していただろう

組織のバックアップ無しで強引な方法にて情報を得るということはそれだけ彼らのバックが慌てている証拠でもある

そんな不安定な状態で人間ごときが我等『妖』を相手取れるとは思えない

（さて、どのようにいたぶって差し上げましょうか？）

彼は心中で舌なめずりした

人間なんて動けなくしてしまえば後はこちらのものだ

拷問して、爪を全て剥ぎ、眼球に砂を詰めるのもいい。生皮を削いでやる過程で男の飄々とした鉄仮面じみた無表情が苦痛の果てにどのように崩れていくのか見ていたい

『お仲間』に助けを求めるのだろうか？それともか弱い女性のようにか高い悲鳴を上げ、命乞いをするのだろうか？

彼が安易に屈するとは思えないが、とても楽しみだ

さらに、『隠し玉』もある。ここで発動させようとは全く思わないが

しかしながら、戦闘中にそういった妄想をするのは油断を招く。極限の緊張状態で油断をすれば注意が疎かになる。注意を削いでしまえば相手に隙を突かれてしまうのもまた事実

圧倒的な身体能力で戦場に臨んでも油断すれば死に直結するという事実を、非力な一般人を有利な条件下で襲い、負けを知らなかった彼は理解していなかったのかもしれない

そしてその事実ほんの数秒後に突きつけられることになる

敵は背後に飛んで距離を取った相手に対し両手持ちから左手にナイフを素早く持ち替え投擲

風を切って直進するナイフはいとも簡単に針金男の刃によって弾かれて宙を舞った

ナイフが落下するよりも早く颯斗は両手にいつの間にか現れたナイフを持って変わらず突っ込んでくる

殺意の塊 人の形を取った凶器

今此処にコートの男を一般人が評価としたら、間違い無く彼をそう評するだろう

それほどまでに男の放つ気配は氣迫に満ちていた

距離を取ったにもかかわらずすぐに追いついてくる敵の突進力に少し驚きながらも意外なまでの冷静さと判断力を持って針金男は彼を迎撃することに決めた

——— 所詮は人間。腕のなぎ払うだけで全身の骨が砕け、すぐに肉塊と化すか弱き存在

人間を超えるものを自称する彼にとって自らより能力の低い相手に頭を使つて対処するまでも無い

迫ってくる相手に自分のとつた間合いが瞬時に詰められたのが氣に食わないのか、それとも戦闘中に氣が昂ぶってきたのかどうかは定かではなかったが、戦闘前に彼を油断のならない相手からただの人間と同一視し最早メートル以内という極至近距離にまで踏み込んできた敵に刃を振り下ろす

彼の脳内では颯斗の得物を砕き、彼自身の肉体にまで大きなダメージを与えられることを期待しての一撃だった

確かに針金男の斬激は技こそ伴っていなかったが、重く速度も十分に有る重たい一撃と化していた。人外の力で生み出された白刃の軌跡は並の人間の肉を切断するどころか骨を断ちきり、反対側の肉の層まで突き破って文字通り一刀両断する位のパワーを秘めている

目の前の男でもまともに食らえば戦闘どころではない傷を負うことは間違いない

そうなれば後は煮るやり焼くなり好きに料理できる。要は一撃当て

ればそれで勝利が確定する

どれだけ素早くても、どれだけ戦闘経験を積んでいようと最終的にものを言うのは超人的なスタミナ、そしてパワーなのだ

その厳然たる事実をもこの男は解ろうとしないで突っ込んできた

いいだろう。思い知るべきだ。この自分の力を

そして畏れおののくがいい・・・

しかし半ば全力を込めて振り下ろされた一撃は

男に当てるところか、掠らせることも出来ず、

ただ、空を切るだけに終わった

そして、代わりに視界が捉えたのは、土の付着した何かだった

「な・・・？」

思考するに間もないままに顔面にそれが押し付けられる。

そして捻じ込まれる。痛い。右片方の眼球に砂が侵入した。戦闘を中断して瞼の中を穿って異物を取り除きたかったが我慢し、不快感を抑えつつ左目のみで眼前を見据えた

同時に着地音。宙を舞った男に一撃を避けられ蹴られたというより踏みつけられたことを理解した針金男の胸中に燃え上がる怒り

「人間ごときがッ！、この私をオオオオオオオオオオッ！！」

――許さない、絶対に殺す。

男に向けられたドス黒い負の感情は彼から正常な判断を奪い、無謀な突撃を敢行させた

片方の視界が封じ込まれたまま、我武者羅に脇差を振り回す剣先が当然、男の姿を捕える事は無かった

「遅い」

「、、、、な！？」

背後に気配。

慌てて対応しようと、振り向こうとした刹那

「、、、、え？」

自分の腕が、

暗闇に一瞬煌いた銀光と共に

宙を舞っているのが見えた

ぼとり。と

腕が落下する生々しい音が小さく、聴こえた

「あ、れ、、？私の、私の右手が、、」

固く脇差を握ったままの自分の右腕のさっきまで存在していた肩口から、蛇口が爆発したかのように血が溢れ出していた。

それを平然と見詰めながらも、黒い死神は依然として彼に冷たい視線を突き刺していた

十七話

「・・・ッ！」

右手を切断された男は信じられない。といった感じで切り飛ばされ、冷たい地面にただ一つの物体として転がっていた

己が腕を見つめる

切られた

何を

私の腕を

誰に

只の人

ヒト

少し強いだけの、愚かしい人間。

ニンゲン

本来ならば、腕を一振りするだけで肉を挽き潰し、骨すらも砕け散り、儚く命が吹き飛ぶだけの存在

刃で切りつけるだけで、その運命ごと両断できるか弱き存在

ひ弱で、脆弱で、他者を知と謀略で支配する浅ましくも、残酷でしただたかな連中

目障りでそのくせ数ばかり多く、他者をつるむ事でしか自分たちに対抗出来ない愚図共。

そんな連中の少しばかり強い、目の前の同胞を助けようともしない群れてばかりの権力の犬に、

強さと誇りを是とする『妖』である自分の体が傷つけられた事は到底耐えがたい事実だった

なんとも形容しがたい怒り、込み上げてくる不快感

そして、謀略ばかり行う筈の狡猾で醜い虫けらによって体の一部を失ったという事実

それらの様々な要素が、彼に『能力』を行使を決意させた

自然に呼びかけると、風が応えた

大氣中に漂う『気』の粒子を無理矢理かき集め、自分の『気』をも擦じ込んで自らの意思を自然の中の力に介入。即席ながらも行使できる一つの力とする

無理矢理捻り出した『気』の塊を残った左手に集中させて敵を消し飛ばし、木っ端微塵にするイメージを掌内で集中させた

具現、又は発現させる力のカタチは『槍』。男の体を完膚なきまで

に破壊し、貫く嵐、どこまでも対象を貫く直線のイメージを頭の中に思い浮かべる

本当ならば、暴風のように対象を粉碎し削り取る『螺旋』と『台風』のイメージを発現したかったのだが、痛みと男に対する憎しみのせいで集中力が持たなかった

そして掌内に集った力は先程の刀也のそれとは比べ物にならないほど密度も威力も無かった、それでも人間一人の体を貫通し致命傷を与えるには十分な量だと彼は自負する

巨大な『気』の力を持つ攻勢不可視のエネルギーの塊を、先ほど自分の腕を切り落とした黒衣の男に向かって解放、照射しようとしたその直後に

「何・・・？」

突然思考の中にノイズが発生。全身に束縛されるような違和感。抗いがたい力を感じた

「な、何ッ！これはッ！？」

激しい頭痛と共に、見えない縄で全身の関節がゆっくり絞め上げられているかのように体の自由が利かなくなる

今の間隔を無理に言葉にして表現するのならば、頭蓋にに氷の刃を突き入れられ掻き回されている。そんな感じだろうか

かまわず無理に『気』の力を解放しようとするが、それを実行しようと考えただけで今度は体全体に痛みが広がっていった

地面に立っているのすらも負担に感じてしまっうほど激痛と拘束感に全力で抗いながらも徐々に彼はその力に屈していく

自らが束縛を受けている原因と先程から駐車場に全く気配を感じなかった原因をようやく彼は感じ取ったようだ

視界の隅に映る死神に向かって憎々しげに告げる

「なるほど・・・術士の、仲間が・・・」

こうなったら、『最後の手段』すらも行使できない。尤もそれを実行すると彼はせっかく得た人の姿を手放さざるを得なくなるのが難点だったが

彼は男を憎悪の籠った眼差しで睨みつける。が黒衣の死神はこれといって表情を変えずに、彼の視線を淡々と受け止める

（数人がかりとは、卑怯な、、、）

やがて足が体を支える力すらも失われ、彼は無力にも地面に倒れ伏し
せめてこの男だけは、と彼の敵に向かって弱々しげに突き出された
残った方の腕さえも重力の力に抗いきれずに地に落ち

彼は慙愧と男に対する憎悪の念を胸中に抱きながら意識を闇の中に
手放した

彼は男の片腕を『符』で強化した得物で切り落とした後にすぐ追撃をかけなかったのには訳があった。

一つは目の前の男が『力』を行使した場合の対処を迅速に行い様子を見る為であり、もう一つの対処は彼の『仲間』が仕掛けた『術』の準備が完了したと踏んだからだ

無論、自分一人で目の前の男——人間離れた彼らを自分たち組織は『鬼の眷属』と呼んでおり。人の形をした超人であることを認識している

彼らの力は強大だ、その力は一振りで大木をへし折り、先ほど見せた自然界に満ちる『気』の力を操れば自衛隊の戦車を潰すこともできる

『眷属』に関して言えば色々謎は明かされつつあるが彼らの主人にあたる『鬼』については多くの事が明らかにされていないかった

そして彼らに関する謎はまだ殆どが解明されておらず、自らが所属する『機関』ですらあまり解ったことはない

しかしそれでも研究は進んだほうである。『鬼』達が何らかの目的の為に動き出すようになってからではあるが

「御苦労様です。隊長」

倒れた男の目の前に立つ彼——颯斗に背後から呼びかける

声があった

「お前のほうこそ、よく働いた」

背後に立っていたのは少女といってもタイツ風の防護着に軍服と見間違ふような半袖のインナーを羽織った、顔だけ見れば少女と言っても差し支えないほどの女性である

日本人らしい鼻腔のバランスがはつきり取れた人形のように美しい顔、少々鋭い我の強そうな光を湛える黒瞳、そして前髪きつちりと切り揃えられ、

肩のあたりで結ばれた艶やかな黒髪が女としての妖しさと彼女自身が持つであろう凜とした雰囲気を感じに発散させていた

颯斗とはまた違った意味で他人を寄せ付けないような冷たい空気を纏うこの少女は、隼人の労いの言葉になんのリアクションも見せずに言った

「『結界』の仕込みのほうに時間がかかりました。捕獲作戦が成功したのは颯斗隊長が『眷属』を足止めしていただいた御蔭です」

「そうか、さっきの警告の時もよくやってくれた。静」

「はい」

静は再度上司の言葉にもあまり反応を見せようとせず隣に居た彼のほうを向いた

颯斗も静の方向を見やる

「それで、この男の身柄は本部に連絡後、私に連行するとして、問題はもう一つあります」

颯斗は静の言う「もう一つの問題」とやらが気になった

彼らの最高幹部『室長代理』から下された指令も、定期連絡の中にもこの男と仲間と見られる団体、彼らが何らかの目的で接触を図っている高月刀也の監視以外の任務は

自分に与えられていない

しかしながらもそれとは別に静が自身に伝えたいという事には何らかの重要な意味があるのかもしれないと思い聞き返した

「何の事だ？」

「はい。私は先程力を発言したと思われる高月刀也を準危険要因と判断し何らかの保護もしくは……」

静のセリフの最中に颯斗は微かに眉を顰めた。穏やかでは無い予感がチクリと自分の胸を翳める

「……本人が抵抗する場合は同人物の抹殺を自分に許可して欲しいのです」

不吉の前兆はものの見事に的中した

十八話（前書き）

十八話

颯斗は静の顔を見つめる

彼女の眼差しは真剣そのものであり容易な返答はできない
迂闊な答えを返そうものならば軽蔑、ひいては一生自分のことを上司として見なくなるであろう。ひいてはこれからの作戦に支障が出てしまうかもしれない

そんな物々しさを感じさせる程迫力の有る鋭い視線だったが・・・

「現時点で高月刀也に関する指令は監視以外に下されていない。無理な行動はするな」

返答の直後、静の眼差しが一層厳しくなる

「彼は『半鬼』としての力を発現し、自衛の為とはいえ『気』を操る力を行いました」

しかも覚醒の直後とはいえ、力に呑み込まれ半分暴走するような形です。後々人類にとって脅威となる可能性があります」

「だからと言って彼は人間を襲ってはいない。保護するか、処分するかどうかは監視を続けた後でも構わないだろう

今急ぐ必要は無い

少なくとも彼は自分の意思を持っているように思える。危険と判断するには早熟だ

それにこれは現場の判断で決めるような事じゃない」

「ですが、脅威を放置しておくのは我々の存在意義にも関ります。もし何かあったらどうするのですか？」

ほんの少し、ほんの少しづつではあるが静の声は苛烈さを増していた

それは自分の意見を真剣に聞こうとしない颯斗に関する苛立ちのよ
うなモノもあるのかもしれないが、彼女の口調には明らかに刀也に
関する畏怖と憎悪に混じった

悪意が見て取れた

先程の冷静さはどこへやら今の彼女はまるで怒り狂う女神だ

「『もしも』、『仮に』で監視対象を排除して行ったら我々は能力
を持たない平凡な一般人すらも監視しないといけなくなる
それに彼はいまだに人を傷つけてはいない。だから・・・」

静は眼を剥いた

「彼は何者かに擬態とは言え先程私を殺そうとしました。この時点
で既に脅威と見なされるべきではないでしょうか」

先程の冷静さは何所へやら、彼女は最早完全に颯斗に関しても半ば
敵意と呼べるような視線を向けていた
あくまでも自分の意思を主張する静を冷静に、そして淡々と事実を
突き付けて収めようとする

「しかし彼は、俺が殺した『眷属』の監視役の死にショックを受け
ていたようだった。最低限の善悪の判断くらいはつくだろう、だか
ら今のところは何もするな」

「ですが、一度人間を襲おうとしたことには変わりありません。今、
後継者質を背後から使役しているもの質と同等の脅威と見るべきで
す。

一刻も早い対応を・・・」

「静。俺達に未だ彼の抹殺命令は下されていない。先走った行動をするな」

「・・・」

静は黙り込んだ

「それにだ。今は『鬼』のこともそうだが今は公安の動きも気になる過去にあつたようにまた俺達の『機関』を潰そうとしている動きもあるみたいだ。

昔と事情が違つて今の『機関』にそれほど大きな力はない。そして『機関』の予算を決めるのは内閣の胸先三寸だ。迂闊なことは出来ない」

「ッ！それじゃ私達の存在意義とは何なんでしょう！

一般人に仇する脅威を排除せずしてどういう意味があるといえるのでしょうか？」

「俺達は国家の意思に従つて動かねばならない。それに俺は室長代理を信用している。

彼女が判断を誤ることは殆どないだろう」

「ですが・・・」

「俺達は誰もが望む正義の味方ではない。国の決めた事にただ従いそれを実行する。それだけの力を持った組織だ

むやみに力を奮えば機関そのものが独裁を助長する組織となる」

そこまで言われて静も黙り込む、納得がいかない表情をしてはいたが

彼女はあくまでも組織の人間であり、自制が感情に勝った

「……………」

「だが、今回の事は室長代理に報告してくれ。引き続き高月刀也の監視を続けるが動向次第で再度警告するかもしれない万が一にはお前の言ったようになる可能性もある」

「……了解……しました……。」

「君の事情は判る。しかし私情で判断するな」

静は踵を返しそのまま闇の中へと去って行った

颯斗は男の倒れていた場所を見やる。何もなかった

まるでさっきまでの激闘が夢の中での事だったかのように

「正義の味方か……。」

先程、自らが言った言葉を口の中だけで反芻し半ば自嘲じみた笑みを彼は浮かべた

しかし直ぐに無表情に戻り、本部へと足を向けた

「静。後は頼むぞ」

「解りました」

音も無く消え去る疾斗

静は上司が消えたのを確認してからおもむろに何も無い空間に告げた

「出て来ていいぞ」

むろん何も起きない
しかし、静は呼びかけた

「遊ぶのはやめろ。お前の氣は掴んでいる
人形を使役していても操り糸の元を手繰れば明白だ。そこにいるな
？貴様。」

「やれやれ、ばれちゃった様だねえ・・・」

駐車場に停めてあるの車の間を縫うようにして黒い影が現れる
ミストが密集して人方を形成したかのような黒い影は徐々に薄まっ
ていき一人の男の姿が露になった

「さすがだねえ。僕を見つけるなんて」

ところどころウェーブがかかった、髪を指で弄びながら白い服の青
年は笑った

「で、何の用かな？」

静は整った眉を吊り上げて冷淡な眼差しで彼を見やる
彼女の視線に疾斗に見せたような激情的な面が見当たらない

「お前、私と疾斗の姿に擬態して高月刀也と接触したようだな
何が目的だ？言え」

青年は口を押さえて笑う

「そんな事僕に聞いてもまともな答えが返ってくると思ってるのか

な？」

「言え。何が目的だ？」

「いやいやいや。ちよつと人の話を聞いているのかな？」

「言え。何が目的だ？」

「おやおや？組織の飼い犬さんたちは相手に対するコミュニケーションのマニユアルが不足しているのかな？」

「何が目的だ？」

青年はやれやれといった風に両手を挙げる動作を取る
明らかに静を馬鹿にした態度だ

「いいよ。禅問答しに来たわけじゃないんだ。教えてあげるよ
出血大サービスだね」

「早く言え」

青年は車のボンネットに寄りかかりながら、ニヤニヤと静を見つめた

「じゃあ言つよ」

静の目は剃刀の様に鋭くなっている、青年に向けられる眼光は其の
鋭さだけで彼の命を奪うと思わせるほどに

青年はそれを見て笑いの度合いを深めた。想定内、といった感じだ

「君にね……高月刀也を仕留めるチャンスを与えてあげよう

「思ったからさ」

「な・・・に・・・?」

「仇なんだろ? 彼のように鬼の血が混じった人間はさ」

静は微かに動揺したようだった

青年の言い分があまりにも自然だったからだ

驚愕する彼女を眺めて楽しんでいるのか青年は笑いを引つ込めず相変わらず唇の端を吊り上げている

「だから、君に彼を処分してもらおうと思ったのさ

『氣』を使う人外の鬼の血が混じった人類の敵。高月刀也をさ

君が望んでいる事だろう?

両親を鬼の末裔に惨殺された君にとっては又と無いチャンスなんじゃないのかな?

『両親』。その言葉を聞くと同時に静の顔が青ざめた

「君は幼稚園も出ないうちに親を失い、術を使役する才能を見込まれて国家の特殊組織『機関』に引き取られた

それから自分の親の記憶が無い君は両親の仇への復讐の為にかの組織の戦士となつて『混血』の連中や『眷属』達を狩り続けた

まあ、仕方ないよね、君にはそれしか生き方が選択でき」

刹那、男の首が飛んだ

「あ」

刹那の居合い。静はいつの間にか手にした短刀で青年を一薙ぎした

刃が月光を反射し死の円弧を描いたときには青年の胴と首の両断されていた

一呼吸の後に胴体だけになった青年の首が存在していた部分から噴水のように血が噴き出した

「黙れ、、、、」

血に濡れた刀を構える静は披露しているようだった

眼光はギラギラし、危険な光を放ち首の無くなった男の体を睨みつけている

青年の首無し死体は未だに立ったままだった

「やはり君は見た目からは想像出来ない激情家だね
もつとクールビューティかと思っただけ。なかなかどうして可愛いよ」

彼女は目を剥いた

自分が切り飛ばし、男の足元に落ちた首が胴体から切り離されても口を動かし、言葉を紡いでいるのだから

「・・・貴様、何故生きている？」

「ああ、この肉体の事ね？そこまで心配する必要は無いよ。もうすぐ黙るから」

「まさか、貴様の正体は」

・ 静の脳内に一つの仮定が浮上する。もしそれが的中したとなれば・・・

「そう、人形さ。マスターに操る忠実な道具だよ」

「・・・人形師。」

「そんな呼び方もあるね。嫌いな称号だけど」

人形師を静は知っている

自分達のような術士のなかでもとりわけ秀でた存在

『機関』の中にも『念糸』を用いて烏を操り偵察に使用したり、甲虫を操る者等、似たような能力を持つものは何人が居る。

しかし、人間をそれも死体すらも使役するような術者は記憶の中において一人しか該当しなかった

「裏切り者。まさか・・・どいかたまこと土井方真言・・・」

「裏切り者？」

心外だけどもあ弁解するのはよしておくか。喋ってられるのもあまり時間が無いし」

「疾斗隊長や私に擬態し高月刀也に接触したのは組織を追われた復讐のつもりか？」

「さつきも言つたろ

君の復讐を手伝ってやるだけだって」

「黙れ」

静は青年の生首を掴んだ

手が血で汚れるのも構わず頭頂部を鷲掴みし、目の高さまで持ち上げる

「洗い浚い吐かせて貰うぞ、お前の目的についてな」

生首は唇を吊り上げて笑った。あからさまに彼女を嘲り、聞き分けの無い子供にしつけを言い聞せる教師のように囁いた

「君は意外と頭に血が昇り易いらしいね。さっきも言っただけこの肉体はそろそろ完全に死を迎える。まあ、直接の死因は君なんだけど・・・」

それ以前に君がいくらこれを拷問しようが術を掛けようが残念な事にこれは僕本体じゃないんだ

だから君が望んだ事を僕の口から吐かせることは出来ないのさあ、そうだ僕がもしかして君の経緯をついついご丁寧に話してしまったから冷静な判断力が出来なくなってしまったのかな？

すまないね、知ってしまった情報はついつい他人に自慢しないと気が済まない質で」

そこから先の言葉をそれが話す事は無かった

静が人間離れた握力で生首を握りつぶしたからだ

偶然にも、同時に首を失い一つも辛うじて直立していた青年の体もふらつき、転倒する

白い服に点々と、紅い紋様で彩られた

飛び散る肉片。黒い衣服と手についた白い脳漿を眺めても静は表情を変えない

当然の報いだ。こいつは私の両親と矜持を侮辱したのだから

静は顔を上げた。夜景に望む満月から漏れる月光は若干、輝きが控えめで見ようによつては橙、否。紅い月にも見えるであろう光を放っていた

彼女は方までさっぱり切りそろえた髪に付いたその残骸――

恐らくは先程飛び散ったものであろう脳漿と混じった物体を拭った

月。紅い月

連想するは血の色

「高月刀也・・・そして土井方真言

私の存在意義を侮辱する者は誰であろうと許さない。いや、許しては
おかない。」

呟いた静の黒瞳は月の光を反射し怨念に応える様に燃え、爛々と輝
いていた

十九話

声が聞こえた

声。愛しい彼が助けを求める声

夢の中であの人は助けを求めていた、自分が他人を傷つけてしまったことを心の底から悔やんでいた

自分の行動を処の底から悔やみ、誰かに対して誤っていた

そして狂おしいほどの自虐の中で己の存在を呪っていた

嗚呼。何と悲しいことだろう

自分は彼の素晴らしさを知っている。自分は彼の優しさを知っている。彼の中に強大な魔物が住んでいるのは承知の上だ。彼はそれを口から押さえつけることによってこの世界を守っている

いみじくも醜く、ただ存在し続ける為にほかの美しいものを犠牲とするこの醜悪な世界という名の鳥籠を

私はこの籠を破壊してしまいたい。殻を破って彼を自由な外に出てしまいたい

そして醜悪な籠の残滓を粉々に砕いて全てを無かった事にするのでそれは、何て素晴らしいことだろう

醜いものはすべて淘汰され、美しい物だけがこの世の現象として在り続けるのだ。そうしてできた世界はきっと素晴らしいものに違いない

自身が望む世界の形

それは

彼と二人きりで在り続けること

それさえ出来れば後は何もかも要らない

そして彼女は目の前の現実を燃やした

この世のものではない赤みが付いた無色の炎

周りの景色が焼かれていく、教室も、学校も、偉そうな教師も、うるさいだけのクラスメイトも

みんな笑いながら紅色の陽炎に身を焼かれていくその顔に日常を張り付けたまま

ざまあみろ

彼女は笑った。それはもう晴れやかに

普段の彼女ならば人前には絶対に見せないような笑顔で彼女は笑う

あははははと。狂ったように笑う。口の端を歪んだ傷口のように最大限に吊り上げ、梟のように眦を見開き、笑顔を浮かべる、狂人のように、精神病患者の如く

長い黒髪が乱れるのもかまわずに笑い続けた

しかし、彼女の目尻から流れ落ちていく雫が光る

彼女は滴る雫を白い手のひらで受け止めて不思議そうに首をかしげた

涙？

あれ・・・何で私は、

泣いているんだろう？

理由は分らない。しかし、胸が悲しみに溢れているのを感じる

でも、こんなにも悲しいのに。近しい人たちを燃やすのが嫌なものにもかかわらず。炎は彼等、彼女らを焼くことを止めない

結局、ここにいる彼らも自分の悲しみに気付いてくれない、やはり、夢の中でも彼らは自分達の事以外には基本的に無関心なのだ
本当にどうしようもない生き物だ、馬鹿は死ななきゃ判らないというが、まさにその通りかもしれない

そうして、彼らが夢の中ですら自らに無関心だということを悟った時

再び、鋭い弧が彼女の口元に浮かび、顔全体が冷笑の形を浮かべる
その貌は、先刻までに彼女が浮かべていた自嘲の側面を多分に含めていた冷笑とは異なり、はつきりと悪意を感じ取ることができる邪悪な『嗤い』だった

悪魔がするような顔を貼り付けた少女は音楽隊の指揮者がタクトを振るかのように、しなやかな白い細腕を前方に突き出しゆつくりと横に振ると

途端に周りの情景が一変した

さっきまで燦ぶるように生徒たちの体を侵していたいた陽炎のように揺らめくだけだった赤みがかった無職の炎は

まるで彼女の怨念に答えたのように勢いを増し青い群青色の鬼火と化した
炎の色が、鮮やかな蒼に変化した時、これまで自分達に降りかかっていた異常にようやく気付いたかのように生徒達が慌て、脅える始める

その様は実に滑稽で、笑いを誘う

くすくすと、笑い声が聞こえた。自分の声だった

眺めゆく生徒達は纏わりつく炎を消そうと地面を転がったり、必死に服を脱いで煉獄の裁きから逃れようとしていた

しかし、その努力はどれも無駄に終わった。いくら酸素の供給減を断とうが、出火元を体から放そうが無駄なことなのだ
なぜならそれは宿主たちの魂を燃料として燃える炎だから、彼らの罪を自分が裁く閻魔の業火だから罪が裁かれるまで消えることはない

『罪状に対する刑罰は、全員死刑。』

それが、彼女の判決だった

見ると殆どの生徒ないし教師たちは動かなくなっていた。彼らが生命活動を停止しても死体を貪る炎。彼らの罪は死した後でさえ消えなかった

結局彼らは自分の苦しみに気付けなかった。彼ら自身の人間関係には異常に気を遣うのにだ

誰も自分の事に気を向けてくれない、関心すらも抱いてくれない

いいだろう。そうやって、仮面みたいな偽りの笑顔を張り付けたまま喪うものにも気付かず朽ちていけばいいのだ

やっぱり、自分の事に気をかけてくれるのは彼だけ――

夢から覚めた

はっと、無意識のうちにシーツの乱れがないか手触りで確かめる。シーツは僅かに皺が寄っていたが得に彼女が気にするような乱れは無かった

「ふう・・・」

溜息をついた、あまり寝相が悪いと朝に起きた時のことが大変だ直している内に学校に遅れ・・・

『学校』

咄嗟に脳内で浮かんだその単語が彼女にさっきの夢の内容を思い出させる

「・・・・嫌。」

最近よく見る悪夢。そして、完全に思い出せないが断片的に断片的に蘇る夢の欠片
その中で起きる惨状。夢の中の自分が引き起こす悲劇
文字通り煉獄の炎に身を焼かれる生徒たち

「嫌あ・・・・」

あのときの自分は嗤っていた。人様の命を自分の手で軽々と摘み取っておきながらも笑っていた
申し訳なさに胸が一杯になる目の前で犠牲になった人たちに土下座して詫びたくなってくる

しかしその一方で『夢の中の出来事だからだから別に何をしても良いじゃない』とか『別に居ても居なくても変わらない連中なんだし』といった声が

心の奥底から囁いてくることもまた事実だった

明かりを点け、壁にかけている時計のほうに目を向ける。時刻はまだ午前二時すら過ぎていない

「・・・・」

まだ学校の始業時間には十分の時間があつたが、彼女は寝ずにそのまま過ごすことにした

夢を見るのが怖いからだ。もし、もう一度夢魔に体を委ねてあの夢を見てしまったら自分は二度と立ち直れなくなるかもしれない怖いのは嫌だつた。そんな悪夢に負けないくらいの強さが欲しかつただけど自分は弱虫だ。人前で意見を言えないから今のよう辛い境遇を招いてる事実は腐るほど熟知している

強さが欲しかつた。それがどのような形のものであつたとしても

昔、自分を虐めから救ってくれた『彼』のような強さがだから、彼女は呟いた

「また・・・あの時のように助けてよ・・・刀也君・・・。」

独りごとは部屋の空気の中に溶けこみ、すぐに消失した

二十話

光が見える

暖かい木漏れ日。カーテンから漏れる柔らかな朝の光が柔らかに彼を包み込む

「う——ん。」

高月刀也は目を覚ました

目を開け、部屋の周りの様子を見る

テレビは点いていない、電灯も点いていない

それなのに関わらずこんなに回りが明るいと言う事は……

「まさかな。」

悪い予感しかしない

ぎこちない動作で首を捻る。

視界の先には時計が在った

そして時計の針の短針は数字の九の部分を指している

刀也の記憶があつたのは確か昨日の八時前後だ、と言う事はそれから転寝でもして一時間経っただけなのかもしれないという。甘い期待に思考が傾く

だが、そんな事は有り得ないのだ

夕方過ぎから一時間経ったくらいで再び太陽が昇るはずも無い、暗くなつたばかりなのにすぐに周りが明るくなるなんて事は有り得ないのだ

そう、これはつまり……

「参った。遅刻かよ・・・」

流石に無遅刻無欠勤者であつた彼はサボる訳にはいかないので鞆に教科書と筆記用具、それに昨日買った模型雑誌を積み込む

この時間帯から学校に着くとなればどんなに急いでも、二時限の授業に途中から入る事になる

そして二時限の授業を担当するのは社会科の篠山だつた

陰険で知られる篠山はきつと遅刻した彼をさぞかし嬉しそうな表情で糾弾するだろう

下手をすると、単位にまで響くかもしれない

「・・・最悪。」

実際に篠山は生徒を何人が留学させた事が噂になっている。隣のクラス担当の若手教師は評判が良い

いつその事篠山が風邪にでもなつて休んでくれたら・・・

サボつて近くの公園で暇を潰そうかとも考えたが、その考えを振り払う

しかし、気が進まなくても学校には出なければならぬ

下らない理由で単位を落としたいと言つのが理由の一つ、進学に影響を及ぼしたくないと言つのも理由の一つ、他の鬱陶しい連中に下手な噂を立てられないかと言つのも一つ

だが、一番の理由はこのまま何の問題も起こさずに行儀良く生活していく事で母が帰ってくるかもしれない――

子供のまじないじみた、純粹な想いからだ

征服を羽織つた刀也は鞆を背負い、玄関に向かいドアを開ける
ドアを閉める前にある事を思いついて立ち止まり一言呟く

「行つて来ます。」

そしてドアを閉じ鍵も閉める

自分の帰ってくる場所は同時に母親である時雨の居場所だ
そんな想い、願いを込めて彼は学校へと足取りを向けた

付け加えておくと、刀也は昨日の事はなるべく思い出さないように無意識のうちに記憶を封印した

あんな事はきつともう無いだろうしあの黒い刀の事なんて自分は知らない

あの感覚、世界の中に大氣に満ちる氣を自在に使役した事さえも

彼は思い出そうとはしなかった

自分の根源。精神の奥深くに潜む何かが自分を乗っ取ってしまいそうで怖かった

昨日の人の形をしたものよりもずっと自分の中に潜む『魔物』の方が恐ろしい

あれは夢だ。そう、きつと夢。己の夢中に存在していただけの漫画じみた只の幻想なのだから

あんな事などある筈が無い。世の中に、世界にあってはならないのだから

二時間前、某邸宅には怒鳴り声が響いていた

「・・・また、お前か真那っ！」

「ごめんなさい。お父さん・・・」

「また、教科書を捨てられたんだっけな。クラスメイトの同級生に」

「・・・」

肩まで伸びた長髪まなの少女真那と向かい合っている男性——彼女
の父親である行雄ゆきおは見せ付けるように溜息を吐いた
性格の悪そうな三白眼が娘を見据え、真那を捕らえる
真那は父親に対する恐怖と畏怖と申し訳なさで震えていた
おびえる子犬の様な少女を見据え、行雄は嗜虐をたつぷりと含めた
口調で告げた

「お前はいつもそうだな

自分の殻に閉じこもってばかりで人と仲良くしようとしもない
いたい私にこんな事を言わせるのも何回目かな？

何時もお前には同じ事ばかり注意しているような気もするよ。

姉なみの奈美を見習いなさい。お前より成績は下だがクラスの子達とも
うまくやっているらしいな。お前なんかとは大きな違いだよ」

「ごめんなさい」

真那は謝った

実はと言うと事件が発覚したのは昨日の放課後だったのだが、自宅
に帰ったら飲んだくれた父親がソファーに寝そべっていた

夜に仕事がある彼を機嫌の悪いときに起こしたくは無かったので、
今朝になってようやく話したら結果がこれだった

彼は真那の作った朝食をひっくり返し、真那に掃除を命じた後に彼
女を登校前なのにも関わらず引きとめ自己満足のための説教をした
のだった

「お前はッ！」

少女の長い髪を行雄が鷲掴みにした

「い、痛い、」

真那から苦悶の声が上がるのも無視して、行雄は言葉を続けた
心なしか彼の声が嗜虐的な喜びに染まっているのは気のせいだろうか

「お前は どうして そう出来損ないなんだ

お前を生んだ忌まわしいあの女は出産したときに私に世話を頼みお
前を世に産み落とすのと引き換えに死んだ！

あいつは病気だったのに、お前をどうしても産みたいと言っただ
！そしてよりによってこの私に預けた

ふざけるなよ！あいつのお荷物なんて誰の引き受けたくも無いに決
まっている！只、親戚や世間の目もある。だから仕方なくお前を養
う事にしたんだよ

お前には私の血が半分入っているからな！

お前が来てから崇子^{たかこ}が、妻が死んでしまったと言っのに、この
疫病神が！」

疫病神。それを聞いた真那から血の気が更に引く

整った蒼白の顔がまるで能面のように表情が無くなり、滑らかな長
髪の隙間から上目遣いに自分の父親を見た

脅え切った視線を向けられた行雄は刃物の先端で自分を指し示され
たかのように驚愕するが、怒りで自らの表情を覆いつくす

そして、自分の恐れを隠すかのように娘を威圧した

「何だ？、その目は！」

父が髪を握り締めたまま、彼女の体を揺らす

「きゃっ・・・」

ぶちぶち、と言う音と共に真那の頭皮から滑らかな髪が何本か抜け

落ちた

父親は手に残った実の娘の頭髪を汚物でも見るような目つきで眺めた後、頭皮をまるで汚物を振り払うかのようゴミ箱に押し付けた

「今度から鞄のお金は自分のバイト代から出さない」

「父さん。私にもうお金は・・

言葉が半分も終わらない内に父の拳が真那の顔面を殴り飛ばす

真那の口の端が切れ、唇の端から血が垂れる

彼女がハンカチで口元を拭っている間にも行雄の罵声は執拗に浴びせられた

「また。遊び呆けているのかお前は！ 帰りが遅いのはきつとそのせいでだろう！

奈美のせいにするなんてこの前のような嘘はもう通じないからなお前みたいな屑なんて学歴が下がればすぐにでも施設に預けてやるのに・・・」

「違います！ あれは奈美姉さんが――」

「五月蠅い！

何であるうとお前の口から出る言い訳なんて聞きたくない！

住まわせて学校にまで通わせてやっているだけ有り難いと思え！ この疫病神がッ！」

行雄は必死に弁解しようとする真那に再び拳を振り下ろそうとする所で電話が鳴った

彼は真那を威嚇するように非と睨み後、ファックス付きの電話が置いてあるテレビ横の棚のほうへ歩いていった

テレビの画面内では超え太ったコメンテーターが下品かつ無責任に与党政府の政策を罵倒し、野党の党首が出した対案を無防備に絶賛している

真那は、テレビから漏れる音すらも、父親の怒鳴り声と同じように他人事のように聞こえていた

それからすぐに電話の応対に出る行雄の声が聞こえてきた

「あ、はいはい

真那の担任の先生ですか

え、こんな朝から？ いえいえ大丈夫ですよ

ああ、娘の進学校の事ですね？ あ、はい。存じております

いえいえ、真那の事を誇りに思っていていらっしゃるなんて、父親としても鼻が高い――」

彼女は、先程と打って変わって上機嫌に電話越しに自分の担任と話す義理の父親の横顔を無表情で眺めていた

気のせいか父に向ける彼女の視線は無理矢理表情の見えない無機質を演じながらも、ある種の冷たさ、怒りを奥底に秘めているようにも見える

だが、彼女自身の感情を載せたその色もすぐに諦観と絶望で灰色に染まり。真那は独り言のように呟いた

「・・・行つて来ます」

か細い声で父に向かって告げると彼女は学校に行くために玄関に向かった

行雄は真那の声を無視したまま、何事なんて無かったかのように、上機嫌に受話器に向かって話続けていた

もとより、父に聞こえるように挨拶なんてしていない。これは自分を保つための通過儀礼であるのだから

今朝の夢の事は思い出さなかった
遠い過去の思い出

自分にとって雄一不動のヒーロー

名前はあまり見ないような人だったがそこだけ覇がかかった様に思
い出す事が出来ない

もしかしたら、あの夢は昔から周囲から排除されてきた自分の幻想
なのかもしれない

現に今、自分を助けてくれるものは居ないではないか

彼女は自虐気味に笑った

捕らわれの自分を助けてくれる王子様なんて何処にも居ないのだ
自分は永遠に虐げられる存在だ。強者と強者に群がる弱者達に

——もし、自分に絶対的な力が有れば、報復に脅える
事も無く仕返しも出来るのに

ふと、彼女の中でマグマのように湧き上がる思い

(・・・ッ！)

真那は頭を振って一瞬湧き上がった自分の暴力的な思考に恐怖した

「・・・私は」

か細い声が弱い自分を象徴するかのように漏れた

「父さんや奈美さん達とは、違います、、、、。」

独り言は空气中に溶け、彼女以外の誰にも届かずに大気に掻き消され雲散霧消する

想いが他人に届かないように、誰も彼女の胸の内に気付いてくれない様に

いくら自分の内を誤魔化しても一瞬沸き起こった黒い怒りと詰めたい殺意の余韻は汚泥のように胸の内にこびり付いている

胸焼けを起こしたような感覚すら覚え、彼女は小さく震えた

外界にはもう夏の余韻はなく、冷たく風が吹いていた

二十一話

「うーっす」

隆二は片手をひらひらさせながら教室に入った

クラスの何人かは彼の方を見て手を振り返してくる

どれも見知った隆二の大切な仲間だ。彼は仲間と一緒に学園生活を送るのが何よりの楽しみなのだからだ

クラス内は生徒たちがそれぞれ己の副業にふけっている

早くも弁当を食い始めている者、グループでお喋りしている者、三人でジャンプを呼んでいる者、友人同士でPSPのモンハン通信対戦をやっている者。

校則で持ち込み禁止になっている筈のノートパソコンで動画サイトを見て一人でニヤニヤしてる者

皆が皆、始業時刻までの間、ゆったりと自らの時間を満喫していた

隆二はこの空気が好きだ

皆が皆。誰も彼もがどのような形であれ学校生活を楽しんでいる

こんなにも楽しい雰囲気の中で一緒に生活できる学園生活は一生の内でも輝く宝物になるだろう

だからこそ自分もあと一年と半年足らずしかない学園生活を楽しまなければならない

そのために仲間という存在は彼にとって不可欠だった

友達がいるから楽しめる、一緒に喜びや感動を分かち合える

実にシンプルで在り来たりな動機だ。まったくもって単純で少年漫画やドラマなんかでよく使われる古いフレーズじみた言葉だとも思う

だから良いのだ。在り来たりであるということは不変であるということだからこそ、人は安心できる

誰にでも理解でき共有できる喜びは昔から恒久に変わらないということだ。それは人類が二本の足で立った頃から変わらない

不動且つ、万全な基盤の上に成り立っている。昔から変わらない法則

だからこそ人は在り来たりという言葉に退屈しながらも、一種の安心感を覚えるのではないか？

日常とはありきたりな毎日の連続だ。その流れの中に時折刺激や変化が生じるからこそ、人は退屈な日常に文句を垂れながらも在り来たりで時折刺激的な毎日に

寄りかかっているのではないか？

そう、劇的な事件や変化がさほど発生しなくても人が退屈な平穩を望むのはそこに理由が有るからなのかも知れない

自分は平穩が好きだ。ただ仲間と一緒に笑いあつて、適当に生きて、適当に就職して、適当に結婚して、適当に子供を育てて豊の上で死ねばそれでいい

自分は平穩の中に寄りかかっていればそれで良いのだ

それ以上は望むことは無かった

そして今は将来のことなんか考えずに学園生活を楽しめればよかった。どうせ就活に励むにしろ大学を目指すにしろもう少ししてから考えればいい

今は未だ二年生の九月ごろなのだ、体育祭もあればその後に学園祭もある。今は学園祭の出し物のことに集中したい

今年こそはメイド喫茶とお化け屋敷を両立させた出し物がしたい。予算の許す限りだが思う存分取り組んでみたいと考えるのは当然だ

ろう

自分は学園祭の予算係なのだ。ある程度の発言力はある、それに自分の使命に賛同する同士が十人も居るのだ。目論見の成功率は高い、
、、、殆どが男子なのは残念だが、
、、、

まあ、大丈夫だろう。某学会の事ではないが、組織票の力は強い

それに自分の理想に賛同するものは結構居るはずだ、説得行進すれば賛同者は更に十人、いや二十人くらい増えるはず

民主主義の世界では多数決にこそ正義がある。

隆二とその仲間たちの組織票を持つてすれば確実にメイド喫茶をク
ラスの出し物とする事も可能だ

今だ！クラス男子の総力を挙げて学園総女子メイド喫茶化推進デモ
だ！

我々は文化祭の出し物にメイド喫茶を要求する！

彼は一人ニヤニヤほくそ笑む。

何もかも自分の掌の上だ

こんな状況でほぼが緩まないほうがおかしいのだ
既に賛同者の数は両手の指の倍以上、よし早速呼びかけて今日の放
課後早速ロビー活動を……

「こら、隆二。何をにやけている？」

いつの間にか教室に入ってきた担任の大垣が彼に注意した

「あ、すいません。ちょっと文化祭のことを考えていて・・・」

「文化祭の事より自分の成績のことを心配したらどうなんだ？」

「ここ最近の不況のおかげで只でさえ高卒の就職率は低いんだぞ？」

隆二はこういうわけかへらへら笑いながら言った

「へへ、すいません」

大垣はお気楽な彼の態度に呆れたようだ

「遊ぶのもいいが、線引きはしっかりしろよ

お前は刀也や守子と比べると大分成績が劣るからな。俺が企業なり大学なりに推薦するときも苦労させるなよ」

「わかったッス」

担任はまたもや彼の態度に呆れたようだった

「どうでもいいが将来のことも考えろよ

お前の頭じゃ専門学校に通るすらも怪しいんだからな」

待ってました。といった感じで隆二は指を鳴らしガッツポーズを取った

パチン。と乾いた音が小さく響く

「それなら心配ないッス。親父の知り合いが美大の教師と親友なんです、裏口で楽勝ですよ」

「お前・・・裏口なんて専門学校ごときでするなよ

甘い事と言わずに勉強して有名大学なり、就職なりして親御さんに
楽させてやれ、高校に入るまでお前を育ててきてくれただろう
親孝行は出来るときにやつとくものだ」

「うーん。まあ、程々に考えておきます」

教師は溜息を吐き、黒板の真上に掛けられている時計を見上げた

「お前と話すと埒が明かない。近いうちに職員室に呼び出すから覚
悟しておけ

では、気持ちを切り替えてホームルームを始める。では号令」

「あ、え？、呼び出しですか？
それはちよつと待つ――」

「では起立」

「礼」

示し合わせたようなタイミングで委員長の声が響き、隆二の声は掻
き消された

『おはようございまーす。』

生徒達の声が朝の朝礼に響いた

（はあ、ついてねえ）

隆二は憂鬱を吐息として吐き出した

一元目の授業は数学だった

担任教師は隆二に呼び出しを宣告した後、プリントを渡した後に文化祭の準備について必要な事を話した後さっさとホームルームを終わえ切り上げてしまったのだ

まるで隆二の追求から逃げようとするかのように

事実、隆二はあの後担任教師に自分に相談は必要ないと弁解するつもりだったのだが、担任は隆二と話す事を避けているようだった
まるで、言い訳は呼び出した後職員室で聞いてやる。といった感じに

壇上で女性教師の佐々木が微分方程式の復習と称して、隆二には理解不可能な公式を速いペースで黒板に書き綴っている

このクラスの数学担当教師の柴田はどうやら休みらしい

佐々木は生徒に評判の良い教師だったが、隆二からすると佐々木のほうが柴田より昼寝がし易いという意味で有り難い存在だったが
他の生徒達は既にその程度の内容の復習は自宅で行っているらしく
数学とは関係の無い英単語帳を開いたり、工学の教科書の重要な文に線を引いたりして半数以上が別の課題
の復習をしていた

白いチョークで方程式の公式を書き綴っている佐々木教師は教え方

はやや強引でスピードも早いかわかりやすい授業をする事で評判の良い教師だ

噂によると県内で有名な大学をかなりの好成績で卒業したらしいしかし、毎回ノートを取っていた隆二は身の入った勉強をしたことが殆ど無く、数学の内容も二年で複雑な公式を用いたものが多く出た為、既に三年の授業内容はちんぷんかんぷんで、彼にとっては理解の難しいものばかりだった

（俺には勉強なんてする必要がねえのに・・・）

お節介な担任が何故自分を呼び出す必要があるのかはわからないが、自分は美術の専門学校に行き何をするつもりだったのかも判らないよくよく言えば自分は真剣に将来のことを考えた事があったのだろうか

隆二の記憶にある中ではあまり無い気がした。彼は自称刹那主義者だそのときそのときで楽しい方向で振舞っていればいいと思っていたが

（俺の夢か）

ふと、試しに開いているノートにMY DREAM・と書いてみた。相変わらず字は汚い

いまいち自覚が判らない

隆二は溜息をついた。やっぱり後先考えずに行動している自分の行き方もそろそろ見直す時期が来ているのかもしれない

しかし自分の周りで夢を持っている奴は大企業に就職するとか、モテたいだとか、スポーツカーを公道で想いつきり走りまわしてみたいだとか、欲望に則した者ばかりだ

持つならきつと誰も真似できないようなでっかい夢のほうが良いに決まっている

誰かに話してみようか、と思ったそんな時一番頼りにしたい奴は・

・？

（何でこんな時に刀也が居ないんだよ、、、）

隆二はまた溜息をついた

前から佐々木が一瞬自分を睨んできた気がする、とりあえずにこりと笑顔で返す。彼女は無視した

仕方の無いことだが、とりあえずは授業に集中しているふりでもしなければいけないのだろう

彼は自分のノートを見る、他の生徒とは違いあまり汚れていない綺麗なノートだった

当然だ。隆二は授業を真面目に受けていないどころか、しばしば教師が黒板に書いたところをも写しもしなかったから

せいぜいが教科書内の文章に緑色の蛍光ペンで適当に線が引かれているだけである。しかも彼自身線を引いたところのどこが重要なのかさっぱり理解していないのであった

（夢ねえ・・・）

夢といっても明確なビジョンが浮かばない

（まあ、刀也辺りに聞いてみるかね。あいつもそういうのには興味無さそうだけど）

隆二は密かに決意する。

今日の昼飯を餌に刀也に人生相談しよう。少なくとも担任に呼び出されて説教するよりは有意義な談義が出来そうだ

隆二は他の友人にも相談しようと考えた。しかし彼の友人の中で口の堅そうなのは雪久と刀也位しか思い浮かばず、雪久に至っては理系の有名大学を受験する事を決めていた

為に参考にならないと判断したからだ

そして、刀也は他の奴から言わせれば外見だけはいいのだが、そのほかの部分。たとえば愛想や人付き合いなどで暗い奴とされているものの隆二は彼の人の良さを知っていた

尤も、刀也があまり馴れ合う事を好まないために自分の事がもれる可能性が別のクラスで委員長を務めている雪久より低いと判断した打算も関係していたのだが

（しかし、今日あいつ見てないな
ひよっとしてサボりか？）

隆二は朝礼から一時間目の授業の間に未だ見当たらない友人の事を思った

そういえば、今日は彼の姿をまだ見ていなかった

（ま、早いうちに学校にう来るだろう）

以外と真面目な友人の遅刻は心配せずに、隆二は机に突っ伏した昨日はゲームセンターで午前一時まで暇を潰していた寝不足故である。無論、彼は真面目に授業を受ける気など欠片も無かった

二十二話

学園生活において五時間目について辛いと思われるのは二時間目の開始時刻だ

一時限と比べて気が引き締まる訳でもなく昼食と昼休みを控える四時限ほど気が緩まず、生徒達の目が覚め始める三時限ほど雰囲気が悪くなるわけでもない

高月刀也が教室に入ってきたのはそんな微妙な時間帯の授業中だった

間が悪い事に、丁度その時、二時限の始業開始後三十分後は彼の教室では老年社会教師の篠山昭宏さたやまあきひろが遅れに遅れた授業を取り戻さんと必死に黒板にぼぼ

教科書の内容を移すだけの味気の無い授業に、予習で彼が移した内容は既に知識としていた生徒達がうんざりしている時だ

実の所。意外な事に授業に苛立っていたのは生徒達ではなく篠山もそうだ

生徒達が何回注意しても自分の教えている内容よりも先を予習している

今回のテスト作成を担当していたのは篠山担当ではなかった。彼の授業に期待が持てない生徒達はそれを知っている

この学年には篠山のほかにも社会科教師は若手の先生が一人居てその教師こそが今回のテストの作成を担当している

そして、授業の進め方が遅く、生徒達の評判も良くない篠山よりはその教師のほうが生徒達に快く迎え入れていたのも当然

このクラスの中においても新人の教師に授業を受けたいという風潮が高く感じ取れるのも事実だ

彼は黒板にチョークを叩きつける様に文字を書きながら自分の首筋

が無凶痒くなるようなものを感じられずに入らなかった

生徒達に当てにされていない。敬意を払われていない

自分は教師だ、無能で愚鈍なガキ共に知識を授けてやる存在なのだ
それが何故に自分は若造よりも信頼されないのだ？

チョークが真ん中から折れた。どうも知らず知らずのうちに筆圧を
込めすぎていたらしい

舌打ちしながら教壇の引き出しに収まっているチョークケースを取
り出し新しいものに交換する

チョークが折れるのは本日三度目だ、今日はよほど自分が苛立ちを
覚えている事は鈍感な篠山にも解った

そんな時だった。彼の視界に部屋に入っただばかりの生徒の姿が目
に入ったのは

名前は確か・・・高月刀也

昨日自分の授業中に机に突っ伏して黙をかいていた生徒だった
確かに成績は優秀なのだろう、保坂守子と共にクラスの平均点を挙
げているツートップの一人らしいが、最近の動向は目に余るもの
がある

指導しなければならない、他の生徒に舐められないためにもだ

彼は刀也を絶好のターゲットにする事に決めた

授業が円滑に進まない苛立ちのストレスを晴らす、昨日の屈辱を晴
らす。ただそれだけの動機に過ぎなかった

「おい、高月。何で授業に遅れた？」

「・・・」

刀は無言で篠山の方を見る

篠山の方向は一顧だにせずそのまま席に着いた
完全に無視された形になる彼は苛立ちと共に再び刀也に言う

「おい、高月。授業に遅れた理由を言え」

威圧的に構え篠山が言うも、当の刀也は居心地が悪そうに窓外の景色を眺めるだけで何も言わなかった

篠山の苛立ちは上がったが

すぐに汚い笑みを浮かべる

今の刀也の様に反抗的な態度を取る生徒には有る程度踏み込んだ『指導』を行っても許される

それが教師としての勤めだと彼は日ごろから考えていた

例え、どんなに成績優秀な生徒でもだ

自分が正さねばならない、正義の教師たる自分が

「おい！高月」

刀也は眠気がまだ残っているのか横目で彼の方向を一瞥しただけで何も言わない

篠山は刀也の席まで近づき着席している彼の肩を掴んだ

「私の言う事が聞こえないのか！」

ちっ。と小さな音が聞こえた

誰にでもわかる舌打ちの音

不快感。

刀也の席から聞こえてきた。紛れも無い彼自身の舌打ちだった

その時、篠山は

刀也に舐められたという不快感の代わりに、かわりにどす黒くドロドロした物が血潮の変わりに自分の体を駆け回っているように感じた

不良は正さねばならない、どんな手段を使ってもだ

彼は席に座った刀也を見つめた

刀也はテキパキと鞆から道具を取り出し机の上に並べ、引き出しに手際よく収納していた

篠山は刀也に更に近づく

刀也が近づく篠山に気付き視線を向ける、疲労している様子は有るが表情は殆ど変わらないポーカフェイスに近い

彼の眼光が自分を侮蔑したものである。刀也の態度を自分なりに解釈した篠山は次の瞬間、机の上に並べてあった刀也の教科書を手で払い落とした

刀也の目が微かに見開かれる前に彼は吼えた

「一体何のつもりだ。高月！」

遅刻しておきながら反省の態度も見られないとは、お前学校を何だと思っているんだ!!」

刀也は答えない、只その場に直立して篠山を見て答えた

「……すいませんでした。次からは気をつけます」

ささやかに篠山に謝罪した刀也は席に座った

篠山は手にした黒板指しで刀也の頭を軽く一回叩いた

「高月刀也

君は私に教師として尊敬を抱いていない事など当の昔に判っているんだ

それになんだその態度は、遅刻しておきながら教えを請う教師に謝る事も出来ないのか君は！」

「だったら、俺みたいな不良の相手なんかせずに教師としての貫禄をつけたらどうですか？」

「・・・何？」

彼らしくない慇懃な丁寧語

刀也は苛立ちを隠さないように続けた

「実力も無いのに何時までも巨大な後ろ盾に縋って、今こうして教壇に立っていられるだけの教師を貴方は尊敬を抱く事が出来るんですか？」

明らかに挑発されているのにも拘らず、彼は何も言い返せない

「・・・どういう意味かな？」

「言葉の通りの意味です

ちなみに遅刻した件について俺が悪いので謝っておきますだからこれ以上騒がないで下さい」

「お前は…私を嘗めているのか？」

篠山が冷えた声で呟いた瞬間、無関心を決め込んでいた周囲にも緊張感が走り教室の温度は一気に凍りついた

「私の事はどうでもいい。それより、君は自分の単位の心配をしたほうがいいんじゃないのか
まさか教師に舐めた態度を取っておきながら只で済むとは思っていないよな？」

篠山は切れ始めている

それは、この室内で誰もが理解している事だ
現に彼の額には青筋が浮き、黒板指しを握る手は静かに怒りによって痙攣するようにに微かに震えていた
刀也は何も言わない、態度で篠山の怒りなど眼中に有らずと言外に示していた

「最近の君の行動は目に余るものがある
遅刻といい教師に対する暴言といい、一度担任の大垣先生を交えてじっくりと話し合う必要があるな」

篠山が怒れば怒るほど刀也の意識は醒めていった

つまらない

お前なんてその気になれば永久に黙らせてやるのに

俺の力で

怒りを抑えた篠山の表情とは対照的に刀也の顔に浮かんでいた表情は徐々に消え去り自然体な無表情に変わっていく。篠山は得体の知れない気迫を感じ、僅かに怯んだ

刀也はとうとう苛立ちを抑えるのも限界になってきた
何故こんな馬鹿に因縁を付られねばならないのか
もしかしたら昨日の事が原因なのだろうか？

「おい、聞こえているだろう！」

五月蠅い

こいつは盛りのついた馬鹿犬のように鬱陶しい

「一体、私の授業の何処に無駄があると言っのかな？」

何故、自分がそのような些事に答えねばならないのか
全く、馬鹿の相手をするのは疲れる

刀也はだるそうに、眉をひそめ微かに呆れたような表情を作った
気のせいかな、額をかく仕草が眠たそうにも見える
そして、物分かりの悪い老人を諭すような口調で言う

「誰も先生の授業中の説教なんて、望んでないと思うのですが
中間テスト前に内容を進めなきゃ時間が無駄になりますよだから無
駄な説教はやめて早く始めたらどうですか？」

刀也は言った後に、彼を馬鹿にするように欠伸した
生徒達も刀也に同意するかのようには篠山を見上げる
第一、彼の悪趣味な因縁付けに付き合っている意味は無いのだ、時
間の無駄にもなる

無数の視線に晒され篠山は黙った、そして刀也の席まで近づいて彼
の肩を掴んだ

じっと濁った瞳で彼を見下ろしている

刀也は不快そうに視線を返す

何をするつもりなのだろうか

肩から伝わる感触が生々しい

汗で濡れている

気持ち悪い

何だこいつは？

「何ですか？先生」

篠山は刀也の肩を掴みながら口をもごもごさせた
かなり怒りが溜まっているらしい、掴まれた肩から圧力がひしひし
と伝わってくる

篠山の顔を見ると怒りで真っ赤に染まっている

俺を殴るつもりつもりだろうか？

やってみろ

一度手を出したらこちらも容赦しない

教師だろうが関係ない、前からこいつにはむかついていた

徹底的にぶちのめし、どちらが上か思い知らせてやる

自分は今、最高に機嫌が悪い

肩を掴む篠山を睨む、ぶつかる視線

互いを刺す悪意

教室中に彼らのやり取りを眺める三十人あまりの生徒達は事の成り行きを神妙な面持ちで見守っていた
室内が異様な空気に包まれた

そして、、、

篠山の手が刀也の方から離れた。彼は刀也の視線から刺さる圧力に屈したのだ

教壇に戻る篠山。刀也は無様な彼を見て唇の端を歪めた

俺の勝ちだ

篠山のプライドはずたずたに引き裂かれたに違いない
もう二度と舐めた真似はしないだろう
だが、篠山は一度振り返って何か言った

『……………母親に捨てられたくせに』

篠山昭宏はそう言った

よほど小さくぼやいたのだろう
だれも彼の呟きの意味理解したものは居ない、ましてや声なんか殆ど出なかったはず
しかし刀也は解ってしまった
彼だけに聞こえていた。何故かは解らなかった

ただ、その一言が自分の奥底にある琴線に触れたのは間違いの無い事実だった

刀也の自分の顔から顔から一切の表情が無くなっている事に気付いた彼が自分の席を立つた音にさえも

「……なんだ？高月
何か言いたい事で……」

篠山は押し黙った

刀也の表情が静かな怒りに染まり、殺気と呼んでも差し支えないほどの眼光が自らを捕らえているという事に

「……な、何だ貴様。生徒が教師を殴るつもりか！！」

答えの代わりに刀也が突き出したのは右手に硬く握られた拳

「……い、いや。」

あれは冗談のつもりで……本気で言ったんじゃないだよ……
な、だから暴力は止めような、暴力はいけない、暴力だけは……

「

先程とは逆に態度を丸くする篠山あからさま過ぎる卑屈

刀也の唇が微かに動き、言葉を紡いだのを篠山は見た

音こそ漏れなかったものの彼は自分が挑発した教え子が何を言っているか理解できてしまった

後悔させてやる

言葉と共に刀也の拳が篠山に向かって解き放たれた

「ひいっ!!」

顔面に襲い来るであろう衝撃を覚悟して顔を両手で庇い彼は目を瞑った

学生運動時代にも自分に暴力が振るわれた経験が無い彼は自分に降りかかる敵意を正面から見据えることなど出来はしなかった

それが、自分の弱さである事に篠山は自覚が無かった
顔を強張らせ殴打に備える篠山

「!.....」

しかし彼は何時まで経っても殴られる事が無かった
そして、聞こえるは机を蹴飛ばすような音と罵声

「おい、止めろ」

「離せ!こいつの言ったことを今すぐ訂正させなければならないんだ」

「馬鹿だろうが!お前、教師に手を出したらお前の校内での立場がどこまで危うくなるか判っているだろう」

「そんな事はどうでもいい。まずは野郎を・・・」

再び怒号、そして誰かが殴られる音

そして、机の倒れる音

「馬鹿かッ！お前は！！！」

篠山は目を開ける

そこに見えた光景は自分を殴ろうと拳を振り上げる刀也の姿ではなく
刀也と男子生徒――確か成績が最下位から二番目くらいの頭
の悪い生徒だ

この前自分の授業に水を差した、髪の色素が薄く茶髪に見える生徒
だと記憶していた
もちろん彼の中で高月とは別の意味では好ましくない意味で印象に
残って入るのだが

「お前解つてんのかッ！」

お前の勝手な行動で誰が苦しむか考えてみる！」

「……そこをどけ」

「お前……いい加減にしろッ！！」

いきなり隆二が刀也を殴った

殴られた刀也は驚いたように隆二を見上げる

そしてそのまま暫く棒立ちでほうけた後に一言だけ言葉を紡いだ

「………済まない」

刀也は教室から抜け出した

「おい待て。バカ刀也っ！！」

すかさず隆二が教室から抜け出した刀也の後を追いかける

急に静かになった教室

数分前まで不機嫌だった篠山も状況が理解できないのか、何か考え事でもしているのか、黙りこくったまま棒立ちしていた生徒達は案山子と化した篠山をそのままにそれぞれテストに備え密かに予習を続けているのだった

二十三話

「おい、お前。どういづつもりだよ？」

「・・・・・・」

風が吹く屋上

この学校は他の高校とは異なつて屋上が開放されていた
二十年前に隣接する県で起きた飛び降り自殺の影響で、親達の間にも生徒達の安全を重視する声が高まり全国的に屋上の開放は禁止されていたが、
事件の風化と生徒会での決議によつてこの学校ではいち早く屋上を生徒が、制限付だが自由に使つても良いとの決定がなされた
これは全国的に見ても生徒の自由度にかなり寛容である星雲高校ならではの事だった

この動きには生徒会に所属している菅原雪久に対して友人である隆二やその他多数の生徒による働きかけによるものが大きい
刀也もこの事に関しては承知してはいたが、彼は基本的に最低限の人間関係に関わらず、たまに隆二に誘われて食堂で購入したパンを食べるなどの時以外は
屋上という場所には行つた事も、積極的に使おうという気も起きなかった

彼は基本的に最低限自分に関わる事意外は無関心だったからというものもある

そんな彼を、隆二は心配していたのもまた事実である

今日の刀也は何かおかしかった

何時もなら遅刻なんてしないはずの刀也が授業に遅れて、教師に殴

りかかろうとする事などありえない話だから彼自身もひどく驚いていた、自分が何故刀也を庇ってしまったのかを

「篠山にあそこまで言われて腹立つのは何でも・殴ろうとするまではまずいだろ」

「・・・。」

刀也は何も答えを返さない

唇をかみ締めて何かに耐えている様子だった

恐らく昨日に加え陰険な侮辱を受けたのが気に食わなかったのだろう
詳しい事は隆二は解らなかったが、以前の彼ならばこんな暴挙に及ぶ事は無かったのかもしれない

実際、隆二自身も驚いていた刀也は彼の友人の中で一番暴力的な側面とは無関係の様に考えていたからだ

隆二は刀也の事が心配になった

何故、今日に限って篠山を刀也が殴ろうとしたのか？

昨日はそうでもなかったのに

「おい、お前今日はなんか変だぞ。昨日徹夜でもして寝坊してイライラしてんのか？」

「・・・。」

刀也は隆二を無視しているかのようにフェンスの向こう側を睨んでいた

「お前の琴線にあの馬鹿が安易に触れてしまったってのは判る

それでお前は怒った訳だよな」

刀也は俯いて何も言わない

しかし、かすかに首を振り隆二の言葉を控えめに肯定する

「あんなに感情的になったお前は始めて見た
でも、今まではそんなに気にしなかったろ。」

「・・・そうらしい。俺でも良くわからないんだ・・・何がなんだかなんであいつの言ったことが解ったんだろうってな」

「・・・何の事だ？」

刀也は違和感を覚えた篠山がぼやいた一言は隆二には聞こえないほど小さな声であつたのか

確実に彼は刀也の家庭事情に対する侮蔑を口にしていた。しかしそれほど大きな声で篠山が愚痴っているとも思えなかった
確かに自分には聞こえたはずなのに

「いや、気にしないでくれ。遅刻して苛立っていただけだ」

刀也ははぐらかす事にした。他人には聞こえない声が自分だけ聞こえるなんて変な話だし、何よりも自分の内面に安易に他者を踏み込ませたくなかったからだ

「まあ、そのとおりだ。お前こそ気にすんな、あいつは殴られて当然のことしたんだからな」

隆二はまるで気にしていないように屈託の無い笑顔で笑った

誰からも好意を抱かせることの出来る、嫌味もなければ皮肉も無い

裏表の無い隆二らしい笑顔だった

刀也は微かに胸が痛んだような錯覚を覚えた

「まあ、コレで暫くあの篠山も大人しくなるだろ

アイツにはみんな苛ついていたからな。授業が進まないって

それに、あいつがこのことを問題にしたとしてもだ、クラスの連中はみんなお前に味方するよ

ま、仮やばくなったとしてもだ、俺が付いているからな。心配するな」

「・・・少し不安だな。」

隆二はわざとずっこけるようになりアクションを取った。刀也は少し笑ってしまった

「おいおい・・・当てにしろよ」

「解ったよ。いざとなったら頼りにさせてもらっ」

「まあ、その・・・なんだ」

隆二は口をもごもごさせていった。何か言いたいらしい

「いま何か悩み事があるんなら無理に話さなくてもいいただ、周りを心配させないようにな

篠山の事なんか気にしてたら陰険な性格が移っちゃうぜ、来月ごろには文化祭もあるんだ就活は・・・まあ来年からすればいいだろ」

「・・・わかった。心に留めておくよ

それよりお前は大丈夫なのか？この前のテストでは確か・・・」

途端に隆二は慌てた。何かまずい事にでも触れられたかのように

「わーっ！！そこは言うな。俺は俺で何とかするから大丈夫だ」

やけに慌てていった隆二。

「お前は俺なんかと違って成績優秀だし、ルックスもいい俺みたいなぼんくらは落ちこぼれても誰も気にしないが、お前の場合は母さんが帰ってきたときに息子が教師を殴りました。なんていったら卒倒するだろ

俺はイヤだぜ。クラスのみんなに迷惑が掛かるなんてな」

「お前、おせっかいだな」

「ウザイと思っている奴も居るかもしれないがそこが俺のいいところだ」

二人は顔を見合わせた。そしてお互いに笑った

その時、ちょうど授業終了のチャイムが鳴り響いた

澄んだ鐘の音はまだまだ肌寒い外に広く響く

りーん。と耳に残る音を響かせながら朝の空気の中に浸透していく

星雲高校のベルはスピーカーから流れる電子音声ではない、きちんと鐘を鳴らしているのだ

一部の生徒からは古臭いと評判の良く無い声も聞くのだが、鐘の音は星雲高校の名物となっており。受験用のパンフレットにも記述

がある

どうやら富豪だった前校長からの寄贈品であるという話らしい
なぜか、女子生徒には人気があるらしいが、詳しい事は隆二にはわ
からなかった

「いつの間にか授業が終わったらしいな」

「そうだな」

「篠山は次は別学年の授業だし、教室には居ないだろ。早く戻るか」

「お前は大丈夫なのか？俺と一緒に教室を抜け出して」

「大丈夫だろう。多分

俺は担任にも呼び出されているから今更あいつに呼ばれても気にし
ねえよ

お前に関しては篠山ビビってるから大丈夫だろ」

「多分って・・・おい」

「安心しろ。あの爺にお前を呼び出してどやしつける程の根性はね
えから

あいつ、お前が切れたときかなりビビッてたしな。顔を庇うくらい」

「マジか？」

「写真に撮って脅迫のネタにしたいくらいの顔芸だったぜ」

「それより早く戻ろう。次に遅れる」

「次は体育だ。球技で思う存分鬱憤を晴らそうぜ！」

「そうなのか？」

昨日とさっきの篠山での事ですっかりと次の時間の事が頭から抜けていた

そういえば、最近体育の授業が多い気もするが何かあるのだろうか？

「今日の試合は敵同士だな。お前がいくらガードを固めても絶対に突破してやるからな！期待してるよ！！」

「はいはい。解ったよ」

二人は屋上から教室に足を向けた

秋空は絶好の快晴。まさに体育日和だった

二十四話

真那は休み時間のチャイムがなったと同時に教室を出た
なるべく早くクラスから逃げるようにして足早にトイレへと急ぐ

彼女にとって自分の家と学校の教室という空間ほど居心地の悪い場所は無かった

家では行雄による虐待を受け、学校でも女子生徒達から攻撃目標にされていた真那にとって学校で過ごす時間もまた苦痛と呼べるものでしかない

女子からは全く相手にされない彼女だったが、稀に男子が話しかけてくることもあった

しかし真那は彼等が裏に抱える何らかの下心を敏感に察し、彼らともあまり関わりを持つとはしなかった

怖いのだ。彼女にとっての人とは十五年前に死に別れた母親と過去に虐めから彼女を助けてくれた思い出の中だけに存在する男の子以外は

真那自身にとって恐怖の対象でしかなかった

生徒達であれ、教師であれ、家族であれ自発的に真那に話しかけてくる人達は目的が違えど真那を貶めようとしている気がしてならなかった

みんなが、世界が真那を拒んでいる

母が死んでからの彼女の中の世界はひどく歪に見えた

（どうして、私は人を好きになれないんだろう。）

真那は他人を見て嫌な気持ちになっってしまう自分自体をおぞましい物だと考えていた

彼女は他人から関りを拒否される自分のことも好きになれないでいた朝、絶望感のあまり鏡を見て自分の肌に果物ナイフを突き立てそうになった事もある
もしかしたら、そうすることで誰かが振り向いてくれるかもしれないから

（みんな、私が変わだから・・・嫌っているのかも・・・。）

真那は自分が人と異なっているところを自覚していた

極度な人見知りと人間不信から来る不安

定期的に揃えているだけの長い黒髪

そして、白磁のように白い肌

（これだけ違っていれば嫌われるのも当然なのかな・・・？）

内気で謙虚な彼女が心を落ち着ける場所は女子トイレの個室だった誰も居ない静かで狭く半畳の広さしかない個室は大きく歪んだ世界から彼女自身を守ってくれるオシアスだった

食堂が近い事もあって幸いこの場所のトイレに入ってくる生徒は誰も居ない

校舎の一階に教室を持つ真那のクラスはこのトイレよりも食堂のほうが距離的に近い事もあってか休憩時間は其方の方に人が流れる事が多かったのだ

真那は個室に入るとふう、と一息吐く

これで後七分は静かに過ごせる。時計は持っていないので勘みtain物だが

教室の喧騒は彼女には毒にしかない

あそこにいると余計に気が張り詰めてしまう。人の目を警戒しすぎて息が詰まってしまう

集団が発する異様な雰囲気は真那は苦手なのだ

他のクラスはどうか知らないが、真那は自分のクラスがインドのカーストみたいに見えない制度で生徒ごとに区別されているような気さえた

自分はもちろん最下層、人と満足に話す事ですら出来ない「奴隷」の立場。そして彼女を虐め学校生活を満喫している者達「貴族」には決して逆らえない

「あれえー。このトイレ誰が入ってるのー？」

「さあ？鍵が壊れてるんじゃない？」

いきなりの事だった。外から数人の女子生徒の声が聞こえてきたのは

（もしかして？、奈美姉さん！）

真那は身を縮ませた。声の一つに聞き覚えがあるからだ

と、同時に声の主に見つかってはいけないと思い必死に息を潜めた

あの中の声の一つは自分の姉の奈美^{なみ}だった

しかし真那は姉の登場に脅えた。彼女こそは真那を教室内で苛め抜いているグループの代表格だったからだ

「おーい。だれもいないんですかぁー？」

ドンドン、と叩きつけるような乱暴なノック

真那は早く声の主。奈美がトイレから出で行くか他の個室に移ってくれることを切に願った

「ちえ、入っているのかよ。じゃあしょうがないなあ」

「大体誰だよ。こんな汚いトイレの中で様を過ごしてるのは」

「便所虫でも出てきそうじゃない」

「入っているのは多分、真那じゃないの？」

「あの幽霊女。いつもスカシやがって・・・マジム力つくんですけど
お」

「あいつっていつもすかしてる癖にさ、妙に男に声かけられるよね
もしかして裏で売ってんじゃないの？意外にスタイルいいみたいだし、
髪長いし、顔も何故か綺麗だし」

「真那は心が汚いんだよ、じゃないとウチらにシメられたりしない
って

アイツ、家で父さんにも嫌われてるし。ゴキブリみたいにしぶとく
学校に来るし

ま、成績下がったら即施設送りだけだね。また教科書捨ててやろう
かな？」

「チキショー、なんでアイツばかりでモテるんだよ。又体育館の

裏でシメてやろうかな?」

「あ、^{あや}彩。それ良いね」

(お願いだから・・・見つからないでッ・・・。)

真那は切に願った。もし自分が見つかったら奈美はさぞかし喜ぶだろう、そうなってしまったら後は・・・

「ちっ!しょうがない。行こうぜ」

立ち去っていく足音。真那はほっと胸を撫で下ろした

次の瞬間に白いチョーク粉が大量に付いた黒板消しを投げ込まれるまでは

「うつ！けほっ、けほっ・・・」

激しく咳き込む真那

そんな彼女をあざ笑うかのように奈美の勝ち誇った声が聞こえた

「バーカ。ノックして返事が返ってこないなんて根暗の真那しかないだろ馬鹿

そもそも幽霊みたいな存在感ゼロのあんたに気付いてやれるのは私だけなんだから構ってやるだけ感謝しなよ。ボケ、アホ、便所女。」

「キモいんだよ。根暗女」

「マジで頭に乗んじゃねーよ。カマドウラ」

やはり、これを投げ込んだのは奈美だったのだ
絶句して息が詰まるような感覚すら覚えた真那

「じゃあな、それ綺麗にして早く戻しとけよ！次の授業は社会科の
篠山ささやまだからな！

目エ付けられて呼び出されても絶対にウチらの名前出すなよ。出し
たらどうなるか解ってるよな？」

「うわー。奈美ってえげつねー。篠山とか最悪ジャン」

「ちょっと私でも引いたわ。あんま可哀想じゃない？それ」

「別にいいんだって、あんな幽霊女

ウチのなかでも居場所無いんだから。使用人として仕方なく雇って
いるだけ。みたいな感じだし

親父も高校卒業したら追い出すって言ってた」

「マジ？だったらウチにも貸してよ！

自給二百円くらいで二十時間労働させてやるから」

「アンタも奈美のコト笑えないねー。せめて自給百円にしろ」

「思いつきり下がってるし！

冗談だよ。あんなマジで奴誰もいらないうてみんな思ってるから。マジで」

「告られたこと無いからって僻むなよ。彩」

「奈美ーそれは無いよー、マジで傷つくから。それ」

下品な笑い声と共に遠ざかる数人の足音

奈美と取り巻きが居なくなったトイレには白粉がぶちまけられた個室の中に腰まである髪が白くなった真那とチヨークの粉まみれの黒板消しだけが残った
真那は震える手でハンカチをポケットから取り出そうとして取り落とした

掃除しなければ

奈美の思いがままに白粉で汚された個室を綺麗にしなければならぬ

すぐさまその考えが浮かび実行しようとした自分の思考に対し、真那は途轍もなく深い悲しみに胸が覆われるのを感じた

まるで自分は奈美達の奴隷だ

どれだけ尊厳を汚されても、辱めを受けようとも自分は結局、家でも学校でも行雄・奈美親子の所有物であり人形でしかないのだ
自分は一生彼らの奴隷なのだ

それに、行雄はおるか奈美にすら真那はいいように扱われている
全てが彼女の敵だった。結局は世界全て自分という存在を拒否しているのだ

「なんで、なんで私が……」

知らない。自分に降りかかる不幸は間違いなく真那自身の非は無かった

そう、きっとこれは運命

幸せの椅子取りゲームで彼女だけが天に見放され自分のポジションを獲得できなかっただけの事

ただ、気まぐれな神様にそっぽを向かれただけ

無垢だが、その実とても残酷な運命

仕方が無いのだ。彼女自身それを解っている。理解している

自分だけは幸せになってはいけないと、自分は世界の爪弾き者だと解っている、頭では理解はしているのだ
しかし……

どうして……つらいめにあわないといけないんですか……

後の言葉は静かな嗚咽と共に掻き消された

枯れたと思っていた涙はとめどなく流れ出す

何回こんな気持ちで泣いただろうか

もう、涙は流さないと思ったのに。惨めだから泣くのは止めようと
何度も思ったのに

しかし、悲しみの刃は彼女の心の傷口を抉る

傷が癒えきらない内に何度も何度も行雄や奈美と言った者達がころ

あいを見計らって決りに来るのだ

その者達の前で涙を見せないのは雄一の抵抗だった

幸い、女子トイレには誰も居なかった

彼女は休憩終了のチャイムが鳴り響くまでそこで蹲り、零れ落ちる

涙を白粉で汚れたハンカチで臍を押さえながら声を押し殺して泣いた

涙はしばらく枯れなかった

二十五話

星雲高校の食堂は大賑わいだった

今は昼食時間であるから、必然の理であるかもしれないが

三百人・・・ほぼ一学年単位の生徒数を収容できる大食堂設備はこ
こ星雲高校を市立星雲高校たらしめる要因の一つだった

星雲高校の食堂は広い、それがほぼ満席状態なのだから店側はいつ
も相当に利益を上げることになる

広大に設計されたスペースには百を超えるテーブルとその三倍はあ
る椅子を収容してすらもなお余りある広大な空間を持つ

三年前、その前年から計画されていた食堂の大改築が夏休みを見計
らって行われより多くの生徒を収納出来る設備へと生まれ変わった
更に広大になったスペースを補う為にスタッフには一つ街を離れた
調理関係の名門専門学校から生徒をアルバイトとして雇っている
流石に正規の職員の調理するメニューには劣るものの年の近いスタ
ッフが食堂の内部事情を教えてくれたりするので生徒達の話し相手
にもなっていたりするのだった

夏の残滓が未だに残留する蒸し暑い空気の中で午前の授業をパスし
た刀也達は昼食を取っていた

相変わらずがつがつと皿の上のものを掻っ込む隆二を神妙な面持ち
で、それでいて疲れたような表情を浮べて彼は見守っていた
いつもと変わらない隆二の様子に安心すると共に彼はなかなか昼食
に手が付かないの様子だ

「刀也。やっぱり調子悪いんじゃないか？」

「何故にそう思っただ？隆二」

「いや・・・お前のチームにバスケで勝ったのは良いんだが・・・」

隆二は南蛮定職にがつがつと齧り付きながら続けた

彼の食欲旺盛ぶりは健在に見える、その一方で刀也はほとんど自分の盆に手をつけては居ない

そして隆二のほうを見やりながら尋ねた

「なんかさ、悪いよな奢って貰うなんて・・・」

「ふーん、そうだったけ？」

「お前なあ・・・」

隆二はますます頭を抱えたが刀也は彼が何故悩むのか判らなかつた

「この前約束しただろ。バスケの試合に俺が負けたときの奢るってさ」

「そうなのか・・・？」

隆二は一切れ大きい南蛮の切れ端を飲み込み、喉に詰まらせそうになり

何回も胸を叩きつつようやく飲み込んだところで溜息をついたところだった

「ふう。死ぬかと思ったぜ」

胸を叩き、深呼吸している彼の様子にいつもなら苦笑いを返す刀也だが今回はそんな気にもなれなかった
どうしようもなく、消化しきれないものが胸の中に溜まっている
どうしようもない苛つきが雑多な人ごみに蔓延する雑念に感応され
たかのごとく増幅している

屋上に居たときは気持ちを抑える事が出来た

「・・・もう少しゆっくり食えないのかよ」

「体育の後だから滅茶苦茶腹が空いてたんだよ。旨い飯を掻っ込んで喉詰まらせちゃってもいいじゃない。俺達人間だもの」

「・・・・・・・・」

「シカトかよ！」

刀也はつまらなそうに隆二のほうを見てボそりとつぶやきつつも箸を取った

何故だろう、今は隆二の相手をするだけでも非常に億劫だ

「知らないんなら別に、じゃあ頂くぞ」

「何かあったか？」

「夏休みにバイトを二つ掛け持ちしてただろ？まあお陰であまり遊びに行けなかったけどな」

「ふーん」

隆二はぼりぼりと頭を掻いた。単純に汚い仕草だと刀也は感じた、

態度にも口にも出さなかったが

そして、ようやく刀也はすっかり冷えてしまった唐揚げ定食を頼張る食事はあまり喉を通らない。空腹すら感じているのにどういいうわじか味が分かりにくいような気もする

むしろ、喉を通り抜ける食物の存在さえも億劫だ。食事という行為そのものにある種の作業間というものを感じてしまう位には

「あーあ。早く食べないから冷めちまったな」

「食堂は人が溢れるから作り置きで冷めたやつを取ってしまったからな」

「へー残念だな」

「俺の食事の事ぐらい別に良いだろ。仕方ないんだから」

言いつつ、刀也は温い味噌汁を啜る。不味かった

白味噌を使用した汁は、赤味噌を用いたものよりも塩加減が薄く彼の好みの味付けだった

具の大根も程よい固さで噛むと口の中でほぐれて解ける

冷めるならばもう少し早く手をつけて置けばよかったと密かに思ったのは内緒だが

彼は、早く食べなかつた事を少しだけ後悔したが後の祭りだと気持ち落ち着けようとした

冷めた飯は不味いが、仕方あるまい。自己責任という奴なのかもしれない

結局、中身を半分ほど残して碗を盆に戻す

「へへっ。飯は早く取った方がましだな」

「お前みたいにガツガツ頼張って盆を汚すのが嫌なのさ。社会に出るまでに直しておけよその癖。他人から見ると不潔だろうが」

「へいへい。せいぜい気を付けるぜ」

「どうかな？お前は致命的に細かい事に気を使わないからな。恥をかくなよ」

「おい。ちょっと言い過ぎじゃないのかお前、なんか今日は機嫌が悪いな。どうした？」

「・・・別に」

隆二は全く忠告を聞いていないようだった
刀也は彼に呆れつつも、気にするのを止めた。これ以上ウダウダ言うのも考え物だ。ストレスが溜まるだけだ

彼は彼なりに上手く振舞っているのだ。さっきの事みたいにクラス
の連中をフオーする事も出来る人間で人望が有る
奇抜な振舞いが目立つ反面。人を見下す事はしない人間が彼だった。
何処と無く他人と距離を置く自分に対しても彼は普通に接してくれている

そう、彼は自分とは違うのだ

其処が羨ましくもあり、又、微かに妬ましい事でもある

彼には自分と同じように世間からずれていると考えていない、回りの環境を受け入れ調和し、平穩を作る

そこが、自分の求めても得られないものだった

反対に自分はどうかだろうか？

自分は今宵の件と言い敵を作りやすい気がする

恐らく、他人の心境に容赦無く土足で踏み込んでいく連中に対して嫌悪感を抱き、他人との間に壁を構築してしまうのがその原因なのだろうか？

他人から不快感を得たくないのであれば必要最低限は誰とも話さず孤高を気取ればいいはずである、なのに自分の中の心は常に他人との触れ合いを求めているようにも思える

そして彼にはある秘密が有る。それは隆二にはおるか誰にも、『母』に対しては離せなかった秘密だ

「あれ、二人ともまだ食堂にいたんだ？」

「相変わらず早いな。お前達は」

「あれ、保坂さんじゃないか」

突然聞こえてきた二つの声に隆二が返事する

刀也は来訪者の声に一瞬振り返り、めんどくさそうな眉を顰めた

「よう隆二、そして刀也」

「お！雪久昨日に引き続き珍しいじゃないか、仕事は忙しくないのか」

雪久に声をかけられ、隆二は返答を返した

「忙しいさ、でも頼れる後輩と友人達のお陰でこうして飯を食うぐらいの暇は用意できる

尤も、多忙に付き食事後は直ぐに生徒会室に直行だがね」

「保坂もか」

隆二は保坂守子にも声をかける

「そうよ」

「大変じゃないか？生徒会の仕事は」

「雪久君が教えてくれるからそこまで苦労しないけど、文化祭が近いでしょう今は。だから私一人でやらないといけない事も有るから。最初は色々不便だったけどね
今は経験を積めたから今はもう慣れたけど」

「へーえ。頑張ってるんだねえ」

「生徒会の仕事は朝早くから始まるからこの前遅刻しそうになったけど、刀也が送ってくれたの」

「この前の事かい？さすがは幼馴染だよね」

そして、彼女は刀也の方を見やった

先程まで端で皿をついていた彼は、今は背後の窓のほうを向いていた

「……刀也？」

「あまりそのことは人前で言わないでくれ。気分が悪くなる」

守子は驚いた、彼の様子があまり機嫌が良さそうに見えなかったからだ

「何よ？その態度は」

「昨日の事でかなり大恥かいたんだ。お前のお陰でな」

「大恥って・・・？」

鸚鵡返しに守子が尋ねる

「クラスの連中がさ、面白半分に騒ぎ立てたんだよ。お前と俺が出来てるとか付き合っているとかな」

守子が一瞬だが表情を歪めたのが隆二にはわかった

「そ、そんなの無視すれば良いじゃない」

「あのな、俺は静かに、そして平穩に過ごしたいんだ。今日も昨日も篠山の馬鹿が俺をいびってきた

まあ、脅して黙らせたけど、全く・・・昨日の事といい
どういうことが最近こんな面倒事ばかりでさ、本当に気が参ってしまっ、迷惑なんだよ」

「それってどういう意味よ？」

「簡単に言えばストレスが溜まるんだ」

「・・・」

「だから仕方ないだろう。機嫌が悪そうに思えるのは」

「おい。刀也」

「刀也。それは言いすぎじゃないのか」

「・・・そうか。こいつのせいで色々と迷惑を被っているんだが、俺が悪いのか？」

「・・・お前は。」

さっきまでは隆二の懸念は解消したかのように思えた。だからこそ今日も刀也を食堂に誘えたと感じていたのにその態度で隆二は口を挟むのを躊躇うしかなかった

（なんでこいつは今日に限って機嫌がここまで悪いんだ？）

隆二の感じ取る疑問は至極必然なのかもしれない

さっきまで友人は篠山の授業に見せた苛立ちは解消されたと思っていた、それなのにどうしてこうまで不機嫌なのか

疑問が隆二の頭の中で渦巻く、途轍もなく悪い嫌な雰囲気がこの場に蔓延している

保坂と刀也の口論はいつの間にか苛烈か言い合いと化していた。しかし保坂の言葉に刀也は耳を傾ける姿勢を見せない。彼は一方的に彼女を責めた

次第に保坂の表情が暗くなっていく

「・・・分かったわよ。今度から遅れそうになってもあんたにはもう頼らないから・・・」

「そうか、そうしてくれると助かる」

彼は表情に翳りを見せた守子に告げた
保坂は急ぎ足で食堂を出て行った妙だ。
彼女が泣いていた様に見えたのは気のせいだったのか

「おい」

隆二が刀也に告げる

「何だよ」

面倒くさそうに刀也が返す

「さっきのは流石に言い過ぎじゃないのか？」

その・・・お前と保坂の事を広めたのは・・・俺・・・なんだけどさ」

「・・・」

刀也は失望が混じった眼差しで隆二を眺めた
赤の他人を見るような無表情な視線。人間とは親しい仲のものにも
こんな態度を取る事が出来るのだろうか？

そして刀也は半分ほども残してある唐揚げ定食の盆を持ち上げて片付け所に向かう

勿体無いじゃないか。隆二がその言葉を飲み込んでしまったのも、
刀也が発するある種の苛立ちに安易に触れる事が躊躇われたからだ
今の彼に安易に触れる事は出来ない、不用意に近づいてしまったら、
自分も篠山の様に扱われるかもしれない
だから、彼が有る程度離れるまで何もせずに黙っておく事しか出来
なかった

「・・・お、おい！どうしたんだよ、お前？」

刀也が食器を置いて盆を持ち立ち上がる、昼食は食べ残したままで

「済まん。食欲が失せた。お前と保坂のお陰で」

「待てよ！」

返事の変わりに彼は歩みを速めた、隆二を拒絶しているかのように隆二は彼を追おうとするが袖を掴まれた

「！？」

「今は話しかけないほうがいいかもしれない」

雪久が神妙な面持ちで告げた

何故？疑問符を浮かべる隆二に答えるように雪久は告げた

「あいつ、色々遭ったみたいだし。もしかしたらそれが不貞腐れる原因なのかもしれない」

「なんかあったのか？あいつに。」

今度は隆二が懸念に顔を歪めるのであった
色々？何かのトラブルだろうか。教室で起こした暴走の原因だろうか
彼には心当たりは全く思いつかなかった

「いや・・・実はな・・・」

雪久は口をようやく開きかけ・・・止めた

今の自分の言葉で周りの混乱を招きたくないという考えもある
しかし、自分の中での昨日における出来事が刀也に関わる可能性が
存在する時点で疑念が消失するわけでもなかった

「どうした？」

「いや、お前には関係の無い、大した事じゃないよ」

「何でだ？」

「いや・・・今日のあいつはなんか機嫌が悪くないか？」

「あいつはいつも機嫌悪そうに見えるぜ、愛想つてものが無いから
な。で、どうしたんだ？」

「それだけだ。これ以上は何も無い」

雪久はそれから口を噤んだ。言える訳が無かった、刀也が昨日商店
街の近くで死体が見つかった場所から走ってきた事なんて
嫌な予感がした。「高月刀也」が自分の知らないところで何か得体
の知れない物と関わってきていたのか

自分が今まで友人だと信じてきたものが実は途轍もなく自分達とは
異なるものなのかと予見させる言葉を口に出したくなかったからだ
さらに彼の機嫌の悪さも気にかかる。無関係だと信じたい可能なら
ば友人として力になりたいとも雪久自身は考えている

刀也らしき人物があの場合に居たという事はどういう訳かテレビは
おろか新聞すらも報道されずに、近所の人づてに聞いた確信を得た
話なのだ。

地方新聞が報じたのは昨日商店街で交通事故者が出たということだ。
それも小さな面で載せられた位で後になって新しい情報が出るとは

思えない扱い方だった

雪久はあの狭い路地で交通事故者が出ることなどありえない事だと知っている

何かが、とてつもなく巨大な組織・恐らく警察クラスの国家機関が率先して情報統制を行っているのだと彼は予想していた
商店街で死体が見つかった事件と彼が無関係である。いや、そう有らなければならぬ

しかし、嫌な予感はあるのだ。祖母の猫がばらばらにされて発見されたときと同様の悪寒がするのだ

雪久は勘が聞くことは彼の親戚の間では有名だった

「へえ、どうでも良いけどさ雪久。今日暇なら付き合ってくれよ」

「何処にだ？」

隆二の誘いに訝しげに答える。今日は午後の時間は空いている、要するに暇なのだが

遊び好きな彼が行きそうな場所と効いてあまり良いイメージが浮かばない。日ごろの行いのせいだろうか？

「ゲーセンだよ。今日は絆が三百円なんだ」

予想していたとは言え、想像どおりの答えに雪久は頭を抱えなくなった

「却下だ。」

雪久は速攻で返事を返した

二十六話

夏の空の日暮れは遅い

空の一角が微かに朱に染まる頃合のアーケードには帰宅途中の学生や提示帰りの会社員。食材を買い求める主婦、遊び帰りの中高生などで町に隣接する住宅街ならではの賑わいを見せていた

真那が幼少期に過ごした街は此処まで人に溢れた場所ではなかった母親がまだ生きていた頃は田んぼが点在し、店も少なく雑誌などのメディアが発売日から三日遅れで店頭に並ぶような田舎だった精々覚えているものといえば小さな商店街に場違いのように立っていた本屋と其処から一駅分ほど離れた病院だ

顔も覚えていない彼女の本当の父親が母の病状を看破して静かな街に引越していたのだという事は幼かった彼女にも予測が付いた覚えている限り今より生活は貧しかったような気がする

血の繋がっていない父親の行雄は自身の暴力を振るう狭量な人間である事は真那自身了解していたのだが、彼はどのような訳か学業に限らず私生活の面でも彼女が困らないほどの金額は小遣いとして支給していたので、現状で生きていくのに不足はない。

公務員である行雄は恐らく世間体を気にしているのだろうとも思う尤も明日にも追い出されるかもしれない身なのでこの状況が何時まで継続するかは彼女自身にも判らなかったが

少なくとも彼女の生活は時に暴力を・・・今朝は彼女にしては珍しい寝坊で朝食が遅れたのが原因だが振るう事はつきに三、四度の頻度ではない

公共の電波で意図的かつ恣意的な世論誘導を好み、場合によっては広告収入を盾にスポンサーからの要望で、マスコミが好き好きに尾鰭背鰭を好き勝手に付け足して真実の『報道』が

されるような無責任かつサディスティックな下種が好むようなエンターテイメント的な要素が付加される虐待児童の実態とは彼女は无缘だった

いや、解釈によつてはそれ以上に陰湿な境遇なのかもしれないが少なくとも五十年前とは比べ物にならない程に教養のレベルが下落してあるこの国の国民から視聴率を取るにはその位の工夫は必要なようだ

そんな人間を真那は嫌った、暴力で相手を従わせる人間は例外なく下劣で卑屈なのだ。彼女の義父、行雄がそうであるように

それでも彼女は想う

自分は世界から嫌われているのかもしれないと。見捨てられていると蒼穹に染まつた空を見上げる度に、同世代の少年少女たちの笑い声を耳にするたびにそう感じるのだ

周りの人間が特別なのではない、義父が特別なのでもない、自分がそれ以上に異常なのだ

周囲に溶け込むことも出来ない自分が憎いと思ったことがある、しかしそれ以上に憎たらしく、許せないのは……

（駄目……これ以上考えたらいけない。全部私が全て悪いんだから）

虐められる側に原因があるとは最近のマスメディア等で良く聞く論調だ

被害者の態度が横着だったり、ふとしたトラブルが原因で虐めに発

展してしまう事もよくあるという

自分も同類だと真那は思っていた。思うようにしていた彼女自身、他人に横柄な態度も悪意を表面的に他人にぶつけた事も無い、つまり根源的な理由は全て自分にあるのだと考えていた。そのほうが楽だから

他人が与える苦痛の原因なんて大概のものは吐き気を催すような単純な動機から来ている。そんなものを真那は知りたいとは思わなかった

『あなたは、人を恨んじやいけない、妬んでも駄目、怒ってもいけない、なぜなら貴方は特別だから』

実の母がまだ生きていた頃によく言われた言葉だ。良く分からないが自分は昔から成績は良かったしかし何故か致命的に他人に嫌われる性質があったような気がした

この身は隔絶されていると蒼穹の空の下の元自分だけが透明な壁に阻まれたかのように

自分は世界の一部なんかじゃない。解っている、理解はしている。己の世界は母親が死に、行雄が自分を引き取りに来た時点で、いや自分が生まれたときから狂い始めていたのだ

運命の歯車は狂い始めている。いや、自分が狂わせたのだ。自分はそれを是正する事は当の昔に諦めたのだ

今更世界と向き合う勇氣なんか持てる筈も無い。第一その気があるのなら自分は義理の父である行雄の元から抜け出しているそれが出来なかったのは怖かったからだ。義父の暴力より動けなくなった母の近くを離れる事は出来なかった

それ以上に入院中の母と再婚し、彼女が死ぬまでの間に入院費を肩代わりした義父を裏切るのも申し訳ないような気がして現状に甘んじているのだ

死ねばいいと思う、自分が居なくなる事で他人が救われるならばそれもいいと思う

今と違い、昔は自分を守ってくれる人間は死んだ母しか居なかった
本当の父のことは覚えていない、自分が薄情だったのかそれとも父の存在を忘れてしまったのか分からないが、そのことで真那は自分を責めることがあった

母のことしか覚えていない自分は薄情物だと、しかし父親の事を母に尋ねても彼女は何も答えてくれなかったように思える

もし、自分のせいで父と母の仲が引き裂かれ両者がそれが原因で会うことすら出来ないのだったら自分はとんでもない親不孝物だ
生きている価値さえないのかもしれない

今考えると母が生きていたときも自分を取り巻く世界は狭いものだったのかもしれないという思いが頭をよぎる

母と一緒に昔の家に引越して一年もたたないうちに彼女の『本当の父親』は自分達の前から姿を消してしまった

病院に見舞いに来た頃に看護婦の話を立ち聞きした情報によると父は母の介護に疲れたのだ、愛人を作って駆け落ちしたのだあまりよろしくない情報も入ってくる事間あったが

彼女は父親を信じていた。彼は誠実の塊のような人柄だった事を母から聞いていたしかし実際に帰ってこなかった事を見るとそれは上っ面の仮面だったのかもしれない

しかし、母は父を信じていたようには見えなかった

母も自分も父を待っていた。しかし皮肉にも彼女の元に来たのはあの偽の父だった

少しずつ痩せ細り皮と骨のような醜い姿になりながらも、帰ってくると。真那の髪を撫でながらそう言ってくれた

真那が髪を手入れするが、あまり短く切らない理由もそれだ。母が元気だった頃はよく透かしてくれたこの髪は形見代わりのようなものだ

そのせいで、真奈美に目を付けられるような気がするのだが、気にしなかった

遺品を一つも持たせてもらえなかった自分からすればこの長い黒髪は只一つの形見だった

過去をいくら悔やんでも仕方ないのは知っている。しかし今でも悔やむ事がある

あの時父が帰ってきてくれたらと、母も退院し今も自分達は食卓を囲っているのだと、ありえない夢を見てしまう

そんなの逃避だとわかってはいるのに。現実から目を晒し前に進む力を失う妄想だと理解しているのに頭は普通の、しかしささやかな幸せのビジョンを描いてしまうのは

現実との落差を感じさせ苦痛にしかならないとわかっているのに、それをやめようとしない自分も居るのは、苦難と諦観の果てに空っぽな人間と化すのが怖いのだろうか？

では、自分の周りを我が者の様に闊歩している雑踏はどうなのだろう彼らもまた日常という名の怠惰な檻の中から這い出せずに苦しんでいるのか？それとも甘んじて檻の中に留まっている只の人間なのか？

真那には彼等が楽しそうには見えなかった

彼らも目に見えているものに囚われて本質が見えていないのだろうと思う

自分とは違うのに、己を飛び立たせるだけの翼を持っているはずなのに彼等は自ら翼を自分の手で手折ってしまつて飛べない事に気付いては居ないのだ

翼をもがれてしまつた自分には自由が無い、しかし雑踏を歩く彼等は自由の無い箱庭に自分から閉じこもろうとしているようにも見えた
始めから翼を持っていであえて巣穴から飛び立てない小鳥、翼をもがれてしまつて飛べないまま親鳥に見捨てられ巣穴から突き落とされる小鳥

どちらが不幸な存在なのか、今の自分には答えが解らなかった

真那は空を見上げた。蒼く染まつた天空を、

今の彼女にはこの空もまた昔、幼い頃に見たものよりも色彩が薄く、灰色に染まつているようにも見える

周りの雑踏はただただ自分の周りを流れていくばかりで色彩の薄さを感じ取り様子も無い。彼らには恐らく見えないのだ自分の目の前の事意外は

だがいくら青空に恋焦がれようと、夢見ようと、自分は其処に行けないのだ『あの人たち』のお陰で

真那は再び自分と世界との隔絶を覚えた

自覚せずには居られない、胸の中の暗黒の空洞。自分で埋める事も出来ない夢幻の空間

虚無の中に暗黒の靄が生まれ負の感情が彼女を多い尽くしそうになる

——みんな、燃えてしまえばいいのに。どうせ飛び立てないのなら灰になって空に舞ってしまえばいいんだわ。

（、、、何？）

いつの間にか自分に語りかけてくる虚無の存在に真那は恐ろしくなった

己には翼が無いものと知りながら結局は暗い情動に身を委ねようとしてしまう甘美で黒い思惑、そうした方が楽だから

——そう、貴方にはその力がある今は眠っているけれど呼びかければ直ぐに取り戻せる、強い力

（私はあなたなんかの力に頼りたくない）

力に頼れば自分も堕ちてしまうのだ、あの義父のように

—— いいわ。貴方がその気になればいつでも力は取り戻せる

気が向いたらいつでも呼んで・・・奪われた翼を取り戻して大空に飛ばたきたいのなら

突如となく聞こえてきた『声』真那はこの存在を知っている様な気がした。

（そう、これは私の心の声。本心なんだ・・・）

真那は立ち止まり自嘲の笑みを浮かべた。通行人と肩がぶつかったが彼女は気にしてられなかった

虚無を抱えている事自体が周囲の人間との隔絶感を確かなものに行っていると感じた瞬間真那は人通りの中で蹲った

道中にていきなりしゃがみ始めた彼女に道行く人々は一様に視線を向けたのも一瞬の事で集められた注目は真那の事を周囲の人間が異物と認識し意識の外に追いやる事で彼女の存在を

無かった事にした

奇怪な行動を取る少女に関わりたくなど無い。これが群集の心理な

のだろうと同時に彼女が世界の枠外に置かれている事に対しての証明でしかない

拒絶は拒絶で返される。人間の道理だが残酷で冷たい理屈

真那は立ち上がりおもむろに駆け出す。そうでもしないと自分という存在が彼らに飲み込まれ霧散してしまうのではないかという恐れがあつた

どこか、静かな場所。それもここに居る肉たちの存在から離れた場所で落ち着きたいと彼女は思い、駆け出していた

人々はまた奇異なものを眺めるような視線を投げてよこしたが、それの一瞬のもので彼等は己が所属する世界へと帰っていく
隔絶され孤立した彼女の世界に気づいてやる事も出来ずに其々の時間を満喫する群集

その認識を得た瞬間。彼等が人形のように思えた

群れから遠ざかつて行く

築いたときには公園の前に立っていた

とぼとぼと頼りない足取りで中に入る。中には数羽の鳩くらいしか先客は居ない

少女は歩く

混乱しきつた頭で

もう何も考えられなかった自分だけが不幸だと妄信するつもりは無いがそれで現状に納得し受け入れるような事があれば自分の生きてきた十七年間が否定されてしまうような気がした

何も考えないほうが気が楽なのかもしれない、そう考えた矢先の出

二十七話

差し伸べてきた手を見ると其処には隣のクラスの男子が自分に手を差し伸べていた

見覚えのある光景。まだ幸せをかみ締めていた無知な幼子の時代にも似たような出来事が起きていたのを彼女は思い出す

何故、今更そのような事を思い出したのかは全く解らない。只、自分の手を引いた感触、そして暖かさが『彼』にそっくりだったから

（なんで・・・）

疑問符が胸の中で形になりかけようとしたところにおいて、ようやく彼女は自分の置かれていた状況を察する

自分は間抜けな事に落ち葉の中に紛れていた小石に躓いて転んだのだ少年が手を取らなければ足を擦っていたかもしれない

「大丈夫か？」

気だるそうな、生気に欠けた少年の声が彼女に安否を気遣っているものの少女は直ぐに顔を上げる気にはならなかった

確かに顔は似ていた。が、影を帯びた少年の表情は少しも『彼』とは似ても似つかないが声には微かに面影が存在するような気がする

数年前から自分の『家族』とクラスメイト、そのほかの人間のお陰で他人への不信感が根付いている

真那が心を開くことが出来るのは死んだ母と、その少年だけだった。二人とも、もう自分の知るところには居ない

その事実が彼女自身の人見知りな性格も災いして真那は少年とコミ

ユニケーションをとる事を拒否していた。只の顔が似ただけの同一人物だということも有り得るのだ

彼女は真奈美達の虐めもあってあまり校内を歩き回らない、同じ制服を目の前の少年は着ていた。もしかしたら有ったことも有るのかも知れない

しかし、何故『彼』が此処に居るのか、そしてなんで今まで同じ学校に住んでいると気付きもしなかったのか？

だが、そんな些細な疑問を打ち消すほど彼は彼に似ていて――

「黙っていたら分からないだろう？どうした、具合でも悪いのか？」

「そうじゃない・・・なんですけど・・・」

しどろもどろに少女が答えるその声は必要以上に小さく、聞く者によつては苛立ちを催させるような卑屈さにも見えるかもしれない動揺しているのは誰の目にも明らかだった。人にはそういう態度を嫌うものも居ることを彼女は知っていた

しかし、言葉が全く出てこない何故今頃になつて彼の存在に気付くのか

目の前の彼は別段態度も変えずに真那を立ち上げらせ埃を払ってやる、その際に彼の襟に挟んである腕章が目に入る

色は黄色。一つ下の学年だった。三年生で友人の居ない真那二年の校舎に寄る事は殆ど無かった

「お前、とにかく大丈夫か？ふらついてて危なっかしかったが・・・」

すこし口調を強くして助け起こした少年が尋ねると少女は脅えたように身を竦ませる

一つ下、三年生の彼女に対してまるで同級生のように話しかけてくる。普通なら憤慨しても良い筈だ。しかし、気弱な気質の真那は些細な事を気にしていなかった

「ごめんなさい！あれは私が勝手に転んだんです。私がドンくさいから、みんなに鈍いつて言われるから・・・」

少年は明らかに怪訝な顔をした、彼女が自分に向かっていきなり謝罪などしたからだ。状況によっては当然なのかもしれない自分は転倒しそうになった彼女を助け起こしたのだから

少女の反応があまりにも脅えすぎている。恐らく人とあまり話したことが無いが、極度に他人を恐れているか、そのどちらともが少女のこの態度の原因か

あまり関わらないほうがいいかもしれないとの思いが脳内を掠める中で放つては置けないとの思いも湧き上がる

さて、どうしたものだろうか。と彼は悩んだ

「すみません。つい、あんなところで転んでしまつて・・・」

先の少女が再び謝った

少しの煩わしさと関わりたくないとの想いが無い交ぜになりつつも少女が脅えたような表情をなかなか崩さないのので彼は彼女を安心させる為にも声をかけるのは当然といえた

「別に・・・お前が俺に危害を加えたわけでも無いのに、どうしてそんなに卑屈なんだ？」

敬語を使わずに素の言葉遣いで話しかける。慣れない敬語を使うと必要以上に言葉が硬くなつてしまい少女を脅えさせてしまうかもしれない

れない

周囲の人間の視線など気にせず、刀也が彼女に尋ねた。元より面倒事は好かないたちの彼であった

彼の中でも物前の面倒臭い女なんか捨て置いて、憂さ晴らしにゲームセンターに赴こうとの思いもある

尤も本日はバイトが休みなのと月末の給料日が近いので多少なりとの贅沢は許されるのであろうが

どうしても用事を済ませたいのであれば面倒ごとに首を突っ込まなくてもいい筈なのだ、しかし今日の昼休みの事が頭によぎる

（そういえば、あいつも女だったんだっけ？）

今日は彼女に辛く当たりすぎたのを反省すべきかもしれない

いくら昨日の事でからかわれていたとはいえ、それに困っている人に優しくしろというのは母の言だ

男は如何なる時でも苦勞している他人を見かけたら助けなければいけないらしい。もっともそれを実行していたのはあまり覚えが無いのだが

「……おい」

黙りこくってしまった少女に対して彼は告げた

「なんかあったのかもしれないがあまり卑屈になるな。他人に付け込まれるからな」

「……そう見えますか？」

「そつだな」

彼は頷いた

「あまり暗いと他の連中に言いように扱われる。注意しとけ」

図星だ。事実彼女は家庭でも学校でも何処に居ようが立場は悪いままだった

「でも・・・私は・・・」

少女は長い髪を微かに震わせながら告げた。まつげにかかる髪の毛の瞳は微かに潤んでいる

「こういうのが普通なんです。惨めでとろくて人にいいように扱われる。そんな人間なんです」

俯き加減に告げた。表情は暗い、もしかするとうつ病なのかもしれない。自分にどうこうできる問題ではないとも

しかし彼は目の前の少女を放って置けなかった。放置しておく事は出来たが何故かそんな選択肢は彼の頭の中には無い

少年はしばらく黙りこくって彼女を見つめていた

少女はなおも言葉を続ける

「なんで・・・其処まで卑屈に・・・」

「そういうものなんですそんな風に出来てしまったんですこの世界はみんな別の人間なんです。私とは違うんですこの世界の人たちとは私は何時も一人。周りの人たちはそれを見て笑っているんです。自分の幸福をかみ締めて決してそれを、おこぼれに預かる事も出来ない

私はここの人間じゃない。本当の居場所は这个世界なんかじゃない」

刀也は駄々黙って耳を傾けている事しか出来なかった
少女の声は続く

「きつとみんなが穏やかで誰も傷つけあたりしない。そんな居場所が私の本来居るべき場所なんです

でも此処は違います、みんなが幸福で満たされている筈なのに、誰も彼もが強欲で他人の幸福を奪い去ろうとする

私にはそれが理解できない。只私はここに居たいだけなのにみんなが居場所を奪おうとするんです。何故かは解りませんけど・・・」

少女の訴えは理解できない事も無かった。刀也にもある程度想像がつくとはいえ。彼女の受ける痛みは自分には決して分かち合えないものだということも理解していた

彼女の言葉に薄っぺら委前向きの言葉をかけるのはそれこそ逆効果だろう

しかし、自分の中には彼女を元気づけるような言葉は用意できない。無責任な言葉で人を傷つけるのは卑怯者のすることだからだ

あまり関わらないほうが良いと内心彼は感じていた。しかしそれは出来そうにも無かった

しかし、彼女の言葉に共感する心もまた否定できない

『居場所』、それは刀也自身も欲しているものだからだ。自分には幼少期に事故に遭う以前の記憶が無い

だからこそ、母・時雨との思い出を大切にしていた。だが彼女はもう居ない。自分の過去を雄一知っていたであろう母の所在は誰にもわからない

そして、彼女を助け起こす前に嗅ぎ取ったあれは何なのだろうか？彼女からはあの『氣』が一瞬だが漏れ出ているようにも思えた。何

故自分が感知できたのかはわからない。それも、あの男よりも数倍強いその気配

しかし見知らぬ少女にこれ以上声をかける言葉も見つかるわけも無く、また隆二みたいに軟派な気質を持ち合わせていなかった彼は迂闊に声をかけることも出来ない

暫く見ていると、少女の体がふらついたので助け起こした。放っておいても良かったが車もたまに通る場所だ轢かれたら夢見心地も遭ったものではない

だから、もう助けたのだ。この少女の事は放っておいたほうが良いのだ。自分は平穩に生きたいのだ

全て忘れて、帰ればよかったが。彼女の様子が気になった。何かを諦め、それで居ながら内側に有る何かを抑えている用の表情

彼女と少し言葉を交わしたから、情が沸いてしまった事を否定しきれない自分が居る

ましてや、中学からの友人である守子に対して多少の罪悪感が芽生えていた。一日に二度も女子に冷たく当たるのはあまりにも薄情だろう

卑怯だと知りつつ自分の言葉ではなく他人の言葉を借りた

「自分が世界に価値を見出せれば。世界が良く見えるらしい」

「・・・え？」

唐突に刀也が告げる

「済まない。初対面の相手にこう言うのなんだが、俺が人に言われた言葉だ。俺もあまり信じていないけどな」

「誰にですか」

少女が聞き返す。眼は相変わらず潤んではいるが、おびえがかすかに消えたその表情を見て、刀也はある程度安心したのだが

「俺の友人だ。馬鹿で猪突猛進な奴だけど」

彼は続ける

「俺にも嘗て、似たように世界が空虚に見えていた時期があった。色彩を喪ったように全てのものが灰色に見えているような感覚すらあった。こんな下らない世界壊してやりたいともいや、もしかしたら今でも下らない事を考えているかもしれない」

そう、彼には元々世界に欠落を感じている

世界という名の箱庭を構成するパズルのピースが一つだけ欠けているかのように

自分は何かを意図的に欠けさせられている。自分を構成する大事な要素が故意的に取り除かれている

今の自分は剥きだしの刃だ、触れるもの全てを傷つける剥きだしの白刃

少女が世界に隔絶を覚えてしまうのならこの世に対して欠落を抱えるのと同じ。自分もある意味似たもの同士かもしれないがと刀也は思う

自分が詭弁を語っているだけに過ぎないことは彼も自覚していた。

初対面の人物に価値がどうのここの語る資格など無いのだ

それに刀也がこの先少女を助けてやれると言う保証は無いのだ。詐欺師めいたことを欠落を抱えている人間がするべきではない

所詮彼は自分のやっていることが奇麗事を少女に無責任に吹聴して

いると想っている。茶番に過ぎないのかもしれない

「・・・」

彼女は黙って聞いていた

何故黙ってこの言葉を聞いているのかは分からない。そして誰に何とに言われようと自分の世界観は変わらない

彼女はこの世界に価値など見出しては居なかったのだから、自分を含めて無価値なもので構成されていると信じていたから

そう、全てにおいて大切なものなど無いのだ。世界は無慈悲と理不尽で溢れている。世界に絶望している彼女は価値を見出せるかどうかはわからない

出なければ現在の自分の境遇などあり得る筈も無いのだから。だから彼女は翼が欲しかった。開放の翼が

争わず、妬まず、皆が皆他者の意思を尊重し思い合える世界に飛び立てる翼が、穢れの無い純白の白い翼が欲しかった
それが夢だと知りつつも

では、何故自分は彼の言葉に耳を傾けるのだろうか
それは自分では全く分からなかったが

「そんなときは自分の周りに価値を見つける事から始めるんだ。そうして世界は変わっていく」

（私にそれが見つけられるのだろうか？）

少女は自分の周りに居る人物を思い浮かべて吟味した。彼が言うように彼女が価値を見出せそうな人物の心当たりは無かったが
これからも見つけ出せる事など無いのだろう

世界に不要な存在とされている自分にとっては全く意味の無い単語

に聞こえた

自分に価値があるとは思えないが虚飾ばかりの灰色のこの世界に価値が在る物が認められるとは思えなかったが

それでも、彼の言葉は嬉しかった、自分を何とか元気付けようとしている心意気は伝わってくるのだから

他者から向けられる善意程、嬉しいものは無かった。愛情に飢えている自分としては

例えば彼がでまかせを言っているとしても今胸の中に生まれたほのかな熱は決して偽者ではない。本当の暖かさだ
本当に目の前の少年は『彼』に似ていた。影を抱えた感じではあるのだが瓜二つだ

彼女は胸を押さえた。温もりを逃がさないように

「どうした？まだ気分が悪いのか」

彼が尋ねる。

彼を心配させないように返事を返す。これ以上迷惑はかけられない彼には彼の事情が自分の事情がそれぞれ存在するのだ

「いいえ、大丈夫です」

「そうか。それだといいんだが」

自分はもう大丈夫だ。実はそうではないものの真那はこれ以上彼に迷惑をかけたくなかった

この人は『彼』に似すぎていると

これ以上この人から言葉を貰うと今度は自分がこの人に依存してし

まうような気がした

自分のせいでまたやさしい人が傷ついてしまう

「もう私は大丈夫です。あなたは他に用事があるのでしょう？早く行つて下さい」

彼は少し心配そうな表情になったが直ぐに無愛想な無表情を作る

「ああ、そうだった。済まないなこちらもお節介して」

「いいえ、私は大丈夫です。さっきは有り難うございます」

名前は気になったが聞かずに留めておいた。一抹の期待もあつたがこの少年が『彼』であるとは限らないのだ

「そうか、じゃあな」

刀也は一度だけ振り返ると公園を後にした。その背中では微かに寂しそうに見えた

しばらくして真那も公園の門をくぐる。行雄も奈美も帰宅するのは遅いが夕食の準備を済ませ無ければ後々面倒な事になる

食事の支度はなるべく早いほうがいいのは確かだろう

憂鬱な現実が心に影を落とす中でふと湧き上がったものが意識を掠めた

昔にも似たようなことがあつたのを自分は覚えている。それは彼女の本当の『母』が生きていたときの事

かすかな、思い出にもならない記憶の残滓。世界に見捨てられた自分にとっては遠い昔に胸の中に抱いていた欠片のような想い

その残光の中に映し出される影は先程の少年の面影を幾分か宿して
いて……

（あの人、、似てる、でも……）

微かに漏らした呟きは風に溶け彼女自身の耳にも届かなかった
思えば遠い昔、虐めにあっていたとき自分より小さな男の子に同じ
ように言葉をかけて貰った事を真那は今更ながら思い出す

それは最近おぼろげな夢の中で見る幻に酷似していた
在り得ないのだ、『彼』がこの場所に居る事自体が、なぜなら『彼』
はあの後で……

ふと、鳥の鳴き声が耳に入り彼女は上を見上げた
夕方近く、微かに蒼い空の秋晴れが朱に染まっている、時刻はもう
五時くらいだろうか？

彼女は本来の仕事を思い出し、帰宅の道を急いだ。

『彼』にかけられた言葉が胸の中でほんのりと熱を帯びてるように
感じた

真那は心の中に残る熱を包むようにそつと胸に手を当てた
互いに名前も知らないままで終ってしまった。しかし彼は同じ青雲
高校の制服を着ていた。遭遇する機会自体はあるのだろう、今日の
ように話せるかどうかは知らないが

真那は想う。また、彼に遭いたいとほのかに熱が残る胸に願いを秘
めながら

二十七話（後書き）

お疲れ様です

とりあえずこの話で一部は終了です

二十八話

少女と別れた後に寄ったゲームセンターでは結局三プレイ、三十分しか時間を潰さないまま帰路に着いた

隆二と遭ったが、昼間の気まずい出来事から一言も話すことはなかった

その後、彼と同じ場所で単純にやる気が起きなかったというのも有るが、こんな事で暇を潰している事自体が馬鹿らしくなってきたようだ

妙な女に出会ったと思った。あの長い髪の暗い雰囲気を宿した少女に何故自分は話しかけたのか

解らなかったがもしかしたら彼女の長く艶やかな黒髪が時雨を連想させたのかもしれない。要するに寂しかったということだろうか？刀也は自問する。雰囲気は全く似つかなかったが彼女の容姿は時雨に似ていたかもしれない

妙な事だと考えた、自分は知り合い以外の他人の用紙について長い間記憶に留めている事は少ない、要するに自分も不安定だったのだ篠山の件と言い、食堂といい、あの少女の事といい今日の自分は何処と無く情緒不安定だ、もしかしたら昨日の夢が関係しているらしい

あの『昨日の夜』に見た夢から現実感がだんだんと薄れているような気がする。あれは夢だったのでは？今となってはそういう気持ち心がの中を占めている

何故だか解らないが其処から自分の周りが薄い乳白色の半透明な幕で覆われ現実感をすっぽりと覆い隠しているような気さえしているのだが、現実かも知れないと考える感情もある

まるで、白昼夢の出来事を現実と信じている夢遊病者のようなものだ

疲れているのだろうとは思う。昨日の夢もまさしくその類だろう、
そう決め付ける事にした

多分そうストレスが原因なのだ。あの篠山とか言う教師に自分が嫌
悪感を抱かれているのは承知していたのだが昨日今日のようにあか
らさまに嫌悪感を前面に押し出した行動を取られる

事は無かったし、自分があそこまで安易に激昂し感情をあらわにす
る事も無い事だった

少なくとも住み分けが出来ていたのだ。そう、昨日までは理性と激
昂の区別が感情を抑制する術が

自分がもし篠山に怪我を負わせたとしてもそのときは自らも無事で
住む保証は無い何らかの刑罰は与えられるだろう

感情の整理が付かなくなっている、動揺しやすくなっているのかも
しれない

では、何時からか？そう問われたとしても今の刀也には説明できな
い。昔からそうだったのかもしれないし、最近の出来事による混乱
か？

『あなたは人を恨んではいけない、恨めば誰かが悲しむから』

それはもう居なくなった時雨の言葉だ。しかし今となってはその言
葉を何時言われたのか解らない

昔から時雨は自分に言い聞かせてきたような気がするし彼女が失踪
する直前に言われたのかもしれない

そもそも昔の記憶が曖昧だ、時雨によれば自分は交通事故の後遺症
で記憶に欠落したのだと言い聞かされてはいた

父のことは顔しか知らない。時雨が教えてくれなかったからだ。

しかしそれも写真で見たというだけ。それも自分とも似つかない顔
だった、顔を知ったときは本当に血が繋がっているのかと思ったほ

どだ

よく考えると時雨と自分もあまり似ていなかったのかもしれない。
性格的な所とか、容姿とか

しかし何故？少なくとも今まではそれを完璧とまでは言わないまでも制御する術を心得ていたはずだ、それに何故に今更あたりまえの事に疑問を持つのか？

時雨が居なくなつて隠しきれない不安を誤魔化すのに一月の時間を費やしたのは覚えていて。元々陽気な性格ではなかった自分だが周囲に不調を悟られない為に努力してきたのは労した人と関わるのは苦痛だったが無理やり友人を作った。孤立を悟られない為に

自分の感情を押さえ込み周りの人間と合わせる努力をした。集団の中の排斥を免れる為に、なるべく高い成績を取るように努力したのも多少目立つても

教師達に疎まれないようにする為だった

しかし、今のこの自分の不安定さは何だ？

しかし昨日のあの夢見たいな出来事から確実に何かが変わってきている

自分の中の何かが、こうして部屋に蹲つていてもその原因が何なのか全くわからない

（支度をしないと・・・）

夕食の準備をしないと明日は午後まで空腹で過ごす事になる。食材で目ばしい物は昨日の内に購入していたのが幸いか

少女との遭遇ですっかりそのことを忘れていた。そういえばあの人はどこかで目にした事が無かっただろうか？それもごく最近の内に

トイレの入り口だったような気もするが・・・

あの少女は明らかに他と違って『浮いて』いた。彼女が美人と呼ばれる顔立ちをしていたのは事実だ、ならもつと堂々とすればいい自分の容貌に自信を持つクラスメイトは皆そうしている。だが彼女はあまり存在感がないようにも思えたのだ

それに、一瞬だけ漏れ出した『氣』の存在。自分もあれを使って昨日の強盗（？）を追い出したのだが、何故に少女から・・・

考えれば考えるほどに昨日の強盗。そしてあの女性。さらにあの刀のことが現実味を帯びてくる

疲れるだけだ、今はどうでもいい。疲れることを考えるのはよそう割り切って食事の支度を始める。立ち上がると微かに足もとがふらついた

軽い頭痛も覚える今日の不快の原因はこれなのかもしれない事実一日中気付かなかった事に驚く

支度をするにもめんどくささを感じ米を研ぐだけにした。ふとインスタントの味噌汁と納豆を買っていなかった事を思い出す

（最悪、ご飯だけになるが・・・）

それでも構わなかったが一応一人暮らしの男としてのプライドが阻害した、気分が悪いから料理に手を抜くというのは主夫として情けない

昨日カレーを作るつもりだった食材を簡単なピラフに回す事を決めて米を研ぎ、玉葱、角切りベーコン、ニラを細かく切りボールに入れた

支度が一通り終わり米が水を吸うまでの時間を待つ間の暇潰しを兼ねてテレビを点けた

パチンと画面が音を発しスーツ姿の女性アナウンサーの顔がこちらを向く

学校に出たときからチャンネルは変えていなかった。昔に比べ見る番組が随分減ったと思いながら彼は画面に視線を投げた

『では、六時のニュースをお伝えします』

画面の中のアナウンサーが時刻を伝える、ゲームセンターからはかなり早く引き上げたが随分と時間は経っていたらしい
アナウンサーがニュースを読み上げる。先日から続いている行方不明者に関するものの続報だった
夏ごろなのに時間の経過が早く思える

(・・・眠い)

新鮮味の無い出来事に呆れつつも彼は視界がぼやけているのを自覚した。

眠気に意識が翻弄されるのにも拘らず目の前の画面に映る女性は出来事を読み綴っていく、興味の沸かないスポーツニュースが殆どだ
政治のニュースも短い時間に報道されたが与党の議員が不正を追求されても辞任しないなどと言う最近ではありふれたものだった

(・・・眠いな)

瞼が少しづつ下がっていく
食事の支度が未だに中途半端に放置されている事は承知している、
承知しているのだが・・・

(・・・・・・眠い)

刀也はソファ―に寝転がり次第に瞼を閉じていった
閉めるのを忘れたカーテンの向こう側の光景が夕焼けで赤く染まっ
ていくのを眺めながら彼は意識を手放した
夏の日暮れは遅い。うつすらと今日最後の陽光の残滓が、窓越しに
刀也の身体を照らしていた

目が覚めた後に時計を眺めると意外なことに針は殆ど動いていなか
った

仮眠を取っていたのは、三十分ほど。実際に眠っていたのはたった
それだけの時間帯なのに大分疲れが取れてしまったかのように思える
あたりはすっかり暗くなっておりテレビ映像の光だけが周りを照ら
していた

刀也は電灯を点けた

そしてすぐに米を浸し始めてちょうど良い時間に起きたのを思い出
し、彼は炊飯器のスイッチを入れる

子気味良い、単純なメロディーが部屋の中で流れ炊飯の予約が終わ
った事を主人に伝えた

付けっ放しのテレビを見る。速報の時間は過ぎ、なにやらテレビの
中ではコメンテーターが現在の政権の方針について議論を始めてい

る場面らしかった

政治には全く関心が無かったのと、カメラが肥太ったコメンテーターの脂ぎった顔を写した為に気分を損ねた彼はテーブルにおいてあったリモコンでいくつかチャンネルを変える

次々に移り変わる数々の番組……

有名時代劇の再放送、複数の美少女が悪人を倒す幼児向けの単純なストーリーでの今ネットで流行っているらしいアニメ、更に老人向け英会話教室といった番組に切り替えていく。

が次々と画面の中で切り替わった。しかし、そのどれにも刀也のの関心を誘うようなものは無かった

惰性のままにテレビを点けていた刀也は電源を切った。

やることも無くなったので、また横になり目を閉じるが、一度仮眠を取ったせいかなかなか寝付けず事が出来ない

米が炊けるまでおおそ一時間勉強しようにも授業の内容はテストに問題ない範囲で覚えてしまっている

成績は所詮、教師に対するステータスとその後の進路におけるアドバンテージでしかないと彼は考えていた。学校の授業にも特に興味をそそのめるものや自分の生き方を決定付けるもの

ではなく、只社会的に順応していくだけのシステムであるという認識は随分と前から変わっていない

自分は普通に生きて、普通の生活をして、生きて行ければそれで良かった

最大公約数の幸福さえ認められていればそれ以上は望むまい、高校二年生にしては老成すぎだとも自負してはいるが特に問題に感じた事も無いのだ

自分が周囲から浮いている事も、感性すらも異なるのは理解しているだからこそ刀也は静かに生きて居たかった

何も映し出されていないブラウン管を眺める。空虚な画面はまるで今の自分のようだ
テレビの喧しい音声が消えた空間の中でただただ炊飯器のタイマー音だけが鳴っている

狭い空間のはずなのに今はここの居間がただっ広い空間に感じられた床の上にうつすらと埃が募っているのが見えた。部屋は少し散らかっているらしい

掃除しよう、と思った

そのときだ。視界に『あれ』が目に入ったのは

それは直視するまでは長い棒のような形をしているようにも見えた。だが、それは手にとって見ると棒というにはいささか装飾が過ぎるだろうモノだった

それは、黒い刀だった

「・・・あ」

刀也はそれを刀だと思い出した瞬間にそれを取り落とした

あれを、、黒い刀を手にとった瞬間に肌が粟立ち氷に触れたときのような寒気と途轍もない不快感を彼に齎したからだ

体が脱力していく、そういうえば昨日にも似たようなことがあった彼は眼前の窓を見上げた、それは昨日の悪夢が夢ではなかったとしたら割れているはずだった

自分が人間のような何かからあれを奪い取り使い方もろくに知らない武器を用いて何かを窓から叩き出したのだから

黒い刃を持つ刀は実際に現実存在する事を示すように電灯の光を

鈍く反射しつつ、その場に自らの存在感を持っていた

（夢じゃなかったのか・・・？）

刀は黒い刀の柄を手に持つ、柄の感触はまるで使い慣れた調理器具のように彼の手に収まる、それと同時に先程まで感じていた刀の重量が消失し

まるでこの刀自体が軽くなったかのような錯覚を彼に覚えさせた。

刀は重いと聞いていたがこうも軽いものなのか？

試しに一度振ってみようかとも思ったが、粉々に割れた筈の戸のガラスを見て諦める

昨日、このガラスが割れた音で付近の住民が苦情を出さなかったか少し心配になったが、ガラスは割れてなど居なかった

（窓が直っている・・・？）

昨日から色々記憶が抜け落ちている。どうしてこんなことに今まで気付かなかったのだろうとも思う

夢の中の自分が覚えているのは何かの力に引き摺られるように刀を振るっていたと言うことだけ

ならば何故、夢の中の刀が今ここに存在しえるのか？

刀身を見つめる。夢のような脈動は感じられない、どういう訳か只の骨董品に成り下がったらしい。元からそうかもしれないが

そもそも物好きの時雨が勝手に何処と無く持ち込んだものかもしれない

黒い刃の表面には日本刀に見られる波紋は存在せず、複数の石英の結晶がキラキラと光るように電灯の明かりを刀身に反射させて様々な淡い色味を放っている

この時彼は、箆笥の中にほური出してあるであらう、使われていない白い雑巾を取り出す事などすっかり忘れてしまった

よくよく見ると刀身はただ単に黒いのではない、複数の深紫、濃紺、濃緑の不規則な形で収められた鉱物が、まるで宝石のように深く、淡く、虹の様に光の加減、見る角度によって輝き

様々な表情を彼に見せている。まるで縮小された宇宙を垣間見ているような感覚だと思った。金属の代わりに鉱物で製作したのだろうか？謎は尽きない

綺麗だった。宝石でもここまで深みを湛えた輝きは再現できないのだらうとも考えてしまう。この刀は人を斬る為に鍛えられたというよりも、

美術品として製作されたのではとの錯覚に陥ってしまう。普通に金属を鍛えて刀を打つのならこの刀の様にはならない筈だ、黒みがあった深紫色の結晶の輝きは金属を鍛えても刀也の知る範囲内では獲得は出来ない

この刀は純粹に鉄を高温で鍛えて造られたものではない事ははっきりしたが、金持ちの道楽で作られた美術品と言う訳でもないらしいそれに、昨日の出来事が夢でないのならこの刀はれっきとした武器の役割をも兼ね揃えているのだ

（これは・・・何なんだろう？）

そして昨日の強盗を撃退したもの、黒い刀身を持つ異様の刀。強盗が盗もうとしていた時雨の私物を盗み出そうとしていたときに無我夢中で奪い返したもののなか
それとも強盗が盗むために宿主を脅す名目で使っていたのかは解らない

蘇るのはこの黒い刀で男の脇腹を抉った感触

「半鬼・・・氣・・・・。まったく解らない」

疑問を口に出してみても思い当たることなんて一つも無い

あの強盗の言っていた言葉が頭の中で再生される。この刀と関係が有るのかどうかは解らない、昼間あったあの女が言っていた暗殺者なのだろうか？

なら何故自分を狙う？あの女が言っていた『機関』とはなんだ？

今まで聴いたことの無いような謎のキーワードが彼の頭の中をぐるぐると回るだが『氣』

疑問が口について漏れるが彼自身にもそれは良くわからなかった。

昨日の出来事はまるで白昼夢のようによく思い出せない。証拠らしきものと言えばこの刀と割れたガラスだけなのだ

もしかしたらあれは全て夢だったのでは？そう思えてしまうときも有る。今となつてはそれを示すものはこの刀しかない

刀也はこの件に関して考えるのをやめた。夕食の準備もある。時間を無駄には出来なかった

ふと、再び柄を握ってみようとも考えたがそうする意味が解らないので止める。重みそこそこはある、素人目にも本物の刀なのかもしれない

刀身を鞘に収め、取りあえずソファの上にそれを投げ出す

カラン、と刀身と鞘が内部で触れ合う澄んだ音が聞こえたがその後の彼の頭の中には刀など見ていなかったかのように、しばらく掃除していなかった自室と居間をどのように片付けるかで頭が一杯だった

二時間かけて部屋の固唾家がある程度済み、炊飯器の中に張った米

がふやけてしまっていた事に彼が後悔するのは外がすっかり暗くなつた頃に刀也はピラフのみを自炊する

おかずはインスタントのコーンポタージュだ。本来ならば、これも自炊したかったのだが時間が遅くなつたために自重した

調理の時間は炊飯を除くと一時間と必要はなかつた

「・・・いただきます」

広いテーブルにぽつんと一人。料理を並べる刀也

かつてはこの場所に母が居たのだ。高校生の息子が居る割りに若すぎる容姿を持つたあの母が

「そういえば、母さんが居なくなる前に色々調理のことを教えてくれたんだっけ」

二年前、時雨が失踪する前になぜか彼女はいきなり刀也に調理の方法を伝授し始めたのだ

もしかしたら母は何か感じていたのかもしれない、自分に何か起きるのを、刀也の知らない所でトラブルに巻き込まれるのを

しかし、その可能性を彼は考えたくも無かつた。もし、それを信じてしまつたら時雨が戻つてこないような気がしたからだ

あの時もそうだった、自分は高校入学祝のときに母が帰つてこないのに不安を覚えて、調理して料理を用意して彼女を待っていたのだしかし、母は帰らなかつた。刀也は次の日も食事を二人分用意した、もちろん帰つてこない。次の日も食事の用意をした

それから、しばらくの間調理は控えた、コンビニやスーパーの惣菜で済ませたことも数え切れない

なら、何故今日に限って自分は調理したのだらう。寂しかったからだらう、と、刀也は認めたくなかつた結論を下した

刀也が彼女の分の食事を作らなくなってもう幾日経つ

この空虚な日々慣れてしまった自分を刀也は卑怯者だと感じた。自分は時雨から色々教えてもらった、なのに彼女には何も返してあげることが出来なかった

（もう帰ってこないなんて事・・・無いよな）

夜十時を回った遅い夕食を終え、再び眠りに着いた、一抹の不安を胸に掲げながら

悪夢より、非現実的な出来事なんかよりも母が帰ってこないのは何よりも辛かった、今日の少女に声をかけたのも寂しかったからに違いないのだろう

刀也は時雨が帰ってこないことに慣れた自分を嫌悪した。心身共に疲労しきった彼はすぐに眠りの世界に落ちていく

「・・・お休みなさい、母さん」

明日こそ時雨が帰ってくるようにと、ささやかな願いを胸に秘めながら刀也は眼を閉じた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9793f/>

月光下の円舞曲

2010年10月12日02時27分発行